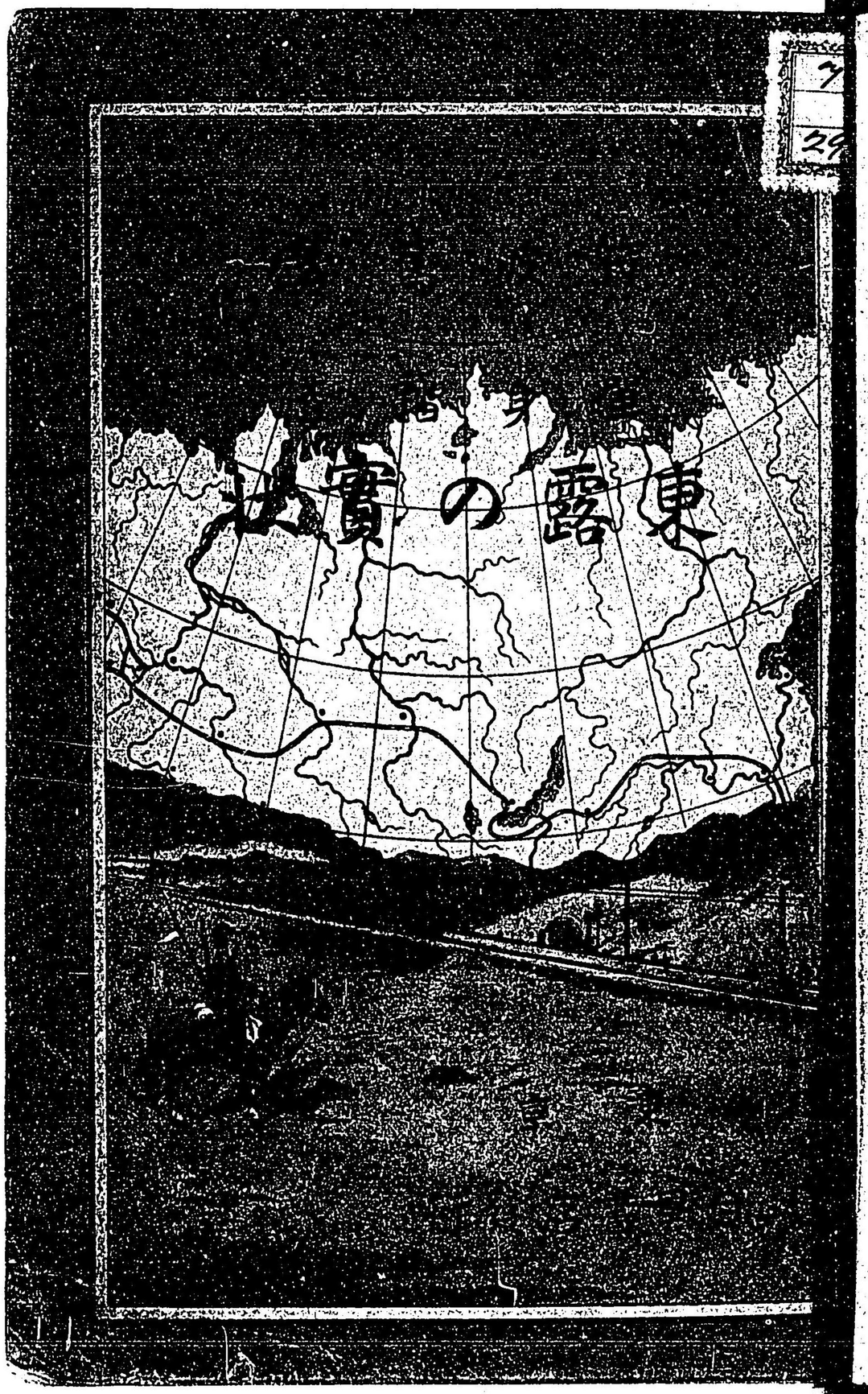

東露の實況

筑波篤著

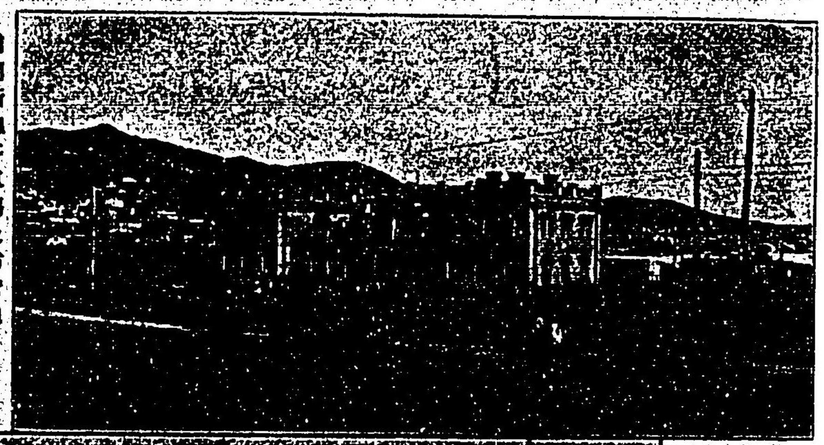
東露の實狀

簿籍調査

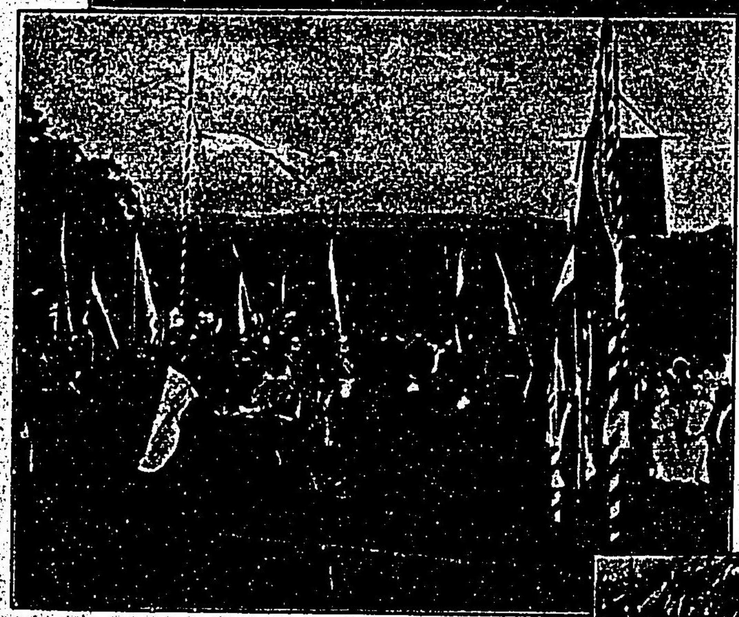
東京　目黒書店發兌

著者　筑波篤

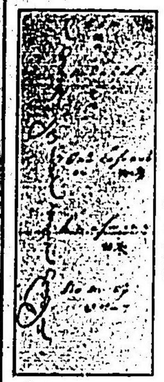
於黑龍州武府攝影



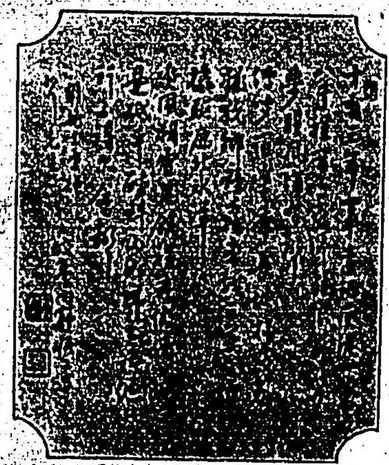
滿鐵新疆伊東橋及市街地



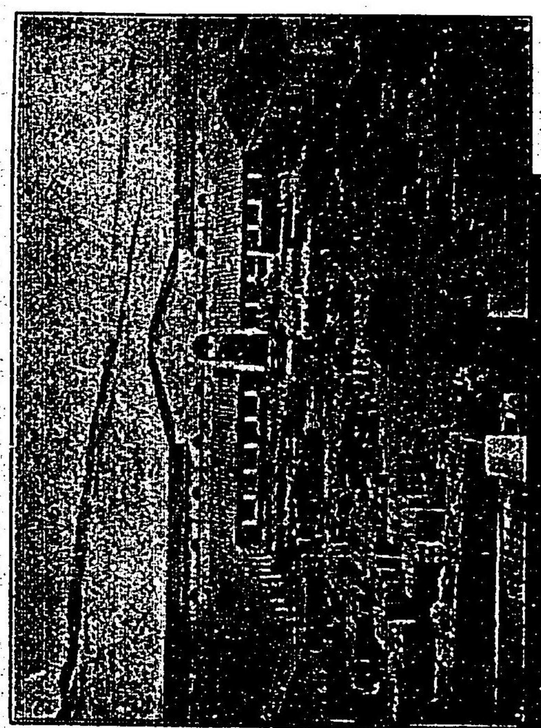
千八百九十七年八月十六日
東清一名鐵道起工式



ブリヤード人ノ文字



匈奴ノ後裔「ブリヤード」人種

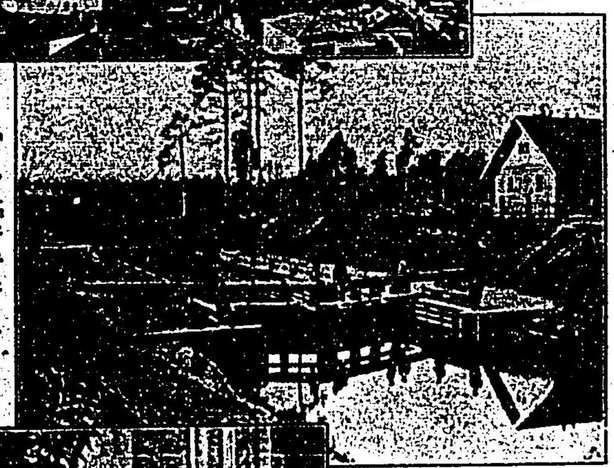


武昌ニ於ケル「キャンベル」鐵路橋梁及鐵道

漢口港ニ於ケル水船及其附屬設備

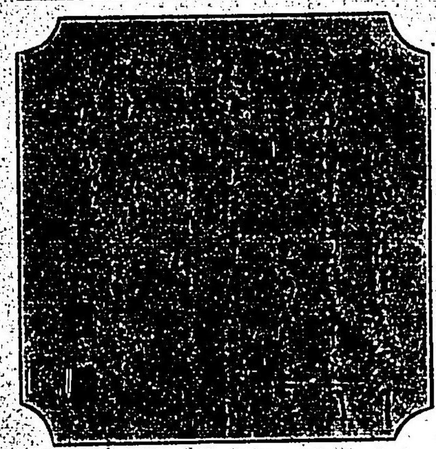
漢口ニ於ケル「ドック」

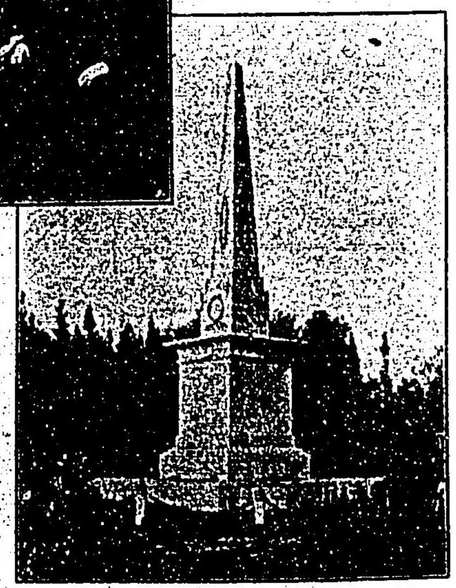
ウスノヤールスク町全景



「オビ」「エニセイ」連絡の運河

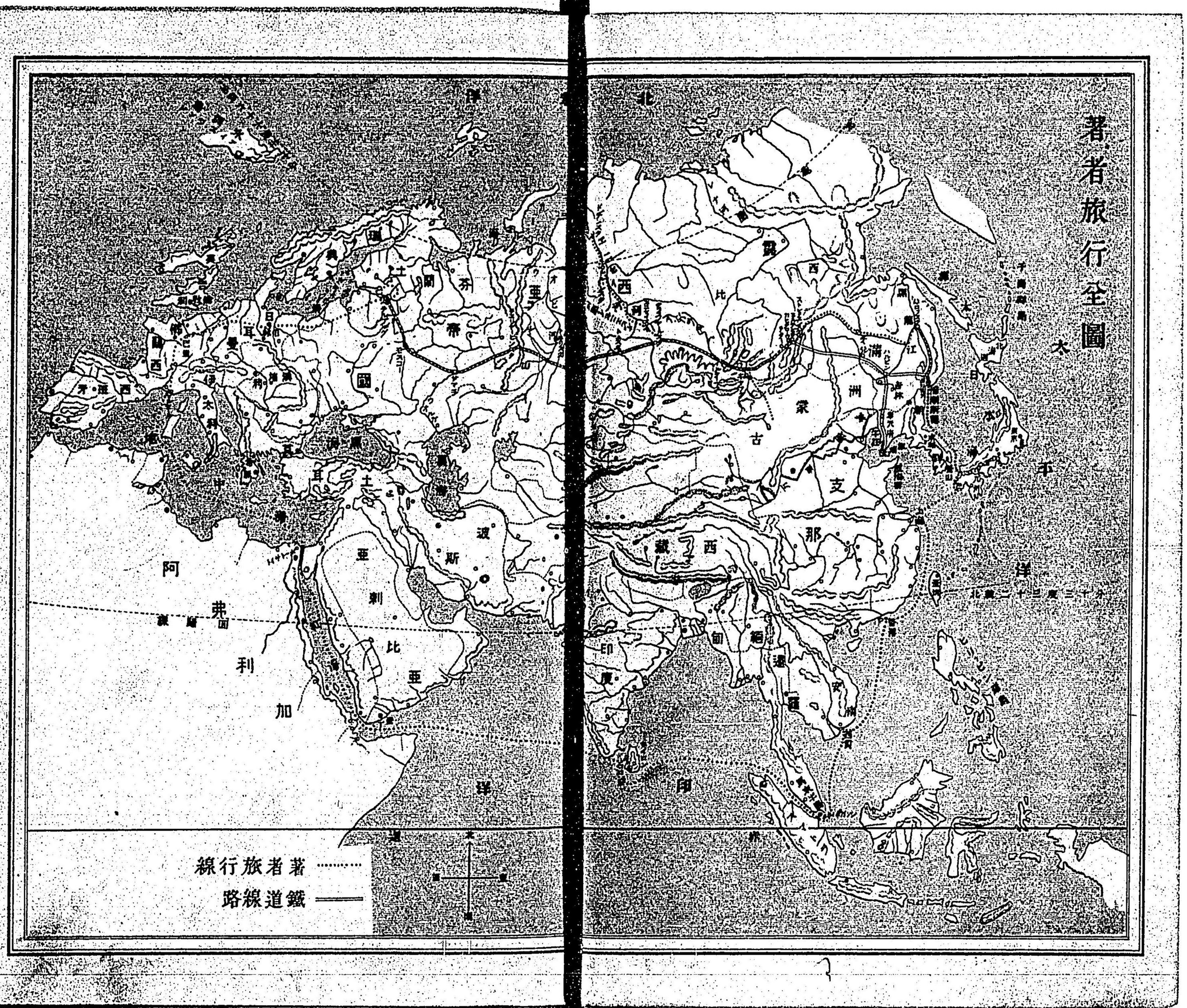
北極圏内ノ「サモイド」人種ト流刑露國人



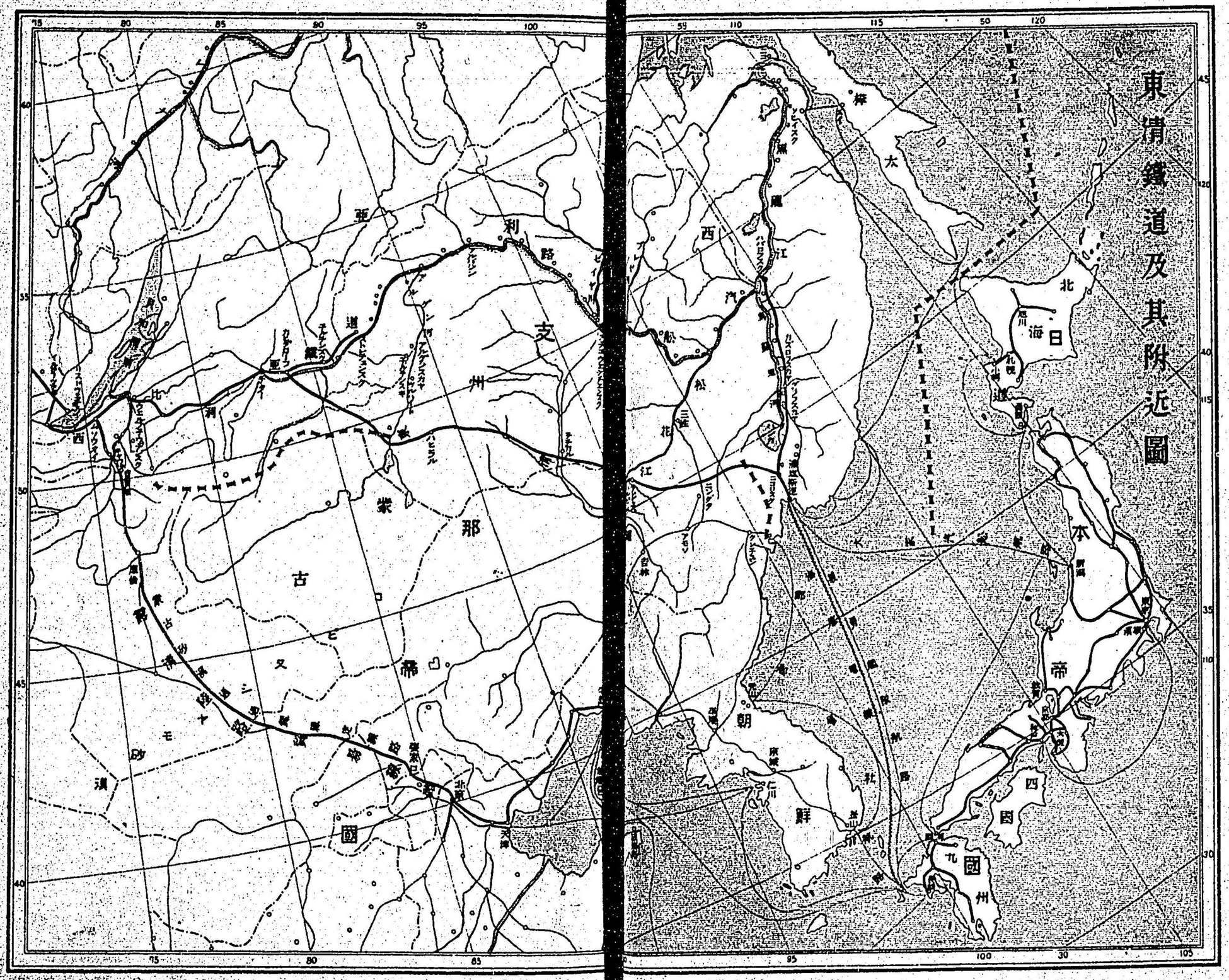


亞利比西町しクスリポトノ在征服者ノエルマークしクノ紀念碑

著者旅行全圖



東清鐵道及其附近圖


亞
利
支
那
蒙
古
帝
國
朝
鮮
日
本
帝
國
四
國
九
州
北海道
太
平
洋
西
伯
利
亞
鐵
道
支
那
鐵
道
ハルビン
ウラジオストック
ポシエット
ハバロフスク
ニコリスク
ブラゴベシチェンスク
ヒロ
ヒ
ヒ
ヒ

昔、張騫が大宛月氏に使して、漢土西域の消息を通じてより、近くは「スタンレー」が亞非利加の深林に入りて「ニヤンザ」湖に達したるに至まで、幾多の遠征家輩出して、文明艱化、人類混蕩の啓端をなせしと雖も、我國民は遠征歴史に數行の文字だも加ふる能はず、適元和偃武の前後、南島經略の志を懷きて海に入るもの少からざりしと雖も、其事沓々として傳らず、近時に至り興國の殷運に乘じて、奮勃の志を懷き、或は大陸を跋渉し、或は炎南無人の嶋嶼に至るもの少からず、其事已に壯にして、また我國民が遠征家を産するの力なきにあらざるを示すに足る、中に就て筑波君の西比利亞遠征の如きは、最も冒險にして、最も艱苦を極はめ、而して最も快心なるものゝ一なり、一世の先進、若し善く其報告を用ゆるあらば、其利益する所量る可からざるものあらん

筑波君は明治二十七年を以て西比利亞に入り、三十四年を以て

東京に還り、熱天、濼地、玄氷、白雪を踏むもの前後八年、邦人にして北緯六十六度半の北極圏内に侵入したるもの、恐くは君を以て最初とせん、此事已に自から其旅行の、如何に冒險にして、如何に君が忍耐力を有すかを説明するに足る然れども遠征家をして單に險を冒すに止まらしめば、唯一場の演劇を見るに過ぎずして、何等一世に寄與する所あらざらん、故に遠征家は其冒險忍耐の心性に加ふるに、周到なる觀察力と科學的嗜好と、算數の思想となかるべからず、出來得べくんば、之れに加ふるに、地文、地質、氣象、天文、人種學、土地命名學の一端を以てせざるべからず、而して君の記する所を見るに、此點に於て、亦粗、世人の知らんと欲する所を充たすに足るを覺ゆ、余は中心の歡喜を以て此書を江湖に推薦す」

千八百九十八年那威人「ドクトル、スヴェンヘジン」露國より「世界の屋根」と稱せらるゝ「パミール」に入り、崑崙の雲を踏みて、戈壁の大漠を渡るや、歐洲人は之れを喝采して、爭つて其風采を望まんと欲す、余また其旅行記を讀みて、遙かに之れを嘆美するの禁ず可からざるを覺えたりき、此時に方りて余固より筑波君が遠征しつゝあるを知らざりしなり、今君の著書を見れば、「ヘジン」と相前後して、遠征の途にありしものなるを知る、夫れ「ヘジン」の遠征は其危險と興味とに於て西比利亞旅行に優るや、固より論ずるまでもなし、然れども彼は瑞典王の保護の下に企てられしものにして、財用に富み帶中に學士あり、此は一介の布衣、自から働きて衣食し、且遠行す、是二箇の遠征を比較するに於て、打算せざるべからざる所なり、而して一は即ち隆名歐洲を震轢し一は即ち知るもの少なし、思ふに遠征家も、また幸不幸あるか、余は君の事に感じ、我社會が此種の事業を認識するに於て公平ならんことを

望み我貴紳豪族が此類の人を助くるに於て、寛大ならんことを望みて已む能はざる也

明治三十六年九月

竹越與三郎誌

北行筑波君は北越の人鐵心石腸、言を後にして行を先にす、一旦決然として起てば後志の山黑龍の水も其歩を沮む能はず氷流雪山も其志を屈せしむ能はざる也遡きに明治廿三年北海道を探檢して深く「アイヌ」の山郷を窮め歸來其探檢誌を公刊して大に北地の開拓に資す、余の筑波君を知れるは始めて此著に在り、後四年君は更に海を超えて露領沿海州を視察し遂に明治廿九年六月西比利亞遠征の途に上る余の筑波君と相見たるは實に此征途に上る前數日に在り、都新聞社特に囑するに旅行記の寄稿を以てす爾來年を閲する事六年行程約三萬露里君は歩を浦鹽港より起して西比利亞の曠野を横斷し雪を嚙み氷に臥し寒夜夢常に暖ならず或は囚虜の酷待を受け或は剽盜の迫害を蒙むり備さに艱苦を嘗め遂に克く烏拉爾の山嶺を踏破して歐露に入り露都に留まる事歳餘歸途歐洲諸國を巡歴し生きて再び

故郷の土を踏みたるは明治三十四年の初冬松柏晩翠に誇るの頃なりき當時西比利亞の鐵路未だ全通せず行政上の秩序未だ整はず依然寒寥を極めたる蠻野たりしが故に其旅行の成功は實に福島少佐に次ける名譽なりし也而も君は自から進んで成功を誇らず退いて其旅行記の修訂に從がひ孜々として倦まず、稿成り册成るや來りて余に序せんとを求む、蓋し此の書や前の拓殖指導北海道實況と共に君が半世の熱血を披瀝せるもの今代著述界の雙璧となすに足る、

今や極東の風雲暗憺として天下の耳目は黑龍江一帶の地に集中し形勢甚だ穩やかならず、此時に當り筑波君の探檢記公刊せらる西比利亞の地理、風俗、物産、商工業、鐵道、軍事其他行政百般の事收め來りて觀察精透記事正確之れを圖書館内に作成する泛々たる著書と日を同ふして語る可からず其時務に益し天下に資するや大なり余豈一言の讃辭なくして可ならんや則ち序辭を供へて此書の發刊を祝す

明治三十六年九月

於都新聞社　雲外宮川鐵次郎誌

凡例

一本書は編者が前後八ヶ年遠征の途次滿州に沿ひ蒙古を過き北極圏内に入り烏拉爾山を踰え歐露に出てたる東露の探檢記を輯錄したるものなり

一本書は露國最近著書西比利亞大鐵道西比利亞案内其他近刊の諸書を參考とし及び都新聞續載の觀察旅行西比利亞遠征を骨子としたるものなり

一編者が探檢當時の西比利亞交通機關は之れを現時に比し當さに小一變の觀あるべしされば新殖民地萬般の實狀は新舊相折衷して其變遷を明示し最近の材料に因りて之れを增補改竄なしたり

一本書中地圖は露國最近刊行のものと先進者の實測圖に據り

更らに改補したるものなり

一本書中編者が露都に在るの日或人の爲めに草したる二三節あり更らに改補增訂して之を編入なしたり

一本書中地名は重もに露國人慣用の句調を用ひ假名にて記したる名詞は上下に「」を附せり

一經度は英國「グリンツイチ」及び露國制定のもの(露都を零度としたる)を用ひ寒暖計は攝氏を用ひたり

一本書中度量衡貨幣は總べて露國のものを用ゆ乃はち一露里は我九町四十七間、一「サージェン」は七尺五分、一「アールシン」は二尺三寸五分、一「デシヤーチン」は壹町壹反九畝八歩、一「プード」は四貫三百六十目、一斤は百〇九匁、一留(ルーブル)は時價壹圓五錢、一哥(カペイク)は壹錢餘に當る

一本書の地圖中點線は編者が旅行の經由線路を示せるもの浦鹽斯德より「エニセイ」河遡上迄旅行里程大凡一萬露里を本編とし中央西比利亞より歐露に入り珍田前駐露全權公使に隨行して歸朝せる迄を續篇となしたり

一本書は編者が散佚せる稿本を集めて編述したるものなるが故に杜撰粗雜を免れざる處多からん讀者幸に敲斧を與へられなば余が本望なり

單身踏査 東露の實狀目次

◎總論……一頁

○西比利亞なる名稱の解釋○西比利亞開發の起原○胡索克の東進南下○西比利亞都邑の創設○西比利亞交通の大要

◎沿海州……八頁

其一　○浦潮斯德港……八頁

○浦潮斯德なる名稱の解釋○地位○地勢○戸口○港灣○沿革○港灣の結氷と解氷期○建築物○工業○商業○重なる輸出入品○重税品と無税品○海陸の交通及び貨銀里程

其二　○西比利亞遠征上途……一六頁

○南烏蘇里鐵道線路所觀○「ニコリスク」市○「イマン」碇繫場○烏蘇里河

の概略○烏蘇里河所觀○烏蘇里河畔の滿州馬賊

其三　○「ハバロフスク」府……二五頁
○沿革○戸口○建築物○地勢○商業○產物○市街○公園○巨傑「ムラウヤヨーフ、アムールスキ」伯の半世

◎黑龍江上所觀……三一頁

其一　○「ハバロフスク」「ブラゴウエシチエンスク」間……三一頁
○黑龍江の概畧○露淸疆界の光景○小興安嶺○黑龍江の屯田兵村○航行中の一與

其二　○「ブラゴウエシチエンスク」府……三七頁
○地位○沿革○戸口○該市發達の原因○建築物○商業○屯駐軍隊○氣候と交通

其三　○黑龍江の水運……四三頁
○黑龍江航通の歷史的沿革○汽船隻數○解氷と結氷期○黑龍江商業汽船會社○黑龍江と太平洋との連絡○汽船の貨銀罐汽力搭載力

其四　○「ブラゴウエシチエンスク」「ストレチエンスク」間……五〇頁
○露淸の新戰場「サハレンウラ」村○露淸の古戰場「アルバジーン」城○勇將「トルブヲーン」の墓○露人の大陸的旅行者○「イグナーシ」兵村

其五　○「ストレチエンスク」町……五八頁
○地勢と交通○市街○建築物○上黑龍江渡船の構造○住民○軍隊

◎後貝加爾州の一……六一頁
其一　○第一回の遭難……六一頁
○花崗石山の探檢○哨兵線を破る○兵士の脅迫士官の威嚇○身躰搜索○危機一髮「ナザーロフ」少佐の寛仁
其二　○「ストレチエンスク」「チルチンスク」「チタ」間……七〇頁
○上黑龍江の航行○「チルチンスク」逆征○「ミルサーノワ」屯田兵村○「チルチンスク」町○沿革○住民○戸口○建築物
其三　○第二回の遭難……七八頁
○驛傳馬車○上黑龍江畔の屯田兵村○「エンガダ」河の洪水○驛傳の構造○南京蟲の害○旅行者の不便と困難○奇異の出來事○深夜の旅行○水域の漲溢○驛傳の流失旅客の溺死○「カヒダローフ」屯田兵村

其四　○東清一名滿州鐵道……八五頁
○東清鐵道布設に對する露國民の意向と希望○故帝「アレキサンドル」三世の遺訓○東清鐵道布設申請の二口實○滿州の實權と撤兵○鐵道布設の目的と希望○蠶食的政略の順序と方針の內容○三延長線路○大停車場○起工點○千八百九十六年八月二十七日の露清條約○莫斯科街道水害の慘狀○「チター」府近の低溫
◎後貝加爾州の二……九九頁
其一　○「チター」府……九九頁
○地位と地勢○戸口○沿革○建築物○商工業○徒步旅行
其二　○第三回の遭難……一〇一頁
○梁山泊流の强盜○茶中の麻痺劑○昏睡八時間○一發の銃聲と鮮血淋漓○死活の前後

其三　○單騎賊を追跡す……一一一頁
○烏拉爾强盜○鐵道官吏の慰籍○「ベクレミス」湖畔の感慨○因古塔河畔の探檢○逆征

其四　○後貝加爾州の氣候……一二一頁
○氣候と健康○空氣乾濕の程度○地下の凍結○降雪と寒氣○河湖の結氷と解氷期○四季の溫度○井中の結氷と地震との關係○太陽の出沒○大陸旅行の困難

其五　○遠征中絶と騎馬旅行……一三〇頁
「ブリヤーツキ」胡索克の厚意○「キノーン」湖畔の牧羊○五月五日の寒氣と降雪○松林中の露宿と異狀の大水禽○「ウエルン、チツチンスク」町○戸口○建築物○住民○地勢○商業

其六　○第四回の遭難……一四四頁
○南貝加爾山の大火○野火の包圍○人馬の危急○奇遇の老翁○日本の古器物○「ブリヤーツキ」人種の衣食住と馬術と宗教○「セレンギンスク」町○貝加爾野火の被害

其七　○露清疆界……一五七頁
○「トロイツコサフスク」町○地位と地勢○建築物○露清陸路貿易品取引所○市街○在住の各人種○蒙古人の宗化

其八　○後貝加爾胡索克……一六一頁
○「ブリヤーツキ」胡索克の馬術と氣風○露化○軍人としての缺點○軍人と宗教○故帝「アレキサンドル」三世の三我主義○露人の敬神尊王○宗教の潛勢力

◎清領蒙古方面……一六五頁

其一　○賣買城……一六五頁
○露清の境界○「キヤフタ」町○賣買城の地位○市街○城内の清人○露清人氣質の差異○賣買城の主權者

其二　○蒙古砂漠通過鐵道豫定線路……一六八頁
○砂漠通過鐵道布設豫定の發表○故帝「アレキサンドル」三世と今帝「ニコラヒ」二世の對世界的主義○露國同化の潛勢力○砂漠通過鐵道の導火線○無限の大野心○「キヤフタ」北京間の豫定線路○蠶食的政略の内容○砂漠通過鐵道布設後の清國運命

其三　○露清陸路貿易線路所觀……一七五頁
○貿易線路の概要○「ブリヤーツキ」商隊○「セレンガ」河の寒凍○磁石の威力○氷上の露營と囲陣

其四　○第五回の遭難……一八五頁

南貝加爾山單身徒步跋渉○山頂の寒氣○山道の光景と一軒家○南貝加爾山の猛獸狙撃○獵狩隊の來援○「ムソウオイ」村

◎「イルクーツク」縣……一九四頁

其一　○貝加爾湖横斷……一九四頁
○貝加爾湖の長巾面積水深○水族○湖景○解氷と結氷○貝加爾瓦○碎氷船「バヒカル」號○「リーストウエチノイ」村○地位と交通○税關

其二　○「イルクーツク」府……二〇一頁
○沿革○市街○建築物○「アンガラ」河○交通○商工業○日本品の聲價と缺點○諸工場

其三　○「イルクーツク」府の氣候……二〇七頁
○盛冬の寒風と光景○春秋の溫度○氣候と犯罪の關係○犯罪者が犯

罪の目的を達する手段○司法警察の内容○犯罪の人種○犯罪の期節
○市内警官の奇習○年俸三百留の長官○犯罪者と官邊との關係○郊外賭博の異觀

其四　○西比利亞大鐵道……二一五頁
○沿革○七區の延長線○列車の種類と速力搭載力聯接車數○客車の構造○各列車の發着時間及び乘員數貨銀○鐵道用の車數○貝加爾湖の運輸事業○千九百年の北清事變に觀察したる各種列車の運行力の大小○西比利亞鐵道の四大缺點○烏拉爾より貝加爾湖間汽車發着の時間○戰時に於ける各種軍用列車の速力搭載力接續車數乘員數○糧秣武器彈藥の輸送

其五　○「イルクーツク」「クラスノヤールスク」間……二三九頁
○西比利亞の三難路○流刑人の村落○「ニージヂウヂンスク」町○地位
○沿革○人口○「カンスク」町○地勢○建築物○「クラスノヤールスク」町
○沿革○黃金時代○地位と交通○建築物○戶口○勝地としての「クラスノヤールスク」町

◎「エニセイ」河遠征……二四九頁

其一　○「エニセイ」河流下……二四九頁
○「モスクワ」號○「カザチンスク」村○「トングース」河の合點○「エニセイスク」町○沿革○市街○戶口○建築物○地勢○商業

其二　○水運の効力……二六〇頁
○水路の利用と西比利亞鐵道の速成○水利の鐵道に劣らざる事實○「エニセイ」河の航通○「エニセイ」河流船會社○「アンガラ」河及び歐亞の航通○冒險的航海者「シドロフ」氏及び英人「ウエッギンス」氏○「オビ」「エニ

セイ」運河

其三　○「エニセイスク」「トルハンスク」間所觀……二七三頁
○「モスクワ」號の坐洲○小舟「エニセイ」河流下○樹林の短少○水族の富
豐○羽蟲の來襲

◎北緯六十六度以北の實況

其一　○「トルハンスク」町……二八一頁
○市街と家屋○沿革○戸口○住民○建築物○氣象觀測所の十二ヶ月
平均溫度○六月二十七日の寒氣と降雪○雲霧中の太陽○晴天の太陽
○六月十六日より二十六日迄の太陽出沒の光景○盛夏の時氣○就眠
と起床○十二月十六日より二十六日迄の太陽出沒の光景○冬期の「ト
ルハンスク」住民○北部の猛獸と獵狩

其二　○北部の動植物……二八七頁
○馴鹿○鹿皮の効用○鹿乳の効用○土人の飲料と食品○北部の遊牧
人種○短矮人種の「サモイド」○北部の草木と發育○羽蟲○旅行鳥○水
禽の世界○水族の豐富○蔬菜○「トルハンスク」の飲料水○商業と物價
○一年一回の交通と人智の程度

其三　○「トルハンスク」「ドジンスク」間所觀……二九四頁
北極圈內に入る○北緯七十度近き「ドジンスク」村○土人○北極圈內の
家屋○商業○酋長「アルヘントフ」氏○北極光の新說○北極圈內の雲と
風と雪と地熱○氷中の穴居○氷室內の溫度○火食せざる理由○酋長
の牧場と馴鹿の特性○飼料

其四　○「エニセイ」河遡流……三〇三頁
○鹿皮の小船○兩齒の櫂○北極圈內の狗○狗の曳船○糯導狗○狗の

食料○指揮の鈴○十五頭の曳船隊○露營○千九百露里餘の遡流

單身踏査 東露の實狀目次 終

單身踏査 東露の實狀

總論

筑波篤著

露人は常に言ふ「西比利亞は單に限られたる千二百萬平方露里の西比利亞に非ずして限られざる露領の西比利亞なり其故は西比利亞なる文字は露語の「ゾロトイ、ズニ」にして「ゾロトイ」は金「ズニ」は底と解釋せらる即ち金庫を意味するものなるが故に蒙古滿州其他も之を包括して西比利亞と總稱するを得べしと荒唐ならざる此數句は三百年以來の歴史に於て已に事實を證明なしたりされば十六世紀の半に於て「ドン」胡索克の領袖「エルマーク」が韃靼民族の手より金庫開鎖の管鍵を奪ひ去りたる爾來此簡單なる文字は次第に膨脹して遂に千二百萬平方露里に及び幾度か世界の地圖を變色せしめた

りしが果然事實上今や滿洲蒙古の或部分さへ西比利亞なる文字中に包括せられ露人をして亞細亞大陸の各處に此簡單なる文字を常用せしむるの事實は漸くに現はれ來りぬ

未來の西比利亞開發者として胡索克の領袖として軍人の花と歌はれ露人の標本と持囃されたる勇將「エルマーク」が半世の歷史は如何に目覺ましかりしか彼は實に露國膨脹の送風器たりしなり鐵壁を破碎する導火線たりしなり彼れは千五百七十九年歐露より少數の胡索克健兒を引率して烏拉爾の高原を蹂躪し「オビ」の大圓谷を蹴破し數星霜の南船北馬に四邊の韃靼民族を震懾せしめしが最後の一戰に果なくも「イルテッシュ」河の水底に萬斛の遺憾を沈めたり左れども殉難の死より放てる靈光は燦爛として絶えず隱見しつゝも彼が肉を飛ばし血を流かして遺したる破天荒地の一大事業は少數の歲月間に實効を奏するに至りたり

勇將「エールマク」が死後間もなく彼が遺志を繼ぎたる少數の胡索克は各所に轉戰しつゝ終に韃靼民族を征服し彼等の酋長「ケム、クチーム」を滅したりしが千五百八十七年に創立せられたる「トボリスク」町は實に健兒等が裔血の紀念とも謂つべし千六百〇四年には西比利亞の大都「トムスク」町は「オビ」河の支流「トミ」河畔に建設せられたり

狩比河域に於て掬くひ上げらるゝ程數多き魚族、麻畠の如き森林、無數の禽獸のみにては到底不撓勇敢の健兒等が野心を滿足せしむる事能はず間もなく「マンガジ」「ケーチ」方面の胡索克等は冒險的の遠征を企てしが八百露里の森林地を横斷して東行「エニセイ」河に達し千六百十八年此處に現今の「エニセイスク」町を創設して東行南下の根礎を定め此れよりは歩々東部に漸進して「レナ」河に達し千六百三十二年に於て北部の大邑「ヤクーツク」町は「マンガジ」胡索克が創設の紀念邑として西比利亞歷史上に指點せらるゝに至りたり、

勇將「エルマーク」が死後僅かに五十年の歲月を經過せる中胡索克の奇功に因りて世界の地圖は變色せられ廣大なる地積は本露に增加せられたりしが「ウラル」の高原より「レナ」の圓谷に到るべき道路は此時已に健兒等が冒險的遠征に因りて開かれたり奈かに此遠征の多難なりしやは意外にありしならむ縱令ひ敵に逢ふて恐れず水に逢ふて屈せず山に逢ふて撓まざりし勇敢なる健兒等も濃厚なる深林無數の湖沼峻嶮なる山嶽の爲めには前進の方向を定むる能はずして「レナ」河より黑龍江に達する道を求むるに苦しみつゝありしが遠征は屢々繰返されて屢々失敗し終に千六百四十三年に至り「エニセイ」河方面より「アンガラ」河の航路は開かれ間もなく現今東部西比利亞總督府の所

在地なる「イルクーツク」町は創設せられたり之れと前後して胡索克の領袖「ポヤルコフ」は百三十の健兒を率ひて「レナ」河の支流を遡ぼり黑龍江の圍谷に向ひたりしも黑龍江の支流「ゼイ」の上流に達したるのみにて遠征隊は水難疾病及び土民の爲めに之れが大半を失ひ遠征は中止なしたり而して千六百五十一年露清の古戰場として有名なる「アルバジーン」城は勇將「パヤロフ」に因りて黑龍江畔に築かれたりしが此れより三年以前には「ジエジキフ」が率ひたる胡索克の一隊は北洋を廻りて「ベーリング」海峽迄已に冒險的遠征を遂げたりき、

一挺の斧を腰にせる外定確なる目的なく精細なる地圖なく充分なる軍資なく鋭利なる武器なきにも係らず數次失敗したる遠征は數次失敗者に因りて繰り返されたりしが終に烏拉爾山より東部千二百萬平方露里の版圖を露領に加へたる「エルマーク」「ポヤルコフ」「ジエヂキフ」等の偉大にして千古不滅の功業は僅かに七十年前後の短歲月に於て實行せられたり概括すれば太西洋より太平洋に達すべき歐亞連絡の大陸經由線は此時已に之れが端緒を開き現今世界の一大事業として數へらるゝ西比利亞鐵道布設の導火線とはなりしなり

歐羅巴露西亞よりも二倍大なる地積を有する西比利亞全部が露帝「ツアール」の掌中に入るまでは決して容易の事には非ざりき有形の敵無形の敵と苦戰しつゝも數多き外部の刺擊と內部の挑撥との爲めに一張一緩主客屢々其地位を轉換せし事もありしが西比利亞の巨傑「ムラウヰヨーフ、アムールスキ」伯が現はるゝに至りて「ゾロトイ、ヂニ」なる金庫の鍵は烏拉爾山より日本海頭の全土開鎖の實權を敷衍するに至りたり之を露史に徵するに露國が北西の寒烈荒蕪の地に甘心する能はずして道を南東奮腹の地に求めむとし脆くも失敗したる顯著の一例を擧ぐれば千六百八十九年の「チルチンスク」條約に清國康熙皇帝の鐵拳に腦まされ爲めに南東に出づるの道を失ひたりしが此より千八百五十八年の愛琿條約に於て外交の勝利を獲取せし爾來は黑龍江の航通は開かれ同六十年の北京條約後は西比利亞中の最も豐饒にして且つ軍事上商業上最も樞要の地位に立てる南烏蘇里方面より北部は凡て露領に編入せられ太平洋の沿岸黑龍江口に兩頭黑鷲の國旗は立てられ此處に完く百七拾餘年間の復讐を遂げ彼得大帝が其當時に於ける對清策の失敗を嘲ると同時に康熙皇帝が强硬政略をも嗤はらひたりき而して此偉大なる功蹟を西比利亞歷史上に留めたるは巨傑「ムラヰヨーフ」伯にして伯が絕大の功業は露國が東行南下の政策を遂行する唯一の利器として現今露國の東洋政略に意外なる潛勢力を附加するに至りたるを其當時に遡つて考ふれば實に豫想

外の事實ならん

巨傑「ムラウヰヨーフ」伯が黑龍江を蹂躙してより北淸事件に滿洲人四千名殺虐を以て有名となりたる「ブラゴウエシチエンスク」町は「ゼイ」の要塞と與もに千八百五十六年に於て現今沿海州總督府所在地なる「パヽロフスク」町は仝五十八年に於て絕東の軍港浦潮斯德は仝六十年に於て前後創設せられ之れと同時に「トムスク」府を基點として太平洋岸に達すべき莫斯科街道も築造せられたりしが間もなく露國南下の政策に促がされて計劃せられたる西比利亞及び滿洲通過浦潮斯德港に達すべき鐵道布設案の申請は千八百七十一年に於て脆くも北京政府に拒絕せられたるを始とし西比利亞の富源を開發するに唯一の機關として露國の東行南下に無限の潛勢力を附與すべき交通機關の設計は屢々立てられて屢々放棄せられ千八百九十三年に至り漸くに西比利亞鐵道布設法確定せられ此處に一大交通機關の活動すべき機會は熟し來りたり

隙を得て蜀を望むは露國從來の主義なり機を執へて之れに乘するは露國が唯一の外交政略なりされば日淸戰爭は宿昔爾來露國が深く包藏しつゝありたる野心を遂行するに無二の好機會を齎らし來りしなり償金擔保を口實として大陸平和の保全を論鋒として鷸蚌の爭に利を占めたる漁夫の如き露國は千八百九十六年に於て滿洲鐵道の布設權を得同九十八年に於て旅順口大連灣の租借を得斯くして露國は西比利亞鐵道より直ちに渤海灣頭に出て南下の政策は殆んど完く成就するに至りたり此前後に於て「オビ」「ニセエイ」運河は開通せられ五千七百露里の水路は烏拉爾山と貝加爾湖とを連絡し露國水路探檢隊は「オビ」「エニセイ」「アンガラ」の諸川を浚渫して航行を安全ならしめ英西滊船會社は起りて北洋回航歐洲の諸港より西比利亞の中央に達するの聯絡水路は作られ其北部にありて北極圈內の「オビ」江畔より烏拉爾山を踰えて「カール」灣頭に達すべき北極鐵道は着手せられ北米の「アラスカ」より「ベーリング」海峽を過き西比利亞北部の荒野を斜めに橫きりて中央西比利亞に達せんとする米西鐵道さへ計劃せられんとし今や南下政策中の重なるものとして蒙古砂漠通過豫定線路は期年ならざる中に事實として現はれんとするに至りたり

要之西比利亞の交通機關の備らざる其當時に於ては絕東より露京に達する旅行の日程は幾許なりし歟少なくも三ヶ月內外を費せるにも係らず二十年後の今日に於ては之れが十分の一にも足らざる日數即十日間に發着し得可きに至りたりされば露國が東進南下政策の主眼とせる交通機關は玆に一段落を告けたるものと言はざる可からざるも翻つて露國が滿州問題に受大刀となりて猶ほ能く敵の呼吸を計るの傍ら北韓

の經營に餘念なきを見れば露國の東方政策は那邊に止まるべきやを疑はしむるも蹈着する處は危險なる血を流す戰爭にあらずして安全なる平和の戰爭即ち殖產工商業の發達に國力を增進せしむる百年の大計を謀るにあるは識者の首肯する所ならむ、

○沿海州

其一　浦潮斯德港

浦潮斯德は露語之れを「ウラジ、ウオストーク」と稱す「ウラジ」は鎭を意味し「ウオストーク」は東に解釋せらる即ち東方を鎭ずるの義にして支那人之れを海參威と唱ふ露人の常用語としては「絕東の要鎭」「慈の雛」「東洋のセバストーポル」等あり左れば露國が愛琿條約に外交の勝利を得北京條約に世界の地圖を變色せしめたる爾來は東行南下の策源地として東洋艦隊の根據地として世界の耳目を聳動せしめたると幾皇霜なりし歟は數多き事實に因りて之れを證明し得可し

地位、北緯四十三度六分五十一秒東經百三十一度五十四分二十一秒に位し黑龍灣の東岸彼得大帝灣に突出したる「ムラウヰヨーフ、アムール、スキ」半島の南岸金角港の西北に横はりたる一大市街なり前面は金角港に臨み後部は高丘を控ゆ市街の高處は海面を拔く事四百八十七呎東西に長く南北に短し家屋は金角港畔より高丘の半腹に櫛比し道路は四通八達「スウエートランスカヤ」街を首めとし六大街、四十五小衢あり戶數二千〇九十七(內民有にして木造一千二百六十九、石造二百五十一あり官有にして木造五百〇五、石造五十二、鐵造二十あり)人口二萬八千九百三十三(內男二萬四千四百三十三、女四千五百)あり而して之れを細別すれば軍人一萬二千歐米人、日、淸、韓人合計一万二千五百七十七人(內男一萬一千六百二十一、女九百五十六)あり右の內日本人は大凡そ二千三百ありと云ふ港灣を金角港露語「ゾロトイ、ローグ」と名づく長さ二千八百五十「サージェン」幅四百「サージェン」內外にして水深四「サージェン」乃至十五「サージェン」に達し水底の淤泥は能く錨爪に適して艦船六十隻以上を容るゝに足る港位東は「ゴードビン」半島に扼せられ西は「シコタ」半島に劃せられて深く東北に突入し暴風の時にも灣內波靜かに海鷗眠るが如き海景實に船舶碇繫の爲めに得難き良港なり

千八百五十二年彼得大帝灣沿岸が佛人「カルリセイ」氏に因りて探檢せられしより仝五

十六年英佛聯合艦隊「ツエンチエスタ」艦に因りて金角港は發見せられ「メイ」なる名稱は與へられたりしが仝六十年六月二十日露國海軍少佐「シエフチル」氏は運送船「マンジユール」號に搭し四十名の下士を此の地に上陸せしめて屯營を創設なしたり此れ北京條約締結後にして仝六十一年六月「ウスペーニ、ポージ、マーチエリ」なる名の下に寺院は建てられたり即ち千八百六十年始めて測量の時迄は浦潮斯德は鬱蒼たる森林地にして虎狼出沒し荊棘叢生の蕃地として此際滿洲土民の數戸あるのみなりしが仝六十一年露國の版圖として公認せられしより仝六十二年浦潮斯德要砦を改めて鎮守府となし仝六十三年に於て市街豫定地の樹林を採伐し仝六十五年に於て地均らしを終へ百五十七名の義勇兵は「ニコラヒフスク」港より此處へ移されたり

斯くて千八百六十八年「パヾロフスク」浦潮斯德間の電線は成工し仝七十一年浦潮斯德長崎上海間の海底電線は開通せられぬ

翌七十二年「ニコラヒフスク」港より軍港は移され六十人の海軍士官兵卒は始めて此地に軍港の苗を植ゑたり仝七十六年に至り市制は實施せられ仝八十年に至り義勇艦隊は浦潮斯德港と「オデツサ」港の航通を開始なしたり而して千八百八十二年より八十七年に至る迄に浮船渠は設けられ仝八十九年八月三十日海陸防禦の爲めに三個(九個中)の砲臺は建設せられぬ此れより工業起り商業開け航通盛かんに戸口また年々增殖し其曾つて千八百九十年に人口一萬四千四百六十六人なりしもの今や殆んど二倍の增殖を見るに至りたり而して千八百九十三年より截氷船「シラーチ」號は碎氷の目的を以て設備せられし爾來は金角港凍結の時と雖も氷間の溝渠に因りて艦船の出入自在なり

金角港の凍結するは露曆十二月十五日前後にして解氷するは露曆四月四日前後なるを以て其碎氷船なきの當時に百十日內外は海路梗塞するの憂ありしもの今や此の大畝點は殆んど完く減殺せられて過去數年間に於ける長足の進歩は西比利亞鐵道の賞通、東淸鐵道の布設に因り一方には義勇艦隊「シベリヨフ」滊船會社、東淸鐵道滊船會社、日本郵船會社、大家滊船會社の海運に因りて漸次に確かめられ千八百七十年時代に於て繰り返されたる「軍事以外に浦潮斯德なし」てふ語は完たく過去の虛夢として終り去りたり

建築物

市街中重なる建築物は州廳、軍務知事官舍、海軍事務局、知港事官舍、市役所、警察署、區裁判所、郵便電信局、海陸軍裁判所、地方裁判所、陸海軍病院、海陸軍倶樂部、陸軍倉庫、博物館、地質

協會、浮船渠、市立圖書館、停車場、男女子中學校、東洋語學校、慈惠院、孤兒養育院、赤十字社支部、寺院、一等商店、印刷所、工場、製造所、銀行、滊船會社、劇場等枚擧に遑あらず

工商業

浦潮斯德現今の工業は頗る盛大を極め諸工場製造所を合すれば二十七ヶ所に上り製造高は年々七十萬留内外に達すると云ふ今之れを細別すれば煉瓦製造所は八ヶ處にて二十五萬留、「ベートン」工場は一ヶ處にて二萬留、機關工場一ヶ處にて五萬留、製革製油所各一ヶ處にて各四萬留、製纜所一ヶ處にて五千留、燧火工場一ヶ處にて十二萬留、藏木場三ヶ處にて三萬留、麥酒釀造所一ヶ處にて一萬留、鑛水二ヶ處にて一萬留、小機械工場三ヶ處にて四萬留、滿州酒釀造所四ヶ處にて八萬留、等にして此他數多き小製造所工場ある可きも之れを記するの値ひなし

商業

千八百六十一年以來絶えず多少の變化を以て發達しつゝ來りたる浦潮斯德の商業界は千九百〇二年の關稅法實施以來直接にも著しき打擊を蒙り之れと同時に東部西比利亞市場經濟は攪亂せられ間接なる逼害は此に商界不振の頓挫を來したり、されど千八百八十一年に於て締結せられたる露清境界貿易に關する露京條約の現存は浦潮斯德商業會議所をして現行關稅法の東露經濟界を萎縮せしむる原因にして該法の失策たるとを露政府に反省せしめたり、されば不結果に因りて現はれたる東露市場攪亂の該關稅法は數年ならずして取捨改竄せらるゝの期ある可きは疑ふ可からざるなり

西比利亞鐵道布設線路の豫定せらるゝや沛然として四方より集り來りたる商業者は極めて多かりき、されど千八百九十年前まで重なる商業權は獨逸人及び支那人の手に握られしが、西比利亞鐵道の一部開通するに及び浦潮斯德の商業界は頓かに發達し千八百九十四年には入港船舶及び積載貨物にして露船五十三隻貨物五萬六千九百十九噸外國船九十三隻九萬〇四百六十三噸なりしもの仝九十六年には露船七十二隻七萬六千八百五十四噸外國船百八十一隻十一萬八千八百七十四噸に增加なしたり此れより浦潮斯德の商業は年々發達し曾に歐露、支那、朝鮮、日本の諸港のみならず「グラスコ」「コロンボ」「ポルト、サイド」「シンガポール」「ホンコン」等より商船の入港するもの多く就中支那、朝鮮よりは年々千五百隻の「ジャンク」は入港するに至りたり

商品の重なるものを擧ぐれば米、麥類、菅油、鹽、衣類、木綿絹の織物、履物類、陶器、蔬菜果實類、石炭、農具、火藥等にして輸出品の重なるものにして其清國に向ふものは海藻類、乾菓類等あるも概して露國殖民地より產出するものにあらず

物價は千九百年頃迄は大抵日本の二倍內外なりしが關稅法實施以來は課稅の重きが爲め益騰貴するに至りたり今稅關法實施以來に於ける數種の商品稅率を擧ぐれば

白米　一布　四十五哥、麥粉一布四十五哥、
日本酒一布　三留三十七哥半、
菓子類一布　十二留二十四哥、
石油　一布　一留八十哥、漆器類一斤　六十哥
陶器類一布　五留八十五哥より二十留五哥迄
器具類一斤　六十哥、金細工品一斤　五十二留八十哥
銀細工品　六留より十留八十五哥、
綿絲　一布　十留五十哥、日本紙一布三留九十五哥
時計類一個　一留五十哥より三十七留五十哥迄
履物類一布　一留四十六哥より三十七留五十哥迄
皮製品一布　十八留、茶一布二十三留五十哥
敷物段通類　一布　六留三十八哥以下略之

而して重稅品としては絹、毛、木綿織物類、石油、砂糖類、酒精、煙草、金銀製品、洋服、玩具、小間物石鹼、香水等にして無稅品の重なるものは榨詰醬油、食鹽、石炭、コークス、石炭、木炭、新鮮なる野菜、果物類、燕麥、土器、番茶、牛肉、鹽魚、牛酪、植木、味噌、漬物類、硝子瓶、板硝子、干野菜、推車、屏風、卓椅子、藁製の草鞋、網、繩、疊、莚、ブリキ細工品、落花生等にして古新聞其他印刷物は無稅なれども稅關の檢閱を經るを要す、

市內重なる商店は「クンスト、アリベルス」「ランゲリチイ」「チユリン」「ボロジーン」日本杉浦商店等は一等に屬し此他二三等商店の如きは枚擧に遑あらず、

海陸の交通及賃銀

太平洋の諸港及び歐米各國より入港する艦船は四季殆んど間斷なく就中定期の航運を營業せるは義勇艦隊、日本郵船、「シベリョフ」、東清鐵道、大家の五滊船會社にして義勇艦隊は浦潮斯德「オデッサ」間日本郵船會社は神戶浦潮斯德間大家滊船會社は日本海の諸港「シベリョフ」と東清鐵道滊船會社は清、韓沿岸の航運業を營みつゝ千九百〇一年に於て各線路の定期航行の總數百六十九回に上りたり右の中日本郵船會社東清鐵道滊船會社義勇艦隊の運賃を擧ぐれば

日本郵船會社	長崎	一等 四十四 二等 二十八 三等 四十四	東清鐵道滊船會社	元山	一等 十七留五十哥 二等 〇 三等 五留
義勇艦隊	長崎	一等 五十九留 三等ノ甲 十八留 三等ノ乙 十三留			

浦潮斯德	下ノ關	一等 四十六留 二等 三十二留 三等 十二留 一等 五十四留 二等 三十八留 三等 十四留	釜山	一等 二十六留二十哥 二等 七留五十哥 三等 三十五留 一等 〇留 二等 十留 三等
神戸			長崎	

旅順口	一等ノ甲 七十二留 二等ノ乙 十八留 三等ノ甲 八十四留 三等ノ乙 十九留 一等 五百留 二等 百八十留 三等ノ乙 百二十留	一六	上海	一等ノ甲 七十二留 二等ノ乙 十八留 三等ノ甲 八十四留 三等ノ乙 十九留 一等 五百留 二等 百八十留 三等ノ乙 百二十留
「オデッサ」				

而して其陸輸に至りても西比利亞鐵道は貝加爾湖迂回の線路中小部分を除きて完成し東清鐵道は千九百〇一年十一月三日に全通なしたりされば浦潮斯德より露都聖彼得斯堡府に達するに普通列車ならんには二十一日乃至二十五日にして着し得べく急行列車は十五六日にして達し得べく特別急行の臨時仕立列車は僅かに十日にして達し得べし

浦潮斯德、聖得彼斯堡間は八千五百〇五露里にして一等は百四十六留四十六哥二等は七十八留八十八哥三等は五十八留五十八哥なりとす

浦潮斯德、旅順口間は千六百四十四露里にして一等は四十留五十哥二等は二十四留二十八哥三等は十留五十八哥なりとす

其二　西比利亞遠征上途

明治二十七年十一月旅順口陥いり威海衛危く北京城下の盟最早遠きにあらざる可きを豫期し日清媾和後に於ける前途の東洋は事多からんと臆測しつゝ朔風凜烈白雪皚々の當時露領金角港に入りしが翌二十八年五月露佛、獨三國同盟の勸告は遼東半島還附となり二十九年八月二十七日露清の協商は東清鐵道布設となり滿州經營となり之れと前後して西比利亞大鐵道の工事は着々歩武を進め露國が東進南下の政策は日に月に昇天の勢を以て成功を急ぎつゝあるを確かめたるより最早金角港頭に長嘯する時にあらざる可しと覺悟し斯くて單身孤劍西比利亞内部觀察の希望は咄嗟の間に決定せられ運命を賭して蠻域を探撿するの冒險的遠征は日に時に促されたり

千八百九十六年九月三日天晴れ氣冷やかに颯風骨あるが如く覺え寒暖計は攝氏十度を示したり朝來旅裝に忙はしく遠征の準備完く整ひしは午前九時にして停車場に駈け付け急ぎ車室に入れば間もなく滊車は此處を發して「ニコリスク」に向ふ

水域渺茫として水、天に連るが如き黑龍灣を左にし一番川の要害を右に見つゝ五露里にして一番川の廻避路に達したり此處に第一要砦は設置せられ浦潮斯德要砦中の重なるものとして隱見砲臺は停車場近き高丘上に築造せらる

「ヒウコーヴオ」「ナジエーヂンスカヤ」「キバリソーフ」等を過ぎ「アラズドリノイ」停車場に着したり此處は浦潮斯德港を距る六十六露里の處にあり綏芬河の右岸に横はる村落にして千八百六十五年浦潮斯德要砦と黑龍江屯田兵村の連砦を造らんが爲め彊議

屯駐兵を此處に設けたるに始まり爾來歐露よりは前後七回の移住民あり戸數六十七人口三百六十七に及び現今住民は農耕に從事せり地に西比利亞狙擊旅團第一中隊屯營、驛傳寺院、滊船碇繫場、四商店あり地位綏芬河畔に位するが故に此處より黑龍灣に航通する滊船あり「ホセット」に達する郵便線路あり午時此處を發し「バラノフスキ」停車場を過ぎ午後三時「ニコリスク」停車場にと着したり

「ニコリスク」市

東部西比利亞南烏蘇里線中の一大停車場として東清鐵道分岐點として其名著しき「ニコリスク」停車場は市街を距ること露里餘の處にあり鐵道廳用の諸工場は石造、煉瓦、木造家屋とを合して十棟以上に及び結構何れも宏壯にして鐵道用諸建築物の敷地は一千百平方「サージェン」に達し鐵道大隊も亦此處に設置せらる

地は往古之を雙城と稱し成吉斯汗の滿州を席捲したる其當時の紀念として土壘の故趾は今猶存在し中央に二個の石像ありて兵營は此處に設けらる

千八百六十六年歐露の「アストラハンスキ」及び「ウオロヲジスキ」縣より移殖したる十九戸の移住民は綏芬河の沿岸に一寒村を創立したりしが仝六十六年に至り浦潮斯德近き「アスコーリタ」島の金鑛より追放せられたる滿洲人は復讐的掠奪を逞ふしたる其當時「ニコリスク」も亦燒燼せられたりされど機運の大勢は「ニコリスク」をして更に從前より大なる新部落を形造せしめ移住民次第に增加し千八百七十年に於て寺院は創立せられ耕地は二萬七千九百九十九「サージェン」に及び就中尤も便利なる地積は三千五百八十六「サージェン」に達したり

千八百八十年屯營を此處に設置せる以來は兵卒街なる名稱の下に一町は設けられ數多き軍隊の屯駐家屋は設立せられて士官兵卒は此處に集合なしたり

斯くて南烏蘇里鐵道貫通し東清鐵道の分岐點として定められたる以後「ニコリスク」の形勢は一變して長足の進歩を現はし來り千八百九十七年には人口八千九百八十二(內男七千〇〇七人女一千八百九十五人)なりし者今や一萬五千人以上に及ぶ可しと傳へらるされば該市は南烏蘇里方面の大都邑として將來沿海州の中央集權を此處に移轉せしめんとするの內議あるのみならず千八百九十八年より村制を廢し更に之を市制に改めたる爾來は工業開け商業盛んに農業また著しく發達なしたり殊に商業上軍事上に於ける交通運輸に對して最も樞要の地位を占むるを以て該市將來の發達は殆んど豫想の外に出づるならん

地に三大寺院、郵便電信局、警察署、圖書館、學校、第一東部西比利亞狙擊旅團三、四、五、大隊第

二中隊、東部西比利亞砲兵旅團第一白砲中隊、第一後貝加爾胡索克聯隊、南烏蘇里軍管區司令官、及び參謀部官舍、印刷所、精粉所、石鹼製造所、醸造所、二旅館、「クンスト、アリベルス」「デユリン」等の一等商あり、此他支那人の商店百二十以上に達し、市場の取引三百萬留以上に及ぶと云ふ

九月七日天氣晴朗、颯風吹き來れは涼氣骨あるが如き心地せらる、盥嗽後屋後の菜園に出つれは、此處彼處に、稻牙の地を起せるをも認めたり、午後一時「ニコリスク」停車場にと駈け附けたりしが、間もなく滊車は此處を發して北に向ふ、眼界限りなき曠野を縱貫し北進三露里「ミハヒロスク」村を見る、此れより十餘露里の間、坦平磨ける砥の如く、四方茫々として僅かに樹林の間より高丘を認めしのみなりしが、最に「西比利亞の月は草より出て草に入る」の諺は今にして其誣言に非らざるを知り得たり、午後五時滊車は「ドビンスキー」「チウエリスカヤ」「チエルチゴーフカ」等の滊車避路所を經て「スパスカ」に到る、七八十露里の間は一望千里とも謂つ可き原野にして、田園遠く開け、耕耘また頗る意を盡せり、滊車の前程後路を望めば一條の線を引くに異ならず、宛かも定規もて並行線を畫くが如く、加之線路に高低凹凸なく、唯坦平削れる板の如き平地を疾走するのみなりしが、日沒して四隣の光景、次第に寂寥となりしを以て、余は長椅子に身を投げつゝ、假寢の脆き夢を結びたり、無がて滊車は東雲近き頃「スパスカ」にと達せしが、時を檢すれば宛かも午前五時、此の日空清くして風冷やかに氣また爽やかなりしが、天は漸くに色を變へ、四野次第に象を改めし頃、車窓を推せは、太洋の如き平野は眼望定かならず、見渡す限り野草茫々として半ば黃紅色に變じつゝ、秋に老ひたるを示し、名も知れぬ水草は三尺餘に伸び、之れを拂ふ一陣の風は、原頭の濤に波打たせつゝ、宛かも太洋航海の感を起さしむ、滊車の「スパスカ」を發せしは、九月八日午前七時なりしが、此れより曠野を縱貫しつゝ北進「シマコーフカ」停車場を過ぎ、間もなく烏蘇里停車場へと着したり

此處は沿道の小村落にして、戶數五十餘戶、人口三百四十あり、村端烏蘇里河に烏蘇里鐵橋あり、長さ百二十「サージエン」餘、南北烏蘇里線中最長の鐵橋にして、工事は日本人に因りて竣工せるもの、一見其巧みなるに感かしむ

「プロハスコ」停車場より以北は滊車の動搖甚だしく、宛かも風波の日に航海するが如き感ありたり、午時「ムラウヰヨーフ、アムールスキ」停車場を過ぎ、是れより北に向ふ十露里、午後一時半「イマン」停車場に達したり、是れより滊車は二道に分れ、一は「ハバロフスク」線に通じ、一は烏蘇里河畔の「グラフスカヤ」に向ふ、此線路は烏蘇里河の滊船に乘込む旅客の爲め、特に分岐せる者なり、午後二時滊車は「イマン」碇繫場に着しぬ、該地は「グラフスカ

ヤ」と名くる村落にして烏蘇里河の左岸にあり其流車なきの冬期は此處より烏蘇里河の氷路を利用し鮫鱶の潜む氷上或は虎伏す野邊に寒き星を數へつゝ「ハバロフスク」に出づる橇の出發所にして夏期は此處より烏蘇里流船會社の流船に乘る所なり地は千八百五十八年の創開に係はり村名は東部西比利亞に雷名を轟かしたる巨人「ムラウヱフ、アムールスキー」伯の名譽を彰表せんが爲めに「グラフ」(伯)の一字を取り名づけたるものなりと千八百六十八年の頃は住民男女二百十八名に上りしかども後二十年を經て大に減じ千八百八十八年に至りて實に七十一名に減じたりされど東清鐵道布設後は漸くに舊時の觀を呈し來り移住民年を逐ふて增加し現今は鐵道大隊の屯駐兵營は此地に設けらるゝに至りたり此日余は流車を下り旅館に就き一宿を求めたりしが少憩の後ち烏蘇里河の光景を觀る

烏蘇里河

烏蘇里河は源を「シホト」山脈に發し下流に於て「ダウビエ」「スンガチャ」「レーフ」「ビキン」等の諸川を合し三百六十露里を流下し「ハバロフスク」に於て黑龍江に合するものなり此河は年々一二回溢流して大に沿岸殖民地を浸潤するが故に堤防なき殖民地に發達の防害を與ふること少々にあらず殊に千八百九十六年八月中の洪水の如きは汎濫の區域最も廣く爲めに沿岸殖民地の家屋流失し人畜の死傷また無數なりしと云へり、されど兩岸は樹木蔚生して屯田兵及び農民等が家屋建築の材料に餘りあり楓、山毛欅、樺等は能く發育し番々として天に聳ゆるものあり、河中鯉、鮒、鮗、鱒魚鮫鱶を產し鯉、鮗は時として三四尺のものを捕獲する事あり鰐鮫の大なるものは長さ二間以上に達し鮒の如きものすら尺五寸以上のものを捕ふる事は珍らしからず兩岸の樹林中には麋、鹿、山羊、黑貂、白狐、狼、豺、熊、等の獸類及び鵠、鴇、山烏、雉子、山鳩の一種は多く繁殖しつゝあるが故に之れを捕獲せば一種の產物となすに足るべし河岸に沿ふたる村落は歐露より移殖したる屯田農兵なれば重なる農產物を「ニコリスク」或は「ハバロフスク」府等に出し以て生計を營み傍ら魚族禽獸捕獲を內職となすと云へり烏蘇里流域の廣き所は四五露里に亘るも狹き所は僅かに三分の一露里に過ぎず其深き所は二十尋以上にして淺き所は三尋を超へず砂洲暗礁小島嶼等各所に散在して汽船の航行頗る困難なる處あり

烏蘇里河所觀

九月九日流船「チハチーフ」號は此處を發して「ハバロフスク」に向ふ數十露里の左右は平原漠々水漫々たるのみにして見るに足るものなく航路は常に北に向ふたりしが此夜濃霧江上を掩ふて航行し難きより船を江畔に留め昧爽北に向つて航下し宛も十日午

後三時「カズロフスカヤ」に達し此れより西北に向かひ十一日午後八時第三碇繫場「ウェニウコワヤ」に着したり地は一千八百五十七年に創開せるものにして傾斜鋭き丘腹には古墳累々として青苔滑らかなるもの三四十を認めたり「ウエニウコワヤ」を距る十露里の左岸には千八百九十六年六月露軍の爲めに征服せられたる馬賊が巣窟の故趾を見得たり露軍が二名の戰死と八名の行術不明者とを生ぜし此小戰鬪に於て二十有餘の死屍を遺して遠く滿州の森林中に遁走せんとしたる馬賊の數名は捕虜となり其後「ハバロフスク」府に於て嚴酷なる拷問の苦痛に堪へずやありけん吉林省都統の下に附屬せる邊疆の戍兵なる事及び脱營の後良民を刼やかし或は烏蘇里航行の商船を掠奪し或は露領に侵入して住民を苦しめし等の事を自白せしより遂に問罪の事に決し黑龍江沿道總督の訓令を受たる狙擊旅團一大隊と百五十の胡索克騎兵は「ニコリスク」城より吉林省に向つて進發なしたりと農兵らしき一露人の語るを聞きぬ

是よりまた流に隨つて北に馳せ翌十二日午後五時「カザケーウエチナヤ」に達し翌十三日瘴霧の漸く薄らぐを待ち午前九時此處を發したり此より烏蘇里江の水域は漸くに擴張して最も廣き處は五六露里に亘り船は益ゝ北へと進み午後三時「テハチーフ」號は沿黑龍江總督府廳所在地の「ハバロフスク」府に着したり。

其三　「ハバロフスク」府

「ハバロフスク」府は北緯四十八度二十八分東經百三十五度四十分に位せる東部西比利亞沿黑龍江總督府廳の有る處なり「ハバロフスク」の名は千七百年代此地方を攻略せる胡索克長官「エロヘイ、ハバロフ」氏の姓を取りて名づけしものなり千八百五十八年東部西比利亞護疆兵戰列第三大隊の參謀官某始めて此地を拓き官舍を設けたりし頃は單に駐兵地たるに過ぎざりしが此時人口千二百九十四(軍人九百四十三普通男女三百六十一)戶數二百十四(官舍五十九商店十五普通百四十)にして實に微々たるものなりしも千八百八十年沿黑龍州の都府として生れ「ニコライフスク」より沿黑龍州の文武諸官衙を舉げて此地に移せしより巢櫂の勢ひ沛然として四方を制し僅に四年を經て俄かに舊觀を改ため戶數九百四十一人口四千八百有餘の多きに達し現今は戶數一千以上人口一萬四千九百七十一(內男一萬千七百三十女三千二百四十一)此他に支那朝鮮人は合計四千〇二十四人あり市內の重なる建築物は寺院、總督府廳、大藏省出張所、檢査院出張所、收稅局、陸軍參謀部、陸軍印刷支局、砲兵本部、工兵本部、陸軍會計監察部、衛生部、國立銀行支店、博物館、陸軍倶樂部、市立倶樂部、郵便電信局、市廳、市立學校、西比利亞兵學校、女學校、病院局等及び老兵の爲めに設けられたる慈惠院あり此慈惠院は先きに「ムラウヰヨーフ」

伯の紀念銅像を建立したる際剩餘金のありしを資本とし其利潤を以て役に堪へざる老兵を休養する爲めに設立せられたる者なり

地勢東には「シホタリーン」山脈蜿蜒連亘して遠く日本海を遮ぎり西は直ちに黑龍江を控へ江を下れば九百餘露里「ニコライフスク」を經て薩哈嗹の北即ち韃靼海峽の北に出づ可く江を遡りて北西すれば「ブラゴウエシチエンスク」を經て「ストレチエンスク」に通ず可く又た一は松花江を遡り滿洲の「ハルビン」「チヽハル」及び「キーリン」「サンシン」等に通ずるの航路あり南は烏蘇里河の流域五百露里の間は滊船或は小舟を通ず可く陸路烏蘇里鐵道に因れば七百十五露里にして絶東の軍港浦鹽斯德に達すべし

冬期は河水氷結すれども橇に頼りて貨物の運搬また自由なり

されば「ハヾロフスク」府は實に東部西比利亞沿黑龍江の天府にして交通の四通八達なるは他に其比を見ざるべし地質上氣候上春秋共に農作に適せざるが故に農產物として菜穀を產出する甚だ少なく爲めに土着農民の移住また背影の觀なき能はず隨つて商業繁盛に至るの期は僅々たる歲月に覺束なき事ならん現に「ハヾロフスク」最近の統計に因れば一年の取引高二百萬留內外に止まり就中最多額を占むるは官邊の消費にして軍用品或は鐵道用品等なるに反し普通市民の消費に至りては實に僅々たるものなり總じて商業の盛衰は取引高の多少に依りて之を判するを得可し然るに「ハヾロフスク」府は市價非常に高きを例とし麥粉一「プート」(一「プート」は我四貫三百六十目餘に當る)の價二留(一留は我銀貨時價一圓餘)に下らず一「プート」の牛肉は六留乃至十留內外にありて其他の日用品中唯廉價なるは魚類に止まれり則ち黑龍江烏蘇里河等に於て捕獲する鮭、鱒、鯉、鮒、鰍、鮟、鱒、鱧、タイメン(タイメンは肉鮭に似て大なり「アセチョロ」、魚にして此等の魚は土地の產物として頗る豐富なるが故に廉價に販賣するを得可きも他の農產物及び日用品の如きは遠く烏蘇里及び黑龍江畔の胡索克屯田兵地より輸送し來れる者なるを以て高價なるは勢ひ已むを得ざる處なる可し之と同じく日用品中金屬、服地及び其他の裝飾品中日本貨物の如きは原價の三倍乃至五倍に至る者あり市內の重なる商業者は「アリベルス」支店「チュリン」支店「ニーメル」「ビヤンコフ」「チーフンタイ」(支那人等にして日本人は殆んど醜業者の外見るに足るものなし

市街の區劃は井字形をなして四通八達し每戶庭園菜圃を設けて自然の風致を添ふ土地高燥なるが故に空氣の流通尤も善く時に黑龍江上より送り來る濃霧は市街の埃塵不潔の汚氣を奪ふて遠く之れを四方に送り去る等衛生上之れを他の都邑に比すれば大に優るを見る市街の西黑龍江に臨み公園あり園內十間每に腰架を設け瓦斯燈を配

置し中央と覺しき處には八角形の休憩所を設く園の南方は奉迎門の遺跡にして千八百九十一年今帝「ニコラヒ」二世陛下の巡狩を奉迎したる所となす園内陸軍倶樂部總督官舍博物館等あり就中烏蘇里河の草木六百餘種を移植したる庭園の如きは種類の日本と異なるもの多く此科學に熱心なる者には利益する處少なからざる可し黑江龍畔峭立截るが如き斷崖の上に毅然として屹立せる巨人の銅像は此れなん有名なる「ムラウヰヨーフ、アムールスキー」伯にして千八百九十一年府民の有志者相醵金し伯の英名を不朽に傳へんが爲め建設したるものに係り「ハバロフスク」勝景の一として其名殊に著し坦平砲の如き廣場に砲形の鐵柱を植ゑ鐵鎖を結ひて之れを圍繞し御影石の臺上に伯の銅像は安置せらる右手に望遠鏡を握り左手に地圖を携ひ左足は鐵鎖の上に置きたる儘遙に清領を望むの容貌眞に生けるが如し爛々たる眼光、鬱然たる眉宇、隆々たる鼻梁は嚴勵勇猛なる上にも一種の溫容を添ひ江を隔てゝ遠く清領を睥睨するの威風は凜乎として當る可からざるの氣宇を示し清領は已に伯が一睨の下に風光を失ひつゝあるが如く露人南下の政策は實に伯が銅像に因りて發表せられつゝあるなり嗚呼國步多難の機に制せられて弊屐を棄つるが如く容易く此地方を讓與したる清國をして其當時の事を追思せしめなは今昔の感果して如何ぞや

「ムラウヰヨーフ、アムールスキ」伯の半世

西比利亞の曠原に於て强大なる軍備の種を蒔き富豐なる殖民の實を植ゑ世界に著しき原野湖沼江河を露國に献じたる胡索克の勇將「エルマーク」の死後十世紀の始めに於て卓絶なる資性を以て强大なる腦力を以て敎勇なる精神を以て顯はれたる「ムラウヰヨーフ、アムールスキ」伯は千八百四十一年西比利亞の總督に任ぜられ殆んど無主國に等しき黑龍江方面を攫取せんと勉めしこと前後數回に上り十數年の後能く絶大の功を歛めしは伯が半世中著明の歷史として其名聲著るしく伯また黑龍江畔より「カストリ」灣に車道を設けんと企てしことありしが西比利亞の殖民鐵道西比利亞一貫鐵道の計劃もまた伯に因つて露政府の希望を確實ならしめしとすら謂しとせず千八百五十五年八月六日黑龍江に黑鷲兩頭の旗を建てたるは將官「ヲウエーリスキ」にして彼れは實に巨人「ムラウヰヨーフ」の命を受けて「ペルチック」海より江口「ニコライフスク」に航したるものなりき即ち「ニコライフスク」は此時より露國の版圖に入りしなり之れと同時に伯は「チルチンスク」の鑛夫を募りて臨時守備隊なるものを設け胡索克に編入し之れと與もに黑龍江方面の防備に從はしめ「ミルカ」河口には二隻の小氣船を備へて地方防備は已に此時より堅固なる基礎を成し始めたり其後黑龍江地方露清兩國疆域に對し

威迫强請に等しき公文は千八百五十三年「ムラウヰヨーフ」伯が提議の結果として露國政府より清國政府に交渉し遂に疆界商量委員は清國より黑龍江地方に出張せざるを得ざるに至りたり活眼なる「ムラウヰヨーフ」伯は此の機を外さず千八百五十四年伯に因つて引卒せられたる探檢隊と與に「シルカ」より「ゼーア」河を過ぎ「ニコライフスク」方面を探檢して第一回の探檢を終へ翌五十五年には第二回の探檢遠征隊として伯は九十三隻の艦隊を率ひて「マリイムスク」に兵を集中し清國黑龍將軍奕山に疆域決定の談判を開き强迫的の示威運動を楯として先きに締結したる「チルチンスク」條約を破棄せしめ烏蘇里江を以て露清の疆域となさん事を以てしたり翌年「ムラウヰヨーフ」伯は第三回遠征隊を組織し永住の方針を取らんが爲め黑龍江以東の沿海地方を以て沿海州となし「マリイムスク」「ヒンガム」「ゼイア」「カマーラ」の四營は黑龍江方面に建設せられて此地方は此時を以て實に露國の版圖たることを宣告せられたりき而して千八百五十七年「ムラウヰヨーフ」伯は全權大臣「カウント、ブーチヤチン」を保護して黑龍江を下るの際「ニコライフスク」の南方「シルカ」「アムグン」河の合流する「ウスト、ストンウカ」より興安嶺に至るまで黑龍江の左岸に於て許多の兵鎮を增設して益々占領の根礎を確めたりし一年を超えて「ムラウヰヨーフ」伯が夙昔爾來の大希望は漸くに偉大なる成功の機を斯らし來れり千八百五十八年英佛聯合軍に驅られ白河の盟ひに肝膽を拔かれたる清國は同六十年に於て完く黑龍江以南烏蘇里江より浦潮斯德方面に至る迄の地を露領とし之れを讓與したりしが露國が百七十年前「チルチンスク」條約に依りて得たる耻辱は雄將「ムラウヰヨーフ」伯の手に賴りて剝ぎ去られたり嗚呼伯は如何にして此一大偉業を成し遂げしや彼は卓越絕倫なる材幹を活用するに敏捷なる手腕を以てし剛毅なる精神を鍛錬するに勇猛なる忍耐を以てして櫛風沐雨幾歲月の下に浦潮斯德港尼古里斯克城、巴哈羅夫加府及び黑龍江一帶沿海州數千方露里の地を包括して之れを露國の版圖に編み入れたる其偉業は伯が千古不滅の銅像と永く巨人の紀念を洽々たる黑龍の河畔に留めたり嗚呼伯は實に人傑中の人傑なる哉

○黑龍江上所觀

其一　「ハバロフスク」「ブラゴウエシチンスク」間

九月十七日午後八時滊船「ツイサレーウエチ」號に搭して此處を出發なしたり此夜は陰暦八月十一日に當りしが皎々たる寒月は物凄き黑龍江を照らして燐火螢の飛ぶが如く碎波の起る處白龍躍り月光の撫づる處銀珠の湧くが如し陸上を見渡せば無數の點燈は綺羅として彼處此處の樹の間より光を洩らして宛ながら雲間に見ゆる星に似たり此夜余は機關室近き暖き處に身を横たへたるまゝ曙近き頃まで濃き夢に入りたり

黑龍江の概略

黑龍江は露語にて之れを「アムール」と稱す「アムール」とは滿州語にて「サハレン」(黑)「ウラヒ」(江)を意味せり始め露人の「エムール」河嘴に對し「アルバジーン」城を建築するや其名を取り「アムール」と名けたりとの說及び此河上に住する土人は現今の黑龍江を呼んで「アム」又は「マム」と言ひしより遂に通稱となりたりと其何れか眞なるを知らず黑龍江は「アルグーン」「ゼーア」「ウソリー」「スンガリ」「シウカ」の五大河より成る全長(河口より水源に至る)四千三百七拾四露里(日本里數千〇九十三里餘)本流は「シウカ」河にして河身の長さ四百二十六露里餘「アルグーン」河と「ストレルカ」村近傍に會合す所謂黑龍江と稱するものは「アルグーン」「シユウカ」兩河の相會したる處より下流を指名するもの是なり五十三露里にして「アマザル」河を受け三百二露里にして右岸に「エムール」河を合せ四百二十六露里にして「カマラ」河を受け二百十三露里を流下して「ゼーア」河と合す「ゼーア」河は露領にありて河身の延長千百七十三露里あり(此處に「ブラゴウエシチエンスク」府あり)是れより流下三十二露里にして舊愛琿城(滿州の舊都會)を過ぎ「ニズメンナヤ」村より東流し「スコビリチナ」村に至つて「ブレヤ」河口と會す此間二百十三露里餘此より東南に流下する三百三十露里にして松花江を合せ東北する三百六十六露里にして烏蘇里江に會す此の處に沿海州の首府「ハバロフスク」府あり此れより「ウドウ」村に至り折れて北流し「ポーテン」より東北に向かひ「ソヒースク」に至り弓形をなし北流して「ブレリ」の湖南に達し東折して韃靼海峽に注ぐ此處に「ニコライフスク」港あり江口より烏蘇里河との集合點に至るの距離九百三十九露里なり其各處に於ける河身の幅員は一定せずと雖も黑龍江と通稱する最も狹き處は五百米突最も廣き處は十三露里に及び河身深き處は二十尋以上に達すると云へり河流に鱒魚鮭鮒「アセチヨロ」鮫鱶等を產せり兩岸の樹木は重もに五葉松、落葉松、赤白黑樺、菩提樹、赤白水楊、楡、楤、槐、桂、胡桃、野林檎、野櫻等にして蔚々たる深林は數十露里に連亘して江畔を裝飾せるあり麋、鹿、山羊、黑貂、黑白赤狐、狸、野兎、熊、豹、猩、豺、山猫、栗鼠等の群は此處彼處に繁殖して捕獲する獸皮は實に西比利亞の一大產物として輸出せらるゝと云へば此河の如何に西比利亞に莫大なる利益を與ふる歟の一端を知

るに足る可きなり

翌日午前は唯漫々たる黑龍の水域を或は西し或は東し或は南したりしが航行中水域の直なる處は流勢緩漫なれども曲折せる處は渺茫たる湖沼の如く曲折鋭どき處は直徑五尺許りの大水渦をなし水光の凄き事言はん方なし「ハバロフスク」を距る百二十露里の處に於て屢々鷗鳥の遊弋し或は空に舞ふものを認めたり是れより南西に向つて馳せ十八日午前「エカテリノイ、ニコリスク」村に着せり此處は江畔の重なる屯田兵村なれども別に記す可きものなし翌十九日午前五時曉の月を負ひつゝ南西に向ふ「ハバロフスク」より「エカテリノイ、ニコリスク」に至るの航程二百六十露里左岸の清領は到る處樹木蓊々野草茫々として尚ほ狐兎の巣窟たるを免れず之れに反して右岸の露領は江畔到る處開拓せられ往々屯田兵村を認めたり十九日正午船は黑龍江畔の勝地として有名なる小興安嶺の峽谷に達したり此峽谷は航路殆んど百七十露里餘の長きに亘り其右方の露領は斷岩峭立截るが如く百卉千草は秋に傲りて風景宛ながら畫くが如し

小興安嶺

小興安嶺は滿州人通稱之れを「ドッス」と稱し露人は之れを「プレヤ」嶺と稱す清露に跨りたる五百三十四露里の山脈にして最高處は五千尺に達するも山道の最高處は三千尺に過ぎず露人「シッデントルフ」氏一人之れを越えしあるのみにて此際非常の辛酸を嘗めしとの事は或る書に見えたり小興安嶺の通過する處は山脈强く黑龍江を壓窄して河身の巾僅かに一露里に達せざるの處あり水勢急激にして一時間十六露里の速力を以て流下し河水深きも暗礁また多く爲めに航行頗る困難なりといふ廿日午前七時半「ラッデー」村に着せり地は「ハバロフスク」府を距る四百四十七露里の西北に當れる江畔の屯田兵村にして戶數百三十戶地に病院、學校、郵便電信局、寺院、警察署、製鹽所四商店あり午前十一時此處を發し北西する二露里此れより平原漠々水漫々江畔唯麻畠の如き靑楊の叢生するのみ眼に入りたりしが午後九時「インノケンチエフスカヤ」兵村に着したり此夜濃霧起り月光暗きが爲め此處に碇繫し翌二十一日旭日を負ひつゝ北西に向つて發したりしが午後九時「ボヤールカ」に着したり地は「プ」府を距る百五十四露里黑龍江畔の大屯田兵村にして戶數百五十餘學校、寺院、病院、郵便電信局、村民倶樂部、警察署、「プラゴウエシチエンスク」府收稅出張所あり商業頗る發達して年々の取引十五萬留を下らずといふ船の此他に達するや赤き衣裳を着けたる老嫗紫地に花模樣の被布を着せる田舍娘及び黑き皮の外套を著けたる數多の土着露人は爭ふて牛乳、卵、海藻菜、麵麭、胡瓜漬等を持ち來り沾客を求むるの狀最と面白かりしが流船の將に出發せんとする際

一人の胡索克兵は胡瓜漬を買求むる中汽笛に慫かされ周章の餘り代價を拂ふ暇もなく棧橋指して驅け去りしに慈深き老姥と其娘にやありけん叫びながら胡索克兵の跡追驅ける途端足踏み外したる兩人は胡瓜漬の籠を抱ひたるまゝ眞倒に水音高く陷ゐりしが此時江畔に集りし村人を始めとし船橋に立てる數多の乘客は手を打ち聲を揚げて笑ひたりしは時ならぬ一興なりき

「ポヤールカ」發後是れより北西に向ふ百露里の間は兩岸の光景前に異なるなきも唯江畔の清領には一の茅屋一の人影を見る能はざるに反し露領には十露里若くは七八露里毎に薪を積み牧草を重ねたる倉庫あり或は電信柱の間々樹林の間より見ゆるあり愛琿(清領)を過ぎしは廿三日午前五時頃なりしが故に明らかに市街の光景を認むると能はざりしも唯市街の延長三四露里に亘りしと及び寺院の二三を見得たりき地は殆んど二百年結んで解けざりし露清疆界の事に就き千八百五十八年十六日「ムラウヰヨーフ」伯と黑龍江將軍奕山との間に決定せられたる所謂愛琿條約の紀念地として黑龍江の歷史に尤も親密の關係を有せるの地なりしが千九百年の北清事變に一朝焦土に化し去り現今露人の移住者を見るに至れり此れより三十一露里にして「ブラゴウエシチエンスク」府に達す可し船は益々北にと進み午前九時黑龍江の支流「ゼーア」河の會合する處に至れば河域は汪洋として湖沼の如く流域の注入する處水相搏ちて泡沫を飛ばし流勢滔々として宛ながら雷の如く船體の動搖頗る甚しかりしが九月二十二日午後一時「ブラゴウエシチエンスク」府に安着なしたり

其二　「ブラゴウエシチエンスク」府

「ブラゴウエシチエンスク」府は北緯五十度十五分東經百二十七度三十八分二十八秒に位し宛も千島群島の極北と同緯度にあり土地は卑濕なるが如しと雖も海面を拔くこと八百七十尺餘黑龍江と「ゼーヤ」河との會點に横たはれり街衢は四通八達し區劃井然たり東西八大街南北二十三衢あり石造、白赤煉瓦及び木造の高樓大厦は軒を並べて櫛の齒の如し道路の兩側には小高く土を盛り或は溝渠を設け覆ふに板を以てして人道を作り中央は九十尺乃至百四十尺にして車馬の往復安全なり各巷街には街名を巷角に標示し其何街たるやを知らしむ

地は千八百五十六年東部西比利亞總督「ムラウヰヨーフ」伯が第三回黑龍江の探驗をなすに當り胡索克兵營を此地に設置したるを始とし仝五十八年四月伯に因て提出せられたる愛琿條約は調印せられ此時より黑龍江左岸なる該市は全く露領として世界の地圖に指點せらるゝに至りたり市街豫定地を區劃せしは千八百五十七年にして此時

迄は該市四近は唯「ムラウヰヨーフ」伯が設置せし胡索克の一小兵營あるに過ぎざりしかも露政府が鋭意力を西比利亞開拓に盡せるより移民勸奬の結果は千八百九十一年に至り戸數八百人口六千以上に及び現今は戸數三千五百人口三萬二千六百〇六に上り首府と定められたるは千八百五十八年十二月二十日にして爾來僅々たる歲月の間に長足の進歩を顯はし今や東部西比利亞中殆んど第一流の位置を占むる一大市街となりたり

該市四近は東部西比利亞中地味最も豐饒にして禾黍蔬菜善く成熟するを以て好恰なる農產地として著るし殊に露國政府の移民奬勵策は其當を得て四近の開拓せらるゝに隨がひ商業は次第に發達し黑龍江畔及び「ゼーヤ」上流の鑛山は漸次に採掘せられ交通は益圓滑となり遂に今日の如き隆盛を來たしたるは畢竟するに

第一黑龍江滊船會社の中央點たること

第二各所金鑛山の根據地となり幾千工夫の年々往來すること

第三黑龍州の首府たること

等に基因せずんばあらず

市內重なる建築物は州廳、市役所、警察署、郵便電信局、區裁判所、地方裁判所、寺院、諸銀行、倶樂部、胡索克屯駐所、陸軍屯營、陸軍倉庫、獄監署、電話局、男女子中學校、宗教學校、工業學校、「アリベルス」「チユリン」「エイメリ」「ヂクマン」等の商社、藏木場、精粉處、釀造所、新舊汽船會社、諸採金事務所等にして就中規模の宏壯なるは寺院と「チユリン」商社なり「チユリン」商社は西比利亞第一と稱せられ構造規模日本銀行に讓らざるべし

該府は商業最も隆盛を極め其商品取引の總額は年々一千萬留を下らざる可し就中「チユリン」商社は一年三百萬留內外にして「アリベルス」「ヂクマン」「エーメリ」等は各百五十萬留內外の取引なりと云へば其他の二等商及び三等商の總取引高は實に莫大なるものと謂はざる可らず重なる商品は麥粉、毛皮類、毛織物、茶、煙草、酒類、家具、織物類裝飾品等にして壹等商店には大抵酒類販賣所あり二三等商店は通例雜貨を販賣するを常とす物價は日本の三倍乃至五倍にして牛肉、卵及び魚類は大抵同價なり諸商品中金屬品は割合に高價を以て販賣せらる一等商一日の小賣高は大抵二千留乃至五千留にして二三等商一日の小賣高は二十留乃至百留と概算せらる

該府駐在の軍隊は總て四隊を以てなれり即ち第一第二第三第四「バタレオン」にして兵種は工、砲、輜重、騎、守備巡邏兵の五隊となす工兵は現在二千人ありて屯田制に編成せられ平時一大隊は千人餘なるも戰時は千五百人なり砲兵は二中隊にして現在五百六十

餘人あり一隊に付砲八門、一門に付き馬六疋にして平時は壹門に付十人の割合なり而して平時に於ける一中隊は二百八十人餘あるも軍時は三百人餘となる輜重兵は現在三百人餘にして軍時は五百人餘となる割合なり騎兵は胡索克兵にして一隊に付平時二百人なるも軍時は四百人となるの割合なり守備巡邏兵は現在二百人にして此兵種は重もに士官の官舍及び重なる官衙を衛戍し或は罪囚を「サハレン」島に送致するの際之れが護送の任に當るものたり

右の兵種は千八百九十七年余が此地にあるの日調査せしものなるも千九百年の北清事變以後は多少の變動ありしならんされど滿州は已に露國の實權内に入り護疆守備の必要少なきを以て現在の屯駐兵數に至りては或は舊觀を保せるならん

氣候

西比利亞の氣候は寒氣を意味し瘴烟巒霧に解釋せらる而して酷烈なる寒氣はまた苦痛を意味し强き瘴氣は死に解釋せらる蓋世の英雄として歐亞を震動せしめたる那翁一世が莫斯科の一敗に起つ能はざりしも希世の豪傑として西歐を馳駭せしめたる查列斯十二世が覇權を墜せしも畢竟するに此天然の勁敵に勝利を得る能はざるに因りしなり「アレキサンドル」一世が兵略の骨子として彼得大帝が作戰の心臆として活用したる此天然の勁敵に因りて倒されたりしなりされば西比利亞に於て尤も恐る可き勁敵は猛獰なる虎、豹、熊、狼の群にあらず慓悍なる胡索克の健兒にもあらずして實に殘酷なる天然の氣候にあるを記憶せざるべからず

余が此地に着せしは宛も九月二十日後なりしが時氣は攝氏十度内外を示したるにも係らず仝月二十五日には降霰あり仝二十八日に至り氣溫暴降して風雪となり翌朝午前六時に至り寒暖計は攝氏零度以下八に下りたり此時水氣ある室外の萬物は悉く氷結して四顧は俄かに嚴冬の風色を顯はし市人をして防寒の準備に周章せしめたり半夜室外に出づれば鬚髯は氷花を結び金屬器に濕れ手を觸るれば忽ち附着するの異狀を顯はしたり仝夜を前二十七日に比すれば一晝夜の間に於て殆んど攝氏二十度の大昇降を見たりき此激變によりて蕭々たる落葉松、櫟、楓、蒼々たる野草は何れも天然の色素を變ぜずして凋落したり此れより二週間は寒暖一定するなく或は朝夕十度乃至二十度の暴變ありしが十月二十日頃よりは黑龍江上の背波を亂だして流下する氷塊を見たりき是れ即ち「ゼーア」「シユウカ」等の上流より流れ來りしものにして上黑龍江は此時より已に結氷し始めしを知り得たり黑龍江航行の滊船は十月三日「ジョン、ガキリン」號を以て往航の終りとなし十月二十三日を以て「バロン、コルフ」號を來航の終りとなし

たり第二次の降雪は十月廿二日にして十一月初日の流氷は益々增大となり此時已に氷層の厚さ尺餘に及びしものを認めたり爾來一週間は流氷連續して滿江を掩ひ左右の江畔已に凍合して學校生徒の氷滑べりするもの日に多きを加ひたりき

千九百年の役に焦土と化し去りたる對岸滿州「サハレンウラ」村とは一週間の交通杜塞ありし後十一月十日には黑龍江は完く凍合し了りたり此日に於ける流水の結合は僅々七時間にして氷層と氷層との凍合力は非常に強く時々雌雷の如き聲を發したりしが滿江の完く凍合せるは十一月十日の午後にして此時の氣溫は攝氏零以下十三にてありし十一月爾來の溫度は終始昇降して定まりなく十二月廿八日には寒暖計は攝氏零以下三十二度に下降したり此時余は外出せしに氣息窒するが如く何んとなく胸苦しく覺えしが吐く氣は一道の白烟の如く須臾にして鬚髯氷花を結び凍塊を形作り上下の睫毛互に附着し鼻毛は呼吸每に附着し頸邊の羊毛は氣息の蒸氣にて白花を結び黑毛の帽子もまた俄かに雪を以て變裝せられたり此れより寒暖度なかりしも二月下旬よりは太陽光熱の爲めに日中は結氷融解し夜に入れば再び凝結する等四月中旬よりは黑龍江の結氷は漸次に龜裂を生じて破壞し五月中旬には氷塊完く流下して滊船は五月初旬より試航するに至りたり

されば黑龍江の交通は結氷解氷前後の一週間を除き半年强は氷上橇を用ひて氷路を利用し半年弱は滊船に因り水路を利用するを以て一年中二週間の交通杜絕を除き絕へず西比利亞の運輸事業を完ふせしめ交通上に潛勢力を附加する水利の恩惠は實に鴻大なるものと言はざる可からず

其三　黑龍江の水運

西比利亞に「オビ」「エニセイ」「レナ」黑龍の四大河あり何れも四千露里以上の長さを有し三千露里內外の航路を有せるものゝ中黑龍江は最後に於て發見せられ最後に於て航通を開かれたり而して其發見せられ航通を開かるゝも烏拉爾胡索克が最も天然と苦鬪し飢餓、猛獸、毒蟲、蠻族と爭鬪しつゝ或は鮮血を江畔に濺ぎ或は肥肉を江底に沈め殆んど二世紀の歲月間拮据經營せる中千八百五十八年の愛琿條約に黑龍江は西比利亞の一部に加へられ此れより黑龍江の交通權は完く露人に因りて掌握せられ其當初滿洲人が風力と人力とを籍れる戰船貨船「トングース」人が一挺兩櫂の櫂もて操縱せる刳木船は漸くに跡を歛めて江上常に黑烟を吸ふの異象を現し來りぬ

勇將「エルマーク」が詩きたる種は盡きず巨人「ムラウヵヨーフ」伯が植えたる苗は枯れず黑龍江の水利に因りて植民は增加せられ鑛山は發見せられ土地は開墾せられ商業は

發達せられたりしが其六十年以前に於て黑龍江上一隻の機關船種だもなかりしもの今や殆んど百八十餘隻に及べると傳へらる翻つて六十餘年の其當時に於ける交通を見ば如何江上を上下する運搬機關は筏小船刳木船の三種に過ぎざりしに愛琿條約前即ち千八百四十四年に於て黑龍江機關交通の先鞭者として露人「ガウリローフ」氏に因りて卒ひられたる軍艦「コンスタンチン」號は仝四十六年に於て黑龍江を遡りたる事あり仝五十四年に於て「ムラウヰヨーフ」伯が汽船「アルグーン」號を黑龍江に浮べたる爾來は年々少數の汽船もて航行を繼續し來りしが千八百七十一年に至り「ベナルダキ」會社は二十年間黑龍江航行の特權を得十二隻より少なからざる汽船を準備し、其後官船九隻の拂下を得且つ定期航行に對し年々二十四萬留の保護金下附の許可を得たり即ち此特權は千八百九十二年に於て終りたる後汽船會社株主「シベリヤコーフ」「シエベリユフ」等は從來の規摸を擴張して黑龍江航行の特權を得たりしが此れ千八百九十三年十二月二十七日にして大藏大臣と特約を結び向ふ十五ヶ年間の航行權を得たり此汽船會社を名けて黑龍江汽船會社と呼び要は貨物郵便乘客搭載に供したり特約の重要なる項目としては會社の有する航行權は上下黑龍江、烏蘇里河、鹹湖等にして十五ヶ年の中前期十年間は定期航に於て年々保護を得る一露里一留五十哥殘り五ヶ年間は五分減額の保護を受くる制規にして前期十年間年々會社が受くる保護金は十八萬三千五百三十二留五十哥を超過する事を得ざるの約なり而して黑龍江汽船會社の株數は二千にして一株五百留、會社の資本金は百萬留株主は唯だ露西亞國民に限られたり

現今黑龍江汽船航通は頗る盛大を極め之れを千八百九十六年に比し汽船の數は四十餘貨船また三十餘隻を增加なしたり千八百九十六年十二月黑龍江汽船の現在數は百二十一隻にして千九百年十一月の調査に因るに黑龍江汽船會社及び他の私立汽船會社即ち民有汽船數は百六十隻に上りたり現今滿州一名東淸鐵道布設の材料運搬のために一層繁盛を極め「プラゴウエシチエンスク」町に於て新造しつゝあるは九隻の汽船と四隻の貨船とにして黑龍江汽船會社が「ニコライスク」近傍の「マーゴ」に於て新造中の新形汽船八隻と十四隻の貨船とあり南烏蘇里の「イマン」村に於て二隻の汽船屯田兵村「イグナシ」に於て一隻の汽船は新造中なり黑龍江汽船會社が「ニコライフスク」に於て新造中の曳船用汽船は六百馬力を有せる鋼鐵製にして二隻の貨船中一隻は鐵骨木皮、一隻は裝鋼製にして何れも三萬「プード」を搭載し得べき大貨船となす

各支流中航通の最も驚くべき長足の進歩をなせるは松花江にして松花江の交通業は千八百九十六年に於て商品試賣の目的に因りて開始せられ爾後二三年間は年々二三

回の航通あるのみに止まりしが東清鐵道の布設工事に着手するや鐵道布設用材及び工夫糧食品等輸送の爲め黑龍江航通の流船は新たに航路を松花江に轉じ千九百一年五月には航通流船の數は三十隻以上に達したりと云へり

黑龍江定期航行の開通は年々殆んと其開閉期を遂へざるが如し即ち解氷の完く流下するを待ちて航通を開始するは日曆五月十五日以前にして其結氷期即ち第一結氷の流下する前後に於て閉づるは年々日曆十月二十五日以前にあり而して其結氷し解氷するの前後一週間乃至十日間は流船の交通完く梗塞するのみならず東西の交通遮斷する事あり即ち流氷完く流下し其影を止めざるに至りて流船の航通は開かれ河水結氷後安全なる氷路を作るに至れば黑龍江の水路を利用して交通を開くに至る即ち黑龍江氷結間に於て「ストレチエンスク」「ニコラヒフスク」及び其の他の諸支流は凡て橇又は馬背を藉らざるべからず此時期は十一月より四月下旬に至る殆んど五ヶ月以上とす

黑龍江商業流船會社が平時に取扱ふ航通業の制規は粗他の私設の流船會社と異なるなし其平時の航行船に二種あり一は曳船を伴はず郵便物及び乘客を搭載するもの一は乘客及び貨物を搭載し及び曳船を伴ふものにして曳船の數は一隻乃至三隻を限り四隻を伴ふは至つて稀なり郵便乘客船の眞速力は一時間二十露里を殆んど極度とし一晝夜二百五十露里を制限となす流車の進行中の如く郵便流船もまた屢々燃料搭載郵便物積卸しの爲めに規定の碇繫場に於て多少の時間を費すは常にして此他晴夜の航行濃霧中の航行には一時進行を停止する事あり流船會社は年々二回「ハバロフカ」より烏蘇里河を遡り鹹湖畔の「カーメンスイ、ルイバロフ」に往復するの權利を有せり流船航行規則に因れば「ストレチエンスク」より「ブラゴウエシチエンスク」に至るは六晝夜以内「ブラゴウエシチエンスク」より「ストレチエンスク」に至るは八晝夜を限るものとす而して秋期水多き際には「ストレチエンスク」「ブラゴウエシチエンスク」間は二晝夜を增し「ブラゴウエシチエンスク」「ハバロフスク」間は一晝夜半を增加し得べきの制なり而して「ストレチエンスク」「ブラゴウエシチエンスク」間の航行は時に一晝夜を短縮する事あり此れ蓋し天時の順候にして終始進行安全なるべき時を限るものとす而して曳船用流船に至りては速力の遲緩なるは論をまたず碇繫の時間もまた長く之れを乘客郵便船に比すれば發着の時間は二分の一を增加するを常とし之れが眞速力にして其流に隨つて下る際には一時間十二露里半を極度とし流れに逆ふ際には一時間七露里以内に止まるを常とす其流下の際一晝夜平均百五十露里其遡上するや百露里内外に過ぎざ

るなり

黑龍江商業滊船會社は代理店を浦潮斯德「イマン」「ニコラヒフスク」「ハバロフスク」「ブラゴウエシチエンスク」「ストレチエンスク」「キヤフタ」に亞き航通に關する事務を取り扱ひつゝあり千八百九十八年より黑龍江商業滊船會社と義勇艦隊との間に一種の契約成立し交互の便利を計り義勇艦隊よりは直ちに烏蘇里鐵道經由黑龍江に運送し黑龍江商業滊船會社よりは北、南烏蘇里鐵道經由義勇艦隊に積み込むを得るが爲め會社は「ニコライフスク」港に於て義勇艦隊より貨物を轉載すべき特別の滊船及び倉庫を備へ浦潮斯德港に於ては義勇艦隊より西比利亞內部に送るべき貨物を受取り之を汽車經由烏蘇里又は黑龍江に送達するの便を謀れり近來東淸鐵道滊船會社なるもの起り鐵道廳と特約を結び松花江と日本海間との交通を連絡し現今盛かんに其事業を擴張しつゝあり此他に黑龍江株式滊船會社なるものあり航路は

(1)「ストレチエンスク」「ブラゴウエシチエンスク」間千二百七十九露里の貨銀は一等二十五留五十八哥、二等十九留二十哥、三等六留四十一哥、手荷物一布は一留二十七哥なり

(2)「ブラゴウエシチエンスク」「ハバロフスク」間八百五十五露里二分の一の貨銀は一等十七留十一哥、二等十二留八十四哥、三等四留二十八哥、手荷物一布は八十六哥なり

(3)「ハバロフスク」「ニコラヒフスク」間九百三十九露里四分の三の貨銀は一等十七留十一哥、二等十一留、三等五留、手荷物一布は六十五哥にして此他「ゼー」「ウスリー」「アムグーン」等の諸航路にも營業を開始せり而して黑龍江商業滊船會社滊船の運賃は一露里につき一等は二哥半、二等一哥半、三等は四分の三哥にして十歲以下は無賃十歲より十五歲まで半額とし陸海軍士官兵士文官等の赴任或は旅行するものは定額より五割を減ずるものとす「ストレチエンスク」より「ウソリー」に至る貨物運賃は一布につき一露里十分の一哥にして一纏め三十布以上を積荷するものに限り以下は多少の增賃をなすを要す、右は麥粉、鹽、肉類、荷油、鐵、木材等にして危險物は船長の同意を得ざれば搭載するを禁ずるものとす會社乘客滊船中には特別客室あり之れに搭乘するは規定貨銀の外一晝夜二留五十一哥の增額を要す一等二等乘客手荷物は十布までを限りとし三等乘客は三布までを限りて無賃に搭載するとを得るなり

現今黑龍江滊船中乘客、郵便船は重に電氣燈を用ゆるが故に暗夜と雖も遲緩なる速力を以て進行するを得べく濃霧の際を除きては大抵進行するを常とす滊船中構造の堅牢にして且つ强大なる馬力を有するは「パロンコルフ」百六十馬力、車輪廻轉毎に二度蒸氣を出す「ジョン、カキ、リン」仝上「ツエサレーウエチ」仝上にして速力の迅速なるは「ポセッ

ト」を以て最とす、而して貨船に至りては鐵骨木皮のもの多く搭載力三萬布を有するものまた尠しとせず前已に述べたる如く曳船用の流船進行の速力は至つて遲緩なるものにして殊に其遡上の時は一時間漸く六露里に達せざるとあるのみならず郵便乘客船の如く暗夜を衝き霧を排し洪水に逆つて進行する能はざるより燃料を要する隨つて多く爲之碇繫も自然に回數を增すが故に郵便乘客船に比し發着時間に大差あるを認むべし總して曳船用流船は大抵二乃至三隻の貨船を曳くは常にして各貨船少くも五千布乃至一萬布の貨物を搭載するならん假りに平均七千布とすれば三貨船にて二萬一千布乃はち三百三十噸以上を搭載することを得るなり之を貨車に搭載するとせんか少くとも二十五輛即ち一列車を用へざるべからず又以て流船運搬力の大なるを知るべきなり

其四　「ブラゴウエシチエンスク」「ストレチエンスク」間

五月廿八日天清く氣冷やかに寒暖計は攝氏十三度を示したり朝來旅裝に忙はしく遠征の準備を整ひ埠頭へ駈けつけたるは午前七時にして流船の將さに出發せんとする時なりき」瀰々たる奔湍滔々たる激流風吹き浪荒るゝの日に當りては悽愴言はん方なき黑龍江も今日は風歛まり波眠りて唯船車に抗する水聲の僅かに淙々たるを聞くのみなりしが間もなく「ポセット」號は此處を發し「サハレンウラ」村を左にしつゝ漸く西に向ふ「サハレンウラ」村は「ブ」府の對岸にある滿州の一村落にして此處には亞歐陸路接續の電信局あり黑龍江畔の一城三村の中に數へられつゝありしも千九百年の北清事變に一朝焦土と化し去りたり此れより北西する四十露里の間滿州領の江畔は斷岩峭立して風景奇絶なり

「ブ」府より第一の流船碇繫場なる「ブッセ」兵村に着せしは宛も廿九日午前五時にして此處は「ブ」府を距る百三十露里の北方にあり此より北方百〇三露里なる「クマルスコヲ」に至るの間は「スタノウオイ」山の支脈は强く黑龍江を壓窄し河身爲に百五十「サージェン」に縮小し左右の峽谷には樅、落葉松、五葉松、水松、白樺、青楊等繁茂し天然の奇景また名狀すべからず船は益々北に進み「ノーウオ、ウオズクレセンスカヤ」村を經て三十日午後六時碇繫場「チエルニヤーヲ」村に達せり地は「クマルスコヲ」村より二百〇九露里の北方にある胡索克屯田兵村にして寺院、小學校、郵便電信支局及び二戸の小商店あり此れより北西すれば江畔の風景は奇絶にして旅行者の目を惹く處少からず三十一日午前十時「ペケット」碇繫場に着し間もなく解纜して北に向ふ此より北西五十露里許の間は根松、落葉松、水松、柳、樺等の森林蓊鬱として麻麓の如く繁茂し最も良材に富む年々「ブ」府に集

中する數千の筏は重もに此近傍より產出するものなりと云へり午後六時船は「エムール」河嘴を廻はり斷崖に沿ひつゝ「アルバジーン」に達したり

「アルバジーン」城

地は今を去ること二百四十餘年前有名なる胡索克の統領「エロヘーバヽロフ」が第二黑龍江探撿を企つるや遠征隊として百十七名の義勇兵を「ヤクーック」に募り同府將軍より與へられたる廿一名の狙擊兵二門の大砲三十二名の精兵とを率ゐ黑龍江を下り「エムール」の河嘴に土民を攻擊して之れを破り一屯營を立てしは即ち現今の「アルバジーン」にして其以前は果して何れの汗に屬せしやは詳らかに知る能はず星霜五年の後遠征者「ステパノフ」が黑龍江の下流松花江近傍に滿洲兵と戰つて敗北するや黑龍江畔に屯營せる各所の胡索克兵は各其處を力守する能はずして一旦退去するに至りき此より先き千六百七十年の頃罪を犯して逃走したる「チエルニコフスキー」なるもの一隊の冒險兒を驅りて黑龍江を下り「アルバジーン」を占領して「トングース」人より貢稅を徵收したる事ありしが其後に至り滿洲の大守「ランタン」將軍は清帝の命を奉じ黑龍江畔の露人を一掃せんとし巡狩を口實とし步騎を以て密かに「アルバジーン」を偵察せしめしに宛も「アルバジーン」より黑龍江畔衛戍の爲にとて派遣せられたる五十餘名の胡索克が清國愛琿城近傍に於て滿洲兵の爲めに生擒せられたるを機とし北京政府よりは特使を發し「アルバジーン」の守將「トルブジーン」に向つて開城を勸めしかど勇猛義烈の將軍は斷然之れを拒絕し固守の策に怠りなかりき於是乎翌千六百八十四年七月慓悍なる六千の滿州馬隊四千の精兵は百門の大砲を備へて陸路よりし五千の水兵は百五十隻の兵船を率ゐ水路より應援として大攻擊を始めたり此時守將「トルブジーン」の部下は步騎僅かに三百四十人の胡索克と百三十の土兵とに止まり軍器としては三門の野戰砲と三百挺の小銃とあるのみ加ふるに柵壘完からず衆寡敵する能はざるより數多き殺傷を遺して「アルバジーン」は將さに滿州兵の手に落ちんとするに至れり

「アルバジーン」大敗の報莫斯科に達せるや露帝は「ペートン」を以て應援隊長となし六百の胡索克を率ゐて黑龍江に向はしむ是に於て「トルブジーン」再び將となり「チルチンスク」守將より應援せられたる二百の步兵を加へ「アルバジーン」に至り盛んに土壘を興し堡砦を結ひ木柵を設け專ら防禦の策に怠りなかりしが支那兵之を偵知し「ランタン」將軍また之れに將として八千の步騎四十門の大砲を率ゐて來り攻め四面合圍の大打擊を加へ猛烈なる激戰數回の後ち千六百八十六年七月三日剛勇無双の「トルブジーン」は身步騎に先だち指揮尤も力めたりしが遂に流彈の爲めに斃れたり此に於て副將「アフ

カナシ、ペートン」代つて指揮官となり善く戰ひ善く守り屢々支那兵を惱ましし辛うじて「アルバヂーン」を敵手に委せざるを得たりき苦守年を超え露國政府より使を北京政府に送り「アルバヂーン」の圍みを解かんとを乞ひ「ゴロウヂン」を全權大使に任じ露清兩國の疆界談判を開かしむるとに決したりしが康熙帝の使臣は優勢の兵力を以て脅迫的の外交政略を用ゐ遂に「ゴロウエン」の提議を排斥して外交上の勝利を收め千六百八十九年八月二十七日「チルチンスク」條約を定めたり此れより百六十餘年間「アルバヂーン」の運命は其歸着せる所を知る能はざりしが「ムラヴヂヨーフ」伯が愛琿條約即ち千八百五十八年五月十六日始めて露領として世界の地圖に指定せられ露清の一大古戰場として古き胡索克の殖民地として西比利亞歷史上に名譽の紀念を留むるに至りぬ

「アルバヂーン」に上陸せしは「ストレチエンスク」驅護歩兵大隊長少佐「ナザーロフ」氏及び「アルバヂーン」屯田兵六七名胡索克士官一名調劑官一名農民三名採金工夫五名にして余等の投宿せし處は公設驛傳の別舍なりし投宿後余は少佐と與に城南城北の觀察を終り街の西端なる古き寺院の傍らに至りしに四隣の地形何となく異樣に感じたりしが余は「ナザーロフ」少佐に問ひ始めて二百年以前支那兵に破壞せられたる故城趾なりしとを知り得たり此れより寺院の背後に出づれば古墳累々として其數五十以上もあらん中に赤黑く錆びたる鐵柵を以て圍まれたる一の墳墓あり碑石は花崗石にやあらん古色蒼然として青苔滑らかに碑面の數多き小さき文字は明かに判然せざるも唯「勇士「トルブヂーン」之墓」なること丈け讀み得たりきされば此古き墳墓こそ勇猛義烈の快男兒「トルブヂーン」の墓なりしなり萬斛の怨を呑んで「アルバヂーン」城頭に永く勇士の英魂を遺せし彼れが安息處なりしなり胡索克健兒の花として永く遠征軍に歌はれし彼れが地下永眠の樂園地なりしなり彼れが墳墓の四圍に位置よく並びつゝある古墳は彼れと名譽の死を同くせる部下の勇士にやあらん石階草深うして綠光悲しみ碑頭風蕭條として日色傷む眼を閉ぢて墓前に拜すれば萬籟寂として天地沈々鳥聲また古勇士を吊ふものに似たり余は此名譽の勇士が其當時に於ける戰鬪の如何に猛烈なりしやを思ひ苦戰力守の如何に困難なりしやを追懷し凝視低徊去るに忍びず懷古の感に打たれしが斷腸一滴の血涙を手向け此處を去り少佐と共もに歸寓の途に就きたりき

六月七日天曇り氣冷やかに北風寒霧を送り來りて寒暖計攝氏十度に下りたり午前八時余は「ナザーロフ」少佐に告別し再會を約して驛傳馬車を雇ひ陸行「レーパワ」屯田兵村に達せしは午後三時なりしか山道十七露里半に七時間を費やしたり休憩する間もな

く「ストレチエンスク」行の滊船「アレキサンドル」號の寄航せるを幸機とし之れに乘込み此れより以西百二十露里の「イグナシ」屯田兵村迄乘船するとに決したり「レーノヲ」より「イグナシ」に至るの間には「オルロヲ」「イリニチナーヤ」「ズウルベーヲ」「スギブチーヲ」なる四寒村の二十乃至三十露里を隔て江畔に散在せしのみにて特に見る可きものなかりし「アレキサンドル」號の「イグナシ」兵村に着せしは翌六日午後七時なりしが此時江畔に團欒する鑛夫の數群ありて露營の準備に忙はしく左右に駈け廻はりつゝ水を汲み木枯を拾ひ集むる樣子の可笑しきより余は彼等の傍に坐を占めたりしが休憩する間に先づ數個の「バケツ」と大袋とに視點を注ぎぬ元來西伯利亞内部の旅行は野に伏し山に寢ね水ある處に飲み木ある處に焚くは殆んど常例にして偶々驛傳の設けある處と雖ども旅客に供するものは唯一の白湯のみ一塊の山鹽すら容易すく求め難き程なれば他の食用品に至りては固より之れを得るに難きなり江畔に憩へる一群の如き單純なる大陸的旅行者は一箇の湯釜と一袋の麵麭と飲けたる椀の外何物をも携ひざるなり天地を家としつゝ旅行する彼等は日本の乞食が古殿廢堂の裡に安眠するが如き氣樂の旅行に比す可くもあらず蚊虻多き河畔に安眠し毒蟲多き草野に起臥し霜露至るも風雨來るも晏如として意に介するなく濕るれば即着衣のまゝ日光に曝し乾けば即ち又た塵埃の裡に起臥す彼等の寢具、雨具、防寒具としては唯不潔の羊皮外套の外に携ふるものなく天然と苦鬪しつゝ宛かも日本の馬喰が牛馬と苦樂を與にして長き山道廣き草原を旅行するが如き旅行をなすなりされば天然の氣候と苦鬪するの忍耐と勇氣とに至りては未開の滿州人北極圈内の「サモイド」人種に讓らざるべきも社會と苦鬪しつゝ難關を破るの勇猛心に至りては殆んど皆無なりされど無智蒙昧の人種を感化せしむる露西亞の同化力は幾星霜の後に於て野獸に等しき此等の人民を感化するに至るべきは明了なる事實として疑ふ可からざる所なり

「イグナシ」は黑龍江畔の重なる屯田兵村にして戸數六十八人口二百五十餘あり地は「ブ」府を距る陸路七百四十露里水路七百八十二露里「ストレチエンスク」に至る陸路三百九十八露里水路四百九十七露里あり土着の農兵は凡て是れ胡索克屯田兵なり千八百五十八九年の頃後貝加爾州より移住したるものにして現今二戸の歸化朝鮮人あり地に兵村役場、郵便電信支局、驛傳、寺院、小學校、二商店及び分隊の胡索克守備驅護兵あり兵村と相對し黑龍江を隔てゝ漠河なる滿州の一大村落あり余が遠征の途次此地を探檢せしは明治三十年六月十五日なりしが此當時の漠河は人家稠密住民また一千以上に達したる大邑として黑龍江畔二千露里の間に於て愛琿城に亞きたる殖民地なりしに千

九百年の北清事變に一朝焦土に化し現今胡索克屯營は此處に設けられ無盡藏と名けられたる漠河金鑛は露人の掌中に落ち去り數十戸の殖民さへ移殖せらるゝに至れりと云ふ六月十八日旅裝を結束し「ストレチエンスク」行の汽船「クニャージ、ヒウコフ」號に乘込み午後一時此處を發したり此より「ボクロフスカヤ」に至る水路六十露里陸路六十三露里の間に「アマザル」なる一屯田兵村を認めしが南西に向ふ十五六露里にして左岸に白堊の斷崖を見る是より右岸の露領は嶙々たる斷崖斧もて削れるが如く巍々たる奔湍は常に怒て怪聲を發せり益々西するに隨かひ劒を植うるが如く鋸齒の如き奇岩は交叉して天然の奇景名狀すべからず左岸は白楊白樺の樹林葱々として翠光掬す可し愈々進めば屈曲銳どき處兩岸の斷岩は河身を壓窄して六十米に足らざる處あり此近傍は「ストレチエンスク」「ニコラヒフスク」間二千九百五十六露里餘の航江中尤も危險なる處にして常に旅客の肝膽を寒からしむ此れより船は東に向ひ南に進み「モーシンクダ」「コルビンチエスカヤ」屯田兵村に寄航し南東して「ヤンチコーワ」なる一兵村を過ぎ廿三日午後十時「ストレチエンスク」胡索克屯田兵村へと着したり

其五　「ストレチエンスク」町

「ストレチエンスク」町は北緯五十二度十五分東經百三十五度十九分の處に位し什加河の東岸にあり地は「プ」府を距ること水路千二百七十九露里黑龍江の江口「ニコライフスク」港を距ること二千九百五十一露里浦潮斯德を距ること水路二千九百二十露里餘の處にあり是より「イルクーツク」府に至る千百露里餘聖彼得堡府に至る六千九百八十八露里となす地勢前面即ち西は什加河を隔てゝ高原に對し南東は高丘を負ひ北は遠く平原を控へて數千頃の耕牧地を有せり市街は南北に長く東西に短き不規則の長方形にして南端より二露里許什加河に沿ふて是れより以下は弓形狀に變じ全市街は宛も鎌狀をなせり南北大凡四露里東西四分の三露里沿岸町大町山脊町の三長街は南北に亘り十一條の小巷は之を横斷せり沿岸町は家屋櫛比巨商大賈軒を連ねて一等商店あり就中「ルキナ」の如きは數箇處の製造場と數戸の商店を有して此地に於ける富の大半を占む「ルキナ」に次げるは猶太商人にして此他「フトーロワ」及び二等商また頗る多く年々の商品取引高は八九百萬留に上るべしと云ふ重なる建築物は郵便電信局、胡索克兵村役場、警察署「ストレチエンスク」屯駐護疆步兵大隊營處、裁判所、寺院、學校、孤兒養育院、官民共有倉庫黑龍江商船株式會社出張所「ルキナ」酒製造所、石鹼製造所等あり市街の南部に渡船場あり渡船の結構極めて簡便なり什加河の中流に三個の碇を沈め此れより數隻の小船は流れに隨ひ一二三と順次直線に毎船三十間許を隔離し堅牢なる鐵條を以て

之れを連結する七八隻にして人馬を搭載すべき本船は最後の小船より四十間許の下流にあり之が構造たる二隻の狹長なる舟を結合し板を布き並べ兩舟間に一間許の間隙を設けて流水を通過せしむ本船の舳頭には門形の如きものを据へ上部横木の中央に鐵條を貫通し之を上流七八隻の浮船に連續せしむ而して楫の操縱に因り奔濤を切りて斜めに右し或は左するとの速やかに且つ自在なるは宛も蒸氣瀘關を具ふるやを疑はしむ此方法に因る時は縱令如何なる大河急流なりと雖も蒸瀘力を籍らず人力を費さずして容易く對岸に達するとを得べし而して水勢急なれば運行力速やかにして水勢緩なるに隨かひ運行力また遲緩なりとす。

「ストレチエンスク」町は今を距る六十餘年前乃ち千八百三十三年の頃殖民せられたる者にして其初め四五戸の胡索克は具加爾湖の西部より此處に移住し千八百九十年以後に於て西比利亞大鐵道布設の計畫略決定せしより沛然として四方より集まりし民族は韃靼、猶太、歐露人、清人等にして就中猶太人尤も多く移殖し兵村在住民の戸口と富との比例を取らば猶太人は十中の五六を占むると云へり現今兵村に永住し得可きものは胡索克屯田兵にして他の移住農商は是れ單に一時の寄留者に過ぎざるなり即ち一期十年を限りて借地せるものなれば一旦兵村取締者即ち「アタマン」の殿達に因りては直ちに此地を去らざるを得ずと云ふ驅護屯駐歩兵大隊に八百人にして陸軍歩兵少佐「ナザーロフ」氏之れが指揮官たり屯營は「ストレチエンスク」兵村を距る南方三露里の處「シユカ」河の支流「ガワ」河畔より南露里許の高丘に設けらる「ガワ」河畔五棟の木造家屋は十字形或は方形に建築せられ冬時兵士の冬籠を爲す處となす元來驅護兵の任務たる邊境防備の爲めに設けられたるものにして此地方の驅護兵は境界衛戍の任に當れる上にも一旦東洋と事あるに際しては屯駐兵に臨時徴募を加へ千人として出軍するものなりと云ふ

○後貝加爾州の一

其一　第一回の遭難

七月十一日余は「クヽイ」石山を探檢する事に決し一塊の黑麵麭と一片の燒肉とを囊中に納めたるまゝ客舍を發し「ストレチエンスク」渡船場を渡りて對岸の停車場を右にし南向「マタカン」川の鐵橋を渡り「マタカン」村を過ぎ「クヽイ」屯田兵村に達して民家の一室

を借り受け此處を根據として四隣を探檢するとに決したり、

「クヽイ」村は什加河畔に横はれる兵村にして戸數百五十有餘あり東西露里南北二露里半寺院、學校、郵便支局四商店、四酒、舖あり

翌十二日午前九時什加河を渡り花崗石の石山なる「クヽイ」採石處に向ふ

崎嶇蜿轉の坂路は思ひの外險岨にして一露里の間は絶へず流汗に洗はれつゝ登れば此れより山腹を迂回するの道あり樹林としては唯白樺の一種あるのみにて滿山凡て花崗石を以て成り起臥偃興大なるは方一丈に亘り小なるは方四五尺を下らず累々として重疊せる石材は其幾萬なるやを知る能はず余は路傍に休憩せる石工を案内として鐵道廳出張監督官「ザウキンド」氏を訪ひ石山の實狀より滿洲鐵道の概況を質問し午後別れを告げ此方面より「ストレチエンスク」町に通ずる間道ありとの事を確かめ此處を下る事露里半にして果して右に一の間道を見出したりしが此間道こそ余が虎穴に入り龍頷を探ぐる死活の岐路なりとは知るよしもなく足に委せて東の方林中に馳入りたり

直線曲線或は方形狀の小逕を迂どり或は道なき處を往復し五谿谷三耕地を過ぎり湖澤の如き低地、馬背の如き高原を七露里斗りも來りしに數百の鵠の翔翱せるを見るより短銃を取り出し一發の下に二羽を斃し之を炙りて一塊の黑麵麭に腹を肥やし暫く此處に息つき居たり余が跋渉せし道路は凡て一旦伐木せられたる第二期の樹林地にして赤楊の一種は唯だ河畔の濕地に叢生せるを認む北方に面せる溪谷には殘雪猶皚々として高原の炎熱蒸すが如きにも似ず樹蔭濃やかなる谿流に臨めば頓に寒冷を覺ゆ所謂十歩の間寒熱兩帶の氣候を實驗するに足るべし行々樵夫が道導べの爲めにとて削りたる立木を目標とし牧夫が冬季飼料にと運せたる蹄痕を拾ひつゝ漸く六七露里を進みし頃ほひ圖らずも前面に當りて樹林中に隱現せる無數の天幕樣のものを見しより怪しみつゝ愈ゝ進めば愈多きに驚き左右を見渡せば遙かに砥の如き平原を樹林の數帶は規則正しく區劃して此處彼處に二十乃至三十の天幕縱列横列をなして斷連せるを認めたり彼れ是れする中一名の歩哨兵は後より追かけ來り勵聲叱ゆるが如く「哨兵線を破りて山寨の鐵門を潛ぐるは抑何處の人ぞ」と余が身邊近く寄り添ひたり之れと同時に一名の兵卒は十數歩近き樹陰より躍り出て銃臺を叩き劒身を振り他の兵卒に向ひ聲高かく「近來旅行家と稱する一種の間諜が日本亞米利加、獨逸、英吉利等より西比利亞内部に入り込み或は露清疆界近く侵入して西比利亞及び滿州、鐵道の内情を探くるもの頗々なりしとの事を聞き居りしが此小さき黄色人種も或は其類ならん

大膽にも平然として我が哨兵線を破り野營を偵察するとは言語同斷の奴なり」と言へば他の一人は頭を動かし「眞に然り此事事實とすれば此れ近來の珍事なり元來此處は外國人の來るべき處に非らざるに假初にも我が哨兵線を蹂躙せる上は最早如何に辨解すればとて假籍すべきにあらずいざ此れより彼奴を拉して軍法會議所に送致し應分の恩賞に預からん」と互に目配せしつゝ余を左右に擁し警戒に怠らざるものゝ如く言葉荒く余に同行を勸めたり此時余は襄中より五留の金貨一個を取り出だし溫容甘言切りに默許を乞ひしも容易に見遁がすべき氣色もなかりしが理なる哉屯營內一種の慣例は疑はしき間諜者或は軍事探偵を捕へて糺問し事實を確めたる上には當坐の恩賞として露貨三留と及び卒一等を進めらるゝが故に一應上長官に上申するは彼等のために大なる便宜なるのみならず默許の事發覺したる曉には彼等は重き軍法に照さるるの制規あるを以て一方には進級と恩賞との希望あり一方には處罰の疑懼に制せられ之れがため躊躇なく余を拉し去りしなり

屠處の羊の如く深き思に沈みつゝ首を低れて遁るべき唯一の活路を失ひたるに落膽し結果は如何に成り行くならんと苦心しながら戛々たる鐵靴の音に憂を亂され不圖前方に眼を注げば陸軍步兵中尉の制服を着けたる一名の士官は靴音高く此方を指して來りたり此時余は心竊かに思ふやう「士官の來りしこそ好機なりこれより誠らしき虛を構へ機に臨み變に應じて虎口を脫するの方便を見出さん」と悠然として停立する間もなく士官はすでに余が身邊僅に六尺の近きに步を留めたり兩卒の申告を左右に聞き流し赤き鬚髯に波打たせつゝ「近來日本人にして西比利亞の軍政を探り滿洲鐵道の內容を偵察するもの頗る多きと聽きしに遂はず野營の鐵門を破りて深く寨內に侵入せる君は果して尋常の旅行者にあらざるべし此處は「ガワー」の要寨とて北には斧鉞の入らざる深林を控かひ西には滔々たる上黑龍江の流域あり南には一望千頃の平原あり東には數多き關門と攀ぢ得可からざる天然の保障あり四圍には十步に步哨百步に屯營の設あり露人すら寨內に入るを許さゞるに屯駐本營近く侵入せるは果して何等の要務かある要するに寨內を探らんが爲めなるべし」と聽かて兩卒に目示して速に余を拉し去れと命じたり、

日常事あれかしと祈り寨內に肥肉の嘆を發しつゝある兵卒は慰み半分に進級と恩賞の希望に驅られ容謝なく余を軍法會議所に拘送せんと促かしたり事此處に至つては最早默して止むべきにあらずされど慾ひ士官の怒を沽ふも得策に非ざるを覺悟し微笑しつゝ貴官は幾度か死生の難關を過ぎ正邪鑑識の要路を經たる明才ならんよもや

余の如き眞正の旅行家を誤つて間諜なりとの解釋を下すが如き失あらざるべし果して間諜なりとの事實が之れを證明するに於ては余また何をか言はん鼎鑊の刑も避くる所にあらざるべし」と呟やきたるを左右の兩卒は眼を怒らし「如何に此小さき日本人の大膽なるよ半夜戸を破りて侵入し金庫近く忍びし盜賊に等しき行爲をなせるにも係らず猶ほ且つ罪跡を煙滅せんとする强膽より推考を下さば彼れが間諜たるの事實を證明するに足りなん前例に照らし「ガワー」の入江に檻送し銃殺の刑に處するは煩を省く最近の手段なるべし」と言へば士官は頷きつゝ言ふやう「否銃殺は輕々しく行ふべきにあらず先づ事實上間諜たるの證據を確かめんが爲め彼れが所携品を調査し然る後之れを軍法に處するまた遲きにあらざるべし」と先づ余が携帶品を調査する事に決したり

分秒を增す毎に危險は益々加はり疑團は愈々高まりたり此時余は心竊かに思ふやう「如何に亂暴なる士官なればとて彼れの肉には溫かき情あらむ如何に慓悍なる露兵なればとて彼等の骨には凉しき義あらむよし間諜と見認らるればとて容易すく彼等のために「ガワー」の水底に投げ込まるゝが如き事はある間敷も飜つて考ふれば余が携帶品中には充分彼等の疑團を事實ならしむる滿州鐵道地圖あり間諜なりとの證明を確め得べき西比利亞各都邑の精細實測圖あり尋常の漫遊旅行者にあらざるの事實を說明し得べき數多の報告書類あり若しそれ不幸にして此等の物件を發見せられなば萬死を出づるは難中の難ならん死は固より期する所なるも前途猶ほ遼遠の身を以て此處に爭を求め甘じて死地に陷るるの愚を學ぶべきに非ず」と考へつゝある中士官は兩名の兵卒に身體搜索を命ずれば舌打しつゝ左右より余が懷中に手を差し入れんとしたりしが所謂危機一髮絕體絕命とは斯の如き時をや云ふならん事此に至つては最早口辯を用ゆ可き時にあらずと死を決して彼等の手を拂ふと同時に短銃に手を掛け「咀何等の無禮ぞ余は日本にあるの日露國の士官は仁厚く兵卒は義に强しと聞きしに劣りし君等の無作法此れ等は果して露國固有の軍人氣質なるか余はもとより間諜にもあらず探撿者にもあらざるは「クヽイ」石山の「ザッキンド」技師に照會しても事明了ならん然るに事此處に出てずして妄りに脅迫刼掠の如き作法は旅行者を待遇するに少しく輕忽に失するの觀なきか余が死生は貴官の掌中にあらんされば軍法會議に於て制裁するこそ至當ならん」との抗議を沈默しつゝありし士官は幾分か感ぜしものゝ如くなりしが理に暗き兵卒等は余が抗爭を耳にもかけず猶も余を緊迫しつゝあはや懷中に手を差し入れんとする一刹那士官は聲高く「暫く」と息急き叫べば兩名の兵卒は飛び

退さり左右に分かれて姿勢正しく突立ちたり

「哨」の一字にて余が死生を判決せる出來事こそ不審なりと首を擧げて見上ぐれば鐵靴高く野草を蹂みつゝ十數歩の樹陰より顯はれたる人影は少佐の服裝したる上長官にして四邊を見廻したる後士官兵卒の默禮に輕く頷きつゝ彼等の上申を聽き取り威儀を繕ろひ余が顏を見詰め大に驚き「アヽ君は日本の旅行者にてはあらずや」と不意に叫びたる聲に躍り上らん許に余は驚きたり理なる哉此士官こそ余が黑龍江に遡ぼるの際「プラゴウエシチエンスク」より郵船ポセット號に仝乘し相共に手を携へて「アルバジーン」城頭に猛將「トルブジーン」を吊ひし當時仝宿せし「ストレチエンスク」驅護歩兵大隊屯駐の大隊長少佐「ナザーロフ」氏なりしなり

事の意外なるに少佐「ナザーロフ」は勿論士官兵卒の視線は一時に余が短身に集注し暫らくは忙然として何れも沈默せるのみなりしが軈て「ナザーロフ」少佐は言葉輕く「日本の旅行者よ君は如何にして此處に來たられしか此處は「ガワー」の要塞とて露人の出入をさへ許さゞる所にして殊に外國人の墳墓地とまで綽名せられたる護驅要塞なりしに危くも死地に迷ひたる君が眞意は蓋し好んで哨兵線を蹂躪し故らに墳墓を此地に求むるが如き愚をなさゞるべし」と此れより重なる糺問をなしたりしが余は石山事務所訪問より誤つて山道に入り迷ふて哨兵線内に入りし事及び士官の威嚇兵卒の脅迫等逐一に開陳せるを「ナザーロフ」少佐は聞き了り中尉及び他の二兵卒を顧み言葉靜かに「日本の旅行者は余が知己にして決して怪しむべきものにあらず哨兵線内に入りしはこれ余を訪問せん爲めなるべければ之れを軍法會議に附するの理由なきのみならず余は殊に之れを歡待せざるべからず汝等は最早交代の時も來らん退いて休憩すべし」と余を促がして大隊本營へと急きたり

少佐に勵まされ夢路を辿りて數多き野營を縱横に廻はり大隊本營に至れば少佐は言葉を改めて言ふやう「アヽ君は幸運の人なり若し余にして五分時後れて君に邂逅しなば君は軍法によりて「ガワー」の河底に魚腹を肥すの人となりしなり本春以來寨内に入り銃殺水葬せられし外國人は三名に上りしかも世人の絕えて之れを知るものなきは秘密の寨内よりもるゝ事なきによれる故ならんかされば露國人種中猶太波蘭等の人種さへ「ガワー」の要塞は外國人の墳墓地なりとて深く警戒しつゝあるにも係らず君は哨兵線を破つて深く屯駐本營近くまで踏み込みしは實に危險の事なりしなり爾後決して右の如き危境に足を踏み玉ふな且つ「ストレチエンスク」に歸らば速かに此地を立ち去らるべし」と一葉の名刺を出して通行券を認め兵卒を案内として余を「ストレチ

エンスク」迄送らしめたり、

再生の恩を謝して「ナザーロフ」少佐に別れを告げ兵卒に導かれて三ヶ所の關門を通過し「ガワー」河の木橋を渡るの時所謂外國人墳墓の地は此深潭なるやなど考へ肌に粟を生じつゝ聽て「ストレチエンスク」町の郊外にと出てたりしを以て厚く兵卒に禮し此れより脱兎の如く客舍に馳せ歸り「ウオーツカ」酒に興奮したるまゝ身を長椅子に投げ入れ前途の旅行に思を碎きぬ

其一一　「ストレチエンスク」「チルチンスク」「チター」間

旅裝を解き脚を「ストレチエンスク」に留めしより已に二旬有餘北征の旅思轉た堪へ難たかりしも數日前よりの霖雨に什加河の支流汎濫して交通爲めに梗塞し陸行頗る困難なるべしとの事を聽き徒らに月を經過したり日を重ね時を加へて河水は益々增加し河畔は凡て汎濫の水害を蒙り鐵道の破壞電線の切斷人家の流失家畜の死傷ありしを耳にしたりしが果せる哉余が出發せんとする前一日さしも强き公設渡船の鐵條は切斷せられて流失し對岸との交通全く杜絶したりされど水暦少なかりし爲め航江を見合せ居たりし滊船は連日の增水に俄然活氣つき埠頭附近は時ならぬ繁忙を來したり此日鐵道廳用の滊船「アタマン」號は午後六時半「ミーテルフアン」に向つて出帆すべしとの事を確め得たりしが故に急ぎ旅裝を結束し埠頭にと車を驅りぬ

濃き油を流すが如き什加河流を蹴立てつゝ江魚の快眠を破りて南進せる「アタマン」號は屢々左岸の危巖に脅やかされ右岸の砂洲に驚かされ漸く十二露里餘を遡り「クヽイ」屯田兵村に着し翌十九日此處を發して南西に向ひたり「クヽイ」の未成鐵橋を右にし西に向ふ十五露里の間に「デリユーン」「ウギツタイ」等の小屯田兵村を過ぎ「ウギツタイ」河鐵橋より上流露里を遡れば此處には官有「セメント」製造所あり是れより高丘に沿ふたる鐵道線路近く二分の一露里は白堊の斷崖にして之れを超ゆれば一凹谷を隔てゝ大理石の高丘あり間もなく「ホーロタ」なる一寒村を過ぎ船は益々西南に進み高丘の盡くる處砂洲は强く什加河を壓窄して流域は爲めに弓形狀に曲げらる此より「アタマン」號は幾度か坐洲し辛ふじて「ピヤンカ」農村に達し上「クリユチエフスキ」の渡船場を過ぎ西に向かひたりしが翌午前七時「チルチンスク」碇繫場に着し午後一時此處を發して南西に向かひ午後八時船は「ミーテルフアン」屯田兵村に着したり

「ミーテルフアン」は什加河畔に横はれる胡索克屯田兵村にして戸數百許人口五百以上あり舊來の住民は「ギリヤーク」韃靼人及び猶太人種等にして胡索克は千八百四十年頃移住したるものなりと云ふ地に村役場寺院、學校、鐵道廳軍務局出張所、胡索克騎兵小隊

郵便電信支局、六商店、七酒店等あり七月廿日徒歩逆征「ネルチンスク」に向ふ行程四十五露里「ミルサーノワ」に至るの間國道四近の風景は單調にして左方には芝生の高原斷連し右方は雜草叢生の低原のみにして「ミルサーノワ」村に達したるは午後七時半頃なりき驛傳に就き一宿を求め合宿所に入り晩餐後は長椅子に身を横へたりしが床蟲の襲撃に堪ゆる能はず庭前の車上に羊皮を被り冷やかなる星光を眺めたるまゝ一睡を沾ひぬ

「ミルサーノワ」は「ネルチンスク」を距る二十九露里半戸數七十五人口二百八十餘あり地勢後ろに高丘を負ひ前面には遠く七八露里の平原を控へたる單列狹長の兵村にして寺院驛傳一商店二酒舗等あり此日宛も露國の祝日に當り村民擧つて業を休み醇酒を汲み酒庫の門外は市をなし翁嫗、孺を交へて高歌するあれば處女の青年と手を束ねて舞蹈するあり一方には牛骨を投じて賭博するの無頼漢あれば他方には腕力を爭ふの慓悍兒あり泥醉して馬糞の中に首を埋むるの怠惰者あれば少婦に辱められ頭を抱へて走る輕薄兒ある等田舍の光景何となく可笑しくも面白かりしが住民の飲酒料は實に驚くべきものにして「ウォーッカ」(日本の二番燒酎の如きものにて四十一度を有し無臭無色味美なり)一樽(三合三勺入の瓶二十本入れたる瓶四十を以て一樽となすが故に樽の容量は二斛六斗四升)は之れを一週間に飲み盡くすと云へり盛冬の寒氣は寒暖計攝氏零點以下四十二に下る事あり此際「ウォーッカ」に泥醉者は路傍に倒れ凍死するものまた年々三四人ありと云ふ

廿一日、余は徒歩旅行を繼續して「チルチンスク」に向ふ七露里許を進めば鐵道線路は什加河畔に走り國道は山に入る山道は凡て樹林なき芝生の高原にして十餘露里の間は單調一樣の風景のみなりしが燒くが如き日光蒸すが如き熱風に苦められつゝも、憩ふて涼を取るべき箇處なく食料品を入れたる籠を被り針の如き芝生に蹲踞して息つき居たりしが牧草を刈りたる歸りにやあらむ長柄の大鎌を携へたる胡索克の來るを呼びとめ、此れより「チルチンスク」に出づるの間に水あるや」と問へば彼等は左方の圓谷を指さし「露里弱にして巨岩あり其下には氷の如き冷泉あり疾く行き玉へ」と其言に隨がひ急ぎ足に駈け付くれば果して岩石あり其下に冷泉の沸々として湧出せるを認めたり試みに手を以て掬すれば涼氣筋骨に徹し三回にして已に指頭の凍ゆるを覺えたり午後七時「チルチュ」河の渡船場に達したり山道に入りしより此に至る十九露里の間は七八の高原を數へしも樹林としては一株の灌木すら見出す事能はず唯短、かく硬き芝生にあらざれば雜草の斑らに萠えつゝあるのみなりき此れより公設渡船場を渡れば

坦平磨ける砥の如き低原を横斷する四露里にして午後九時「チルチンスク」町にと着したり

「チルチンスク」は今を去る事二百四十餘年前千六百五十八年の頃「エニセイスク」の司令長官「パシユコーフ」が黑龍江に遠征を企つるの際始めて此地に要塞を建てたるものにして其後清國康熙皇帝の卓絕なる烱眼は早くも彼得大帝の野心を看破して黑龍江畔に屯田兵村を設置し專ら邊疆衛戍に力を用ひ將來の禍機を洞察し黑龍江畔より露人を逐はんとの目的を以て「カムチムール」侯引渡しを名とし精鋭なる滿州馬隊に步兵を加へ軍を「チルチンスク」方面に進めたり。しかも露國の强硬なる擧動に辭易して此地を去らざるべからざるに至りたり此際「チルチンスク」要塞には守將某を始めとし少數の胡索克兵と應募新兵とに過ぎざりしが莫斯科政府は邊疆防備の忽せにすべからざるを悟り一方には此地方の警備を嚴にせると同時に一方には大に軍兵を「チルチンスク」地方に募つて黑龍江の探檢をなさしめたり此時露國の勢力は漸く膨脹に傾き擧動また活潑なりしが外交上の勝敗は完く何れにも傾かざりしに千六百八十七年「アルバツーン」城の役に於て敗軍したる結果露國政府は不利益なる條約を締結して外交上にもまた失敗したり此以前より「ネルチンスク」は已に露國の版圖として露領の地圖に彩色せられつゝありしを康熙帝は機を見て之れを露國の手より剝奪せんと欲し使臣「ランタン」を將とし一萬の步騎を率ひて上黑龍江に航江せしめ示威運動を以て脅迫的戰鬪準備を整へ遂に黑龍江を疆界となさんとする彼得大帝の使臣「ゴロウエン」の提議を退けしめたるより千六百八十九年八月廿七日此地に於て「ネルチンスク」條約なるものを締結したりしが「ネルチンスク」は此より永く露清の外交文書に露國が失敗の墨痕を留めたりき、

星霜百六十の後巨人「ムラウヵヨーフ」伯が黑龍江遠征をなすや此地方の住民を胡索克に編入して「カンスク」地方よりは新たに胡索克を移住せしめて「ネルチンスク」要塞に衞戍せしめ專ら邊疆防備に怠りなかりしが兵種培養の「ムラウヵヨーフ」伯が經營完く空しからず遂に千八百五十八年五月露國は一兵卒だも殺すことなく刃に血ぬらずして殆んど百七十餘年間蒙りつゝありし恥辱を復讎し康熙皇帝が黑龍江畔より露人を逐はんと試みたるが如く清人を黑龍江畔より逐ひ拂へたり此れより「ネルチンスク」は單に胡索克の住地となりしが爾來沛然として四方より集り來りし韃靼人、猶太人、支那人「トングース」人、波蘭人は豫定市街地の此處彼處に群住し自然に一町をなすに至りたり就中猶太人最も多く移住して現今戶數一千以上人口六千以上に及べりと云へり市內

重なる建築物は町役所、地方裁判所、陸軍倉庫、胡索克騎兵聯隊、工兵大隊、屯營、寺院、男女高等小學校、町立病院、陸軍病院、町立倶樂部、公設藥店、「ブーチンスキ」「リーフ」一等商店等あり留まる事三日七月廿五日驛傳馬車に乘じて此處を發して西に向ふ驛傳馬車は概ね三頭牽にして乘客の好に應じて四頭を附する事あり一頭は一露里二哥なるも或ひは三哥乃至四哥を徵收する處ありされば十露里を旅行せんとするには一臺につき九十哥(日本の九十錢餘)を拂ふべきを要す驛傳馬車の構造は四輪車にして車臺の上には高さ四尺弱立方の箱あり三方は雨覆を施こし前面の一部は開け御者は其前方の椅子に憑り側面に昇降自在の踏段を設く乘客の蹲踞すべき箱の下部は單に板なるが故に乘客は羽毛の枕或は羽布團等を敷かざれば長途の旅行に堪へ難し國道所謂莫斯科街道は西比利亞鐵道の工事の始まりし以來は殆んど修繕を拋ち道路架橋は荒廢に委せるが爲めに凹凸甚しく車躰の動搖するが故に腦、胃、心臟、其他腹部の病を患ふるものは非常に危險を蒙る事あり驛傳馬車は官設にして馬と馭車は農家より徵發するを常とし(各馬車には猛獸の害を避けんが爲め二個の鈴を付せり)速力は樞を驅るに至りては宛ながら疾風の如く爽快言語に盡し難し

此日「カザノフスカヤ」屯田兵村に一泊し翌廿六日此處を發し因古塔河に沿ひ「アラズノヤル」兵村を過ぎ「アラズマホニンスカヤ」屯田兵村に着したり

廿九日午前五時十三名の仝行者と車を聯ねて「ガウキンスカヤ」屯田兵村を過ぎたりしが國道到る處架橋流失して前進する能はざるを以て山道を迂廻し此より高原低原を過ぎ一小河の渡船場を過ぐれば二露里にして「クニヤージ、ベレゴーワヤ」村に達したり地は因古塔河畔の屯田兵村にして戸數八十、人口二百五十有餘あり「ネルチンスク」を距ること百三十七露里「チター」府を距ること百三十露里の處にあり市街は縱列複道にして巷街正しからず、地味膏腹蔬菜よく成熟するも人民は怠惰安逸にして農耕を事とせず唯苅草及び牧畜を以て辛くも一年の生活を營むといふ、元來此地は舊來の穴居土民なる「ドングース」「タターリン」等の部落なりしが千八百五十年の頃「アラズマホニンスカヤ」「ガウキンスカヤ」等の諸村落と與に胡索克の移住せし以來は三四種族の住民は悉とく胡索克兵に編入せられたるものなるが故に勇將「エルマーク」名將「ハバローフ」巨傑「ムラウホヨーフ」伯等の蒔きたる種子と完く比較し得べきものにあらずされば寒月に鎧を敲ひて遠征歌を歌ふ勇壯なる胡索克が健脚無雙の鐵馬を叱咤して敵陣に突入し嫋然笑つて國に殉ふが如き決死愛國の精神は知らず住民の什中其一あるや要するに此地方の胡索克屯田兵は之を黑龍江畔烏蘇里河邊の胡索克に比し人情、習慣、風俗、嗜好、氣質等

の差は到底同一のものにあらざるべく彼の純粹なる胡索克の子孫が戰陣に臨み規律嚴正秩序また整然せるにも似ず此地方は元來穴居的雜駁なる人種の混合屯田兵村なるが故に次第に一種異樣の新胡索克を新生せしむるに至れり左れば其名は胡索克なれども彼「アルバジーン」「エグナシ」兵村管區の如き胡索克と同一のものにあらず寧ろ八農二兵の農兵有名無實の胡索克と稱するも適評を脫せざるべし

其三　第二回の遭難

因古塔河の增水せるは廿九日午後十時頃よりなりしが余が同宿者の目を竊み日誌を草し了らんとする時忽ち河畔上部の此處彼處に於て怪しき聲を聞きたり洪水！男女の叫喚狗吠の悽愴何となく只事にはあらざるべしと思ひしかども此時大風暴雨窓を開く事さへ出來難きを以て共同廣間に於て假寢の枕に就きぬ

元來驛傳なるものは其當初旅行者のために國道の各處大凡三十露里每に官設せしものなりしも東部西比利亞の漸々開發せられ殖民年を追ふて增加し自然に村落を形造くるに及び廿露里乃至三十露里間に一箇所の驛傳を設けて旅客の便に供したるものなりされども北部の「エニセイスク」縣「ヤクーツク」州の如きは驛傳間の距離非常に離隔して就中「ヤクーツク」州の北部の如きは兩驛傳の間五十露里乃至三百露里なる處あり

驛傳の構造は各村落共に殆んど同一にして屋前には標柱を設け前後の各驛傳に通ずる里程及び大都邑に至るの里程を記入するを常とす旅客驛傳に入れば驛傳の下婢僕は「サモワール」(沸茶器)を持ち來り喫茶を勸む白湯一回分は大抵五哥乃至二十哥を排ふを要す斯くて旅客は男女混合の共同廣間に集り各自隨意に喫茶飲食し起臥するを得る廣間には大小の別あるも家具は殆ど同一のものを用ゆ室の一方には食卓を設け粗造なる椅子を備ふ室內には寢床なく單に狹長なる椅子を壁又は窓に沿ふて橫ゆるのみなり床は殊んど土間に等しき汚穢物の散點したる板の間にして旅客は各自の携帶する旅行布團を布き所謂轉寢をなすなりされば斯の如き旅行に慣れざる旅客は終宵交睫する事さへ難き事にして加ふるに雨後の如きは汚穢なる泥靴のまゝに出入するが故に嘔吐を催すべき一種の惡臭すら加はり殆んど堪へ難きを忍び香水に臭氣を紛らし鼻を掩ふて辛くも脆き夢を結べば無數の床虫(南京虫と稱する毒虫にして形狀牛蝨に似て血液を吸收し毒液を肉中に殘留するが故に痛痒を感ずる事甚し螫されば胡桃大に赤く腫れ痛ゆれば粟大の創痕を留む之を潰ぶせば惡臭甚だ强し)に睡を破られ逐へば走り拂へば潛み寢息を窺ふて再三再四來襲するも日中は勿論夜半と雖も燈火明らかなる時は椅子食卓の薄暗き陰又たは木材の裂目に深く潛みて出づる事なし

されば日中は此毒蟲の害を蒙る事稀なるも夜中は十分だも丸き夢を結ぶと能はず爲めに余の如きは遠征以來殆んど毎夜は室内に安眠せる事なく大雨を除くの外は軒場にあらざれば庭前の積丸太の上或は家根上に寒き星光を數へつゝ濃き露に曝され或は豚小屋の二階物置部屋の隅に快眠を貪るは常の事なりしかも時には釣床の内に身を投げ入れて床虫の害を避け辛くも脆き夢を結びしことあり此夜は霖雨上りの事として床虫の襲來甚しく室内の空氣は濕潤して惡臭を放ち旅客の多きため一種の臭氣をさへ加へ安眠を得る事能はざりしが旅行疲れに軒聲雷の如き旅客の七八は前後算を亂して熟睡せるに反し屋外は電閃き雷轟き洪水は滔々として雌雷と和し雄雷と反應し時々耳朶を衝く叫喚の聲は凄ましく手にとる如く聞えて屢々眠を破られたりしも日中の疲勞に何時しか夢に入りぬ

「此處を出發せよ」と腦裡に響く呼び聲に驚かされ夢路を辿とり乍ら眼を開けば四邊は軒聲喧しく熟睡せる旅客の姿勢は宛も塑像の如く明滅せる孤燈の下に飛び叉ふ三四の羽虫を見るのみ怪みつゝ室内を見廻せども更に人影のなきより心竊に思ふやう「旅行の疲勞に神經疲れさては腑甲斐なき虚夢を見しものかな、されど心臓の皷動こそ不審なれ」と考へしは束の間にて何時しか夢は再び華胥の域にと迷ひ去りたり

「早く此處を立ち去られよ」との喚聲は再び耳底に起りたり現なから束ねたる牧草の枕を掻ひ遣り燈火を手にしつゝ起つて隣室を窺へば御者は朦朧たる睡眼を半は開き「何の用にや」と問ふたるを聞き流して假寢の床に返り牧草を均らして布團を作り怪訝の空想を畫きながら身を横へたるまゝ再び夢路に入りたり

「早く出發せよ如何なれば出發せぬぞ」との呼聲雷の如きに驚き躍り上るが如くに飛び起きたり此時心臓の皷動は益々高まり冷汗は流るゝが如くに背を傳つて意氣何んとなく蕭索に感じたりしが四邊を見廻せども目覺めし旅客なく燈火の光り縷の如く燐火の燃ゆるに似て青白く快眠を貪ぼる旅客の容貌は蒼白にして死人の如し因古塔河には洪水の音嘗々として流木の打合ふ聲悽ましく豚狗の叫喚は丸木の壁を通じて悲慘の狀手に取る如く聞えたり此時余は心竊かに思ふやう「如何に身躰疲勞のためなれはとて虚夢を繰り返すこと三回なりしこそ奇怪なれ遠征以來身を探檢の犧牲に供し運命を賊志一貫に歸して自ら運命の人と信じつゝありしもさりとて古老の實驗を無視し死地に死を待つの愚を學ぶべきにあらず寸善尺魔とは正さに此の如き時を言ふならん風雨の歇みたるこそ逸し難き好期なりいざ之れより駟馬に鞭ち前進するの方針を取らむと心機一轉立とところに出發の事に決して隣室の御者を喚び起せば訛聲高

く呻るが如く「深夜何の用かある用あらば明朝にせられよ水を欲せば室隅にあり燧火ならば此處にあり」と投ぐるが如くに余に與へたり

此時余は言辭をつくして出發の準備を逼りしに彼は聊爾だも心頭に留めざりけむ間もなく鼾聲は毛枕の底に雌雷の如く聽えたりされど猶豫すべきにあらざれば彼を搖り起し彼が首肯せざるを或は賺かし或は撫め或は慰めなどして通常貨銀の三倍を拂ふ事に契約し此處を出發せしは宛も午前二時近き頃にして天猶ほ暗く朦雲慘憺時には驟雨を拋つて軟らかき若葉を挫くことさへありき

村端より西に入りしが十露里許りを前進せる頃ほひ天漸く明けたり此れより河畔に沿ひ車輪を沒する許りの洪溢中の道を拾ひつゝ辛ふじて露里を進みし時水層益々加はり澎湃たる水勢は激烈にして木を拔き石を穿ち滔々たる濁浪の勢ひまた凄まじく家屋の組まれたる儘に流失するあり半壞の納屋と與もに浮沈しつゝ流るゝ家畜あり牧草に火のつきたるまゝ流るゝもあり流勢時にその線路を變すれば濁流の折衝する處草を掘り木を拔くの勢あり高原を除くの外は野となく谷となく村落となく一面に汎濫の害を受けざるはなかりしが激烈なる濁流は渦線狀をなし水相搏ちて黑き泡沫を飛ばし水渦の爲めに流木は或は斜に或は直立する等の奇狀を現はし屢々國道を遮斷する事あるより危險名狀すべからず機一髮を誤まれば人馬共に濁流に捲かれ流木に粉碎せらるゝの危險あるを以て余は御者に急駛を命じ御者は駟馬を叱咤して前進を急きしかども水嵩は車輪を沒して進退自由ならず加ふるに車輪は時々岩石に衝突して進行を妨けられ爲に露里許の水中を辛ふじて彼れ此れ一時間餘に跋涉せしが「クヽイ」と稱する低原に出で漸く蘇生の心地なしたり此より露里許にして國道は浸水し橋梁は破壞し交通完く遮斷せられたるを以て山道に入る七八露里高原盡きて四露里を進めば廳て「カピダローヲ」村にと着したり

「カピダローヲ」は因古塔河畔に横はれる胡索克屯田兵村にして戸數百四十九人口八百四十九あり地勢後に高丘を負ひ左右に平原を控へ前面には因古塔河を隔てゝ分村「ザレカ」と對せる縱列單道の兵村にして此當時は郵便電信支局、小學校、村役場、驛傳、寺院、七商店、一酒舗ありしが今は舊時と同一の談にあらざるべきも「チター」「チルチンスク」間の大兵村として人家の構造市街の清潔また他に比し頗る優等に位し土人雜居の兵村とは風俗の大に異なるを認めたり住民は千八百四十年の頃移住したる胡索克兵にして農耕の傍ら牧畜を營めり

着後驛傳の書記に向かひ「斯の如き海嘯類似の洪水は屢々ありしや」と問へば老ひたる

胡索克は額を撫てゝ言ふ「否な四十年以來始めて見聞せる處なり增水の速やかにして且つ流勢の猛烈なりしは天神怒り河伯荒れしに因らずんばあらず岩を穿ち石を削り木を拔き家屋を拂ひたる勢の悽きと此れまた譬ふるにものなく隣村「クニヤージ、ベレゴーワヤ」村の如きは流亡家屋十餘戸人畜の死傷は不明なれども蓋し三四十を下らざるべし」と酸鼻しつゝ語るを聞き「驛傳は如何」にと問ふたるに老兵は嗟嘆して曰ふやう「さればなり七名の旅客二十一頭の馬五名の家族は今朝三時頃にやあらん家諸共に濁流に攫はれ其他の被害家屋と共に流失したりしが旅客の一名は萬死を免れ下流の「ミーテルファン」近傍に於て漂着なしたりとの飛電ありたり族行者は何れの驛傳より來られしぞ道中は痛く水害に惱まされしならん」と之を聽きたる余は絶倒せん許に驚き去宵の虛夢の眞なりしを回想しつゝも余にして一時間出發を見合せなば七名の旅客と共に因古塔河底の鱘魚に身を委したらんものにと思はず戰慄して肌に粟を生じたりしを知らざる爲ねして老兵を慰め一杯の紅茶に渴を醫したるまゝ公共廣間の一隅に前後もしらず夢路に入りたり

地は東清鐵道の分岐點にして「チター」府を距る百〇六露里「ストレチエンスク」を距る二百五十二露里露清の國境に至る三百二十四露里四分の一の處にあり

東清鐵道事務支局は此地に設けられ西比利亞鐵道貝加爾線の重なる停車場として數へらるゝのみならず今や世界の地圖に指點せられて操觚者の筆頭に上るに至りたり

其四　東清一名滿州鐵道

千八百九十六年八月廿七日露清の協商成立し締結せられたる數多き條件中滿洲通過鐵道布設の豫定せらるゝや該當官吏の語るを聞くに「東清鐵道は西比利亞大原野の殖民露清商業の發達、海運陸輸の接續を第一とし北清地方未發の鑛坑を開發し未墾の原野を開拓するの利器にして間もなく黃山の風は吹き黃金の水は流れ黃金の地は鋤かれ耕さるゝに至らん」と主計官は「東清鐵道經過線四近の炭礦及び金礦の收入豫算額は少なくも五十年を出てずして擔保償金の全額に超過するを得べし」と少壯士官は「二百五十年間清國政府より受けたる莫斯科政府の恥辱は將來東清鐵道に因りて復讎を遂ぐるを得べし我等胡索克は勇將「エルマーク」が烏拉爾を踏破して涸比河畔を席捲せるが如く東清鐵道を利用して滿洲及び沙漠以南に清人を逐ふべきを要す」と宗教家は「天使によつて送られたる「スラブ」の風は惡魔に等しき「フンフーザ」種族を宗化して此處に宗教の燒點を築かん」と右の如く東清鐵道の將來に對する露國朝野の希望は熱心と眞摯なる意向に因りて表彰せられたり確かなる表彰は事實を意味す遡つて故帝「アレキ

サンドル三世の遺訓として流布しつゝある「露國は西比利亞鐵道を利用して支那及び朝鮮を壓し日本を將來東洋の一孤島たらしめよ」との方針と希望とに對照し來れば露國の宿望は豈にそれ之を雲烟過眼に附し去るを得んや

滿州鐵道布設の當時露國要路の該當官吏は吾人の間に遠慮なくも左の如く解答を與へたり「自國の國庫を空乏にして償金擔保の國交を全ふし劍戟の中に國を投じて清國を萬死の中より救ひ出したるは固より國交上の好意を完ふせしに外ならざるを以て露國は清國に對し一片の報酬だも求むる事を好まざるなり」とされど露國が清國に向つて東清鐵道布設申請の口實とする所によれば「露國は隣境の友誼を以て清國を瀕死の中より救ひ出したり國家を睹し國庫を空乏にして清國を泰山の安きに置きたれば此等の恩義に報ゆるには清國固より期する所なかるべからずされど清國刻下の形勢は日清役に於ける傷痍未だ癒えず殆んど困憊疲弊の塲裡に呻吟しつゝあるなり之を救濟して國運を挽回せんとするには盛んに土木を起して交通運輸の便を謀るに若くものなし清國の日本に敗れたる畢竟するに海運陸輸の完からざるに因らずんばあらず今や清國のために之を謀り露國のために之を謀るに東清鐵道を起工して露清兩國間の國交を暖め將來に於ける露清仝盟の基礎を立つるを要す」と而して「鐵道を布設せんには莫大の資金を要す現今の清國は國庫殆んど空乏なり到底滿州鐵道布設の力に堪ふる能はざるべし此故に露國は條件付を以て國庫より資金を醵出するにあらざれば露清銀行投資して之れが布設費を負擔すべし」と此れ東清鐵道布設の口實なりしなり

然り露國の口實は遂行を意味し申請は占領に解釋せらる露國が千八百九十六年十二月四日に於て批準を得たる其前後より滿州はまた清國の有にあらざりしは明瞭なる事實にして清國が償金の擔保として滿州鐵道布設を承認したるは繩を敵手に委して己れを縛せよとの默許なりしなり滿州を三分して滿州を緊束するが如き東清鐵道は清國をして滿州の自滅を招かしめたるなり滿州の主權は千八百九十六年八月廿七日露清の協商成立の當時に於て已に清國の手を離れて露國の掌中に入りしなりされば刻下の滿州問題の重なる要件として列國の聳目せる撤兵勸告の如きは到底露國が滿州に既得の實權を失はしむる事能はざるは勿論斯くの如き勸告は結局無効の勸告として終るべきは從來露國が蠶食的政策の歴史に徴するも明瞭なる事實として知り得べきなり露國が邊疆を宗化し同化するに一種の魔力を有する事實は世已に定論あるも魔力を活用して剛を挫き柔を服する手段の信玄的戦略にある事を知るもの稀なる

は嘆ずべき事にあらずや左れば滿州鐵道布設と云ひ西比利亞鐵道布設と云ひ單に商業上軍略上より打算したるものにはあらずして鐵道通過四近の富源を開發し交通を圓滑ならしめ以て百年の大計を立つるの深遠なる政策に外ならざるなり

何となれば露國が東方政策の重なる東行の第一着手としては「フラクリン」氏が紙鳶を飛ばして空中より電氣を導きしが如く事實の證明は露京より九千九百八十四露里を隔てたる絶東の浦潮斯德港を軍港として露國の人心を此處に燒注せしめしにあらずや南下の第二着手としては旅順口大連灣に一億二千萬の視點を此處に向はしめしにあらずや要するに露國が一地方を蠶食せんとするや決して邊疆より漸次に目的地に達せんとするものにあらず宛かも測量者が隔りたる箇處に目標をたてゝ四近を測量するが如く其當初には先づ遠隔の距離に於て重要なる要勝點を定め然る後彼我の連絡を結び付くるに勉むるの方針を取るは常にして畢竟するに彼我の連絡を完結しなば其中間は不知不識の間に於て占領の實權を攫取し得るを知ればなり假りに百哩間に鐵道を布設するとせんか起點より終極點に至るまて少なくも十個處の停車場なかるべからずされば各停車場には一區域を保管すべき或は鐵道事務を擔任する官吏なかるべからず修繕工夫なかるべからず此等を保護する屯田兵的の衛戍兵なかるべからず日用貨物を供給する商人日用飲食物を供給する農民なかるべからず自然に部落をなすに至らば寺院學校村役場病院郵便電信局なかるべからず愈々戸口の增加するに至らば警察署裁判所等なかるべからず次第に增殖して終に町市の一區劃を形造るに至るべきは殖民地の常態にして單に停車場のみにあらず鐵道四近の地は鋤かれ耕され或は鑛物發見せられ工業起り殖民の道は年を逐ふて繁榮に趨き人口また增殖すべきは數の然らしむる所にして其當初百哩間殆んど無人の地なりしもの三十年五十年の後には各停車場を中心として之れが四周は宛も連砦の如き觀を呈しなん事態此に至つては最早少數の兵力を以てするも容易に之れを動かすべきにあらずされば露國が滿州鐵道布設の目的を達するに殆んど一國の運命を賭する迄に眞摯熱心なるは抑も鐵道附近を露化せしめ殖民の基礎を定めて確固不拔の金城湯池を作らんが爲めなるは明瞭なる事實として有識者の首肯する所なるべし

千八百七十一年に於て露國南下政策の重なるものとして滿州通過浦潮斯德に達せんとする鐵道布設の豫定を清國に申込みし之れが設計案は其當時脆くも北京政府のために排斥せられ已むなくも露國をして二十餘年の後に於て漸く黑龍江に向ふべき鐵道を延長するの餘儀なきに至らしめたりしが時の到るまて能く忍耐し機の熟するを

待つて之れを捉ふる露國が唯一の外交政略は不圖も千八百九十五年日清戰爭が齎らし來りたる機會に投じ容易くも十五年間の宿望を完ふする事を得て所謂露國が南下政策の一として蠶食政略の基礎は其協商成立の當時に於て精算已に成りしなり全滿州を三分せるが如き東清鐵道は此時已に露國のために滿州を緊束するの金剛繩とはなりしなり此協商に因りて露國は多年布設の困難に苦心せる黑龍江畔の西比利亞線乃ち黑龍線の敷設を中止し之れに代ふるに滿州通過線を以てしたる後布設延長線路に於て五百十四露里を短縮し工事費に於て二千萬留以上を節減し時間に於て一晝夜以上を短少せしめたるのみなず軍事上商略上經濟上に於て獲收したる鴻益は世人の豫想外に出て此鐵道布設の目的が決して軍事上商略上のみにあらざるの事實乃ち露國が特得の蠶食的殖民政略に基けるを北清事件後に證明し第二期撤兵後に事實を確めたり

東清鐵道一名滿州鐵道は其名の如く西比利亞鐵道より分岐して滿州を經過し南烏蘇里線の「ニコリスク」に通ずるものと及び遼東半島に達するものとを名つけしものなり而して通稱滿洲鐵道は殆んど一部の延長線に止まるものなるも東清鐵道に至りては吉林省より延びて遼東省に達するものゝ總稱なりとす東清鐵道布設豫定の全延長線は二千四百二十露里にして之れを內譯すれば後貝加爾州南烏蘇里管區は合して四百九十五露里內後貝加爾州三百二十四露里四分の一東西露清國境の兩起點九百四十九露里及び「ハルビン」より旅順に達すべき延長線計九百八十露里なりとす、

千八百九十六年十二月四日に於て批準を得たる當時翌九十七年八月十六日以前に起工すべきの議定まるや遞信技師「ケルベーズ」氏を始めとして本支の局長に或は顧問取締等に任用せられたるもの「ボコチロフ」氏「ロマノフ」氏「ロトシテーン」氏「ヨフトムスキ」親王技師「アレキセーフ」氏「カワンコ」氏等なりしが鐵道線路檢測の主任者は歐露の「レザーン」「ウラル」間鐵道の技師として有名なる「ユーゴウエッチ」氏之れに任せられ「イグナツオウオ」氏は次長に任命せられたり而して千八百九十七年四月の始めに當り第一回の檢測探檢隊は聖彼得堡府より派遣せられ浦潮港より滿洲方面に向かひたる檢測の一隊は總數三十二名にして此年八月十六日吉林統署に於て鐵道工事着手の公布は標示せられ烏蘇里方面近き「ボウタウスキ」屯田兵村近傍より起工に着せられたりしが工事の進捗著しく千八百九十九年一月一日には已に開通せられたり

千八百九十八年三月十五日北京に於て同年四月十五日露都に於て露清間に締結せられたる旅順口大連灣の二十五年間租借條欵の調印せられたると同時に滿洲鐵道より

分岐して遼東半島に向ふべき吉林線の基點は松花江畔の「ハルビン」と定められ此れより吉林盛京を經て遼東に向ふ線路の檢測は直ちに實施せられたり

東清鐵道は三大區に大別せられ「カヒダローヲ」「ハルビン」間を西部滿洲鐵道とし技師「ボチヤローフ」氏之れを管理し「ハルビン」「ニコリスク」間を東部滿洲鐵道とし技師「スウエーギヤン」氏之れを管理し「ハルビン」より旅順口に達するを南部滿洲鐵道とし技師「キルシマン」氏之れを管理し其東清鐵道に關する事務局にして露國にありては本局を聖彼得堡に設け清國にありては北京に支局を設く而して滿洲及び西比利亞にありては「ハルビン」に本局を置き「カヒダローヲ」及び浦潮斯德に於て支局を設け經理機器局は「ハルビン」に設けられたり西比利亞鐵道より分岐して滿洲に入るべき線路は「チター」府の以東「カヒダローヲ」兵村にして此れより後貝加爾州を經過して露清の疆界に達し「ダライ、ホール」湖近き「ナガタン」村に於て滿洲に入り此れより「ハヒラル」(住民三〇〇〇)町より以東殆んど三百露里間は全延長線路中工事の最も困難なる處として八千尺以上の隧道を要する大興安嶺の高原を横斷し線路は再び「ホンニ」河の凹谷に沿ふて「チヽカル」城(住民七〇〇〇〇)の以北十五露里の處に於て「ホンニ」河を渡り益東して「フーラン」城(住民七〇〇〇)を距る三十露里の處に露國の新殖民地「ハルビン」(住民三〇〇〇)村に於て松花江を渡り此れより東部滿州鐵道となり「アジエヘ」(住民四〇〇〇〇)方面に走り松花江より東南に向ふ線路は支流「ムーダン、チャン」河を横きり數多き峻嶺高嶽を迂回し寧古塔を經由して露清の疆界線に達し此れより南烏蘇里の「ニコリスク」に達するものとす

南部滿州線は「ハルビン」より南に向ひ「クワンチエンツエー」「チヤントフ」奉天府(住民二〇〇〇〇)「エンコウ」(住民七〇〇〇〇)を經て旅順口に向ひ此れよりはまた分派して大連灣に達するものとす

千九百二年の公報に因れば東清鐵道に使用せらるゝ技師機關士の總數は二百五十名以上にして此他二十四名の醫師と七十五名の調劑師は醫士「ボンテ」氏總管の下に屬し勞働の概數を擧ぐれば支那人のみにても現に十萬以上に及び「ハルビン」近傍には露人一萬以上は鐵道工事に從事し此他第一期撤回兵の武裝を解きたるもの及び豫備後備兵の鐵道工夫となれるものとを合すれば無慮十萬以上もあるべしと云へり、右東清鐵道中「ハルビン」より旅順口に達すべき線路は現今悉皆完成し「ニコリスク」「ハルビン」間の線路もまた竣成し「カヒダローヲ」より滿州「ハヒラル」に達する北部線もまた千九百年に竣成し目下唯興安嶺八千尺の大隧道を除き殆んど定期交通を實行しつゝあるを見れば東清鐵道全部の完成は期年ならずして遂行せらるゝに至らん

公然に發表せられたる如く往年即ち千八百九十六年八月廿七日に於て締結せられたる露清の條約中滿州鐵道布設に關する幾多の條件は露國が南下の宿望を完ふするに得難き機會を與へたるものにして西蒙古方面に於けるが如き黑龍江方面に於けるが如き所謂「血を見ずして占領し戰はずして屈する」てふ語を繰り返したるものなりしが露國は協商成立の當時より已に此鐵道が將來滿州を緊束するの金剛繩たるべき事を覺悟したりしに間もなく北清の紛擾は露國が豫期せる野心を遂行するの時期を短縮せしむるに至りしなり今や滿州は腐蝕したる齒牙の如く之れを拔くにあらざれば神經を燒きて腐蝕を防遏せざるべからざるが如く到底之れを原形に回復する能はざるなり遡つて露清協商成立の條件として千八百九十六年十二月十六日に於て發表せられたる重なる要件を擧くれば定款は凡て三十條より成立せるものなるを記臆せざる可からず

會社を東清鐵道株式會社と名け資本を五百萬留と定め一株五千留の株券一千株と定む

株主は露國人又は清國人に限る

特許期限は全延長線開通後八十ヶ年となす（一說には九十九ヶ年とあり）

全延長線敷設せられ運轉開通後三十六ヶ年を經過したる後東清鐵道に消費したる萬般の經費及び負債額と之れより生じたる利子等を合算したる金額を拂ふ時は北京政府は之れを買上ぐるの權利を有す而して會社は清國政府より支拂ひたる買上額中より社債及び利子を償還して其殘額を株主間に配當するものとす

會社は必要に應じ社債を發行する事を得社債發行の場合には露國大藏大臣の認可を得を要す

露國政府は利子の支拂と社債の償還とを擔保す

露國政府は會社の工事中及び營業期間ともに會社の事業を監督する權利を有す

露國大藏大臣は副會長技師長營業部長其の他の部長及び技師の任命を認可する權限を有す

會社を監督するために北京、聖彼得堡の二ヶ所に管理委員會を置く

管理委員會は會長一人委員九人を置く副會長は委員中より選任す

會長は清國政府之を選任し委員は株主總會の選任に依る

會長の職務は會社が清國政府に對する約束を嚴守するや否やを監督するにあり

副會長は社務の進捗を監督するを以て職務とす

露國政府は會社の工事中及び營業期間ともに會社の事業を監督する權利を有す

線路選定及び工事設計等に關しては總て露國大藏大臣の認可を受くるを要す

工事は千八百九十七年八月廿八日を以て着手すべく而して管理委員會の組織完く成り必要の用地を會社に引き渡されたる後六ヶ年を經て線路は竣成すべきものとす

此他建築法及び規則の如き、機關車、貨車、客車の構造、進行力搭載力、一列車の接續臺數乘客、運輸貨物の稅率、電線、電話等の架設、郵便物運送の無賃の如き入市稅免除の如き此他にも鐵道線路の左右の借地權鑛山採掘權等に至りては密約中の密約として公然に發表せられざるものまた尠なからざると云へば露清の密約中に伏在する秘密の重荷は年一年月一月に滿洲の頭上に落ち懸り幾星霜の後には事實上に發表して確かなる表彰は事實を意味するに至らむされば露人が烏拉爾以東の地を指して「ゾロトイズニ」と總稱せしは其意西比利亞と名けられたる露領のみにあらずして滿洲蒙古をも包括し數星霜の後に於て世界の地圖を變色するに至らむ歟余は之れなきを希ふものなり

八月三日此地を發して「チター」方面に向ふ「カヒロダロー」を距る二十四露里の「バルシーナ」屯田兵村に至れば蒼蒼たる二百年以上の老松の森林を此處彼處に認めたりしが老幹嵯峨として青苔滑かに古色蒼然として宛かも東海道旅行の感ありき點燈の頃ほひ「トリーノ、ボウオロトナヤ」屯田兵村に着し驛傳を訪へば旅客中には橋梁流失道路梗塞の爲め此處に滯在する十日以上に及べるものすらありたり

該屯田兵村もまた被害地の一として汎濫當時の慘憺たる紀念を因古塔河畔に遺せり

根拔きのまゝにせられたる老松は河畔近く砂中に半身を現はして蛟龍の上天せんとするものゝ如く河畔より十二間餘を蠶食せられたる江畔は新たに不規則なる奇怪の懸崖を形造り井形に組まれたる堅牢の家屋は礎を穿たれ半は泥中に埋沒して小なる「ピラミット」形をなし或は屋根を剝かれ窓を拔かれたる天爲的刑餘の破屋は倉庫を合して七戸と數へられ流亡して有形の紀念を留めざる悲慘の家屋は五戸と數へられたり然れども人畜の死傷は割合に僅少にして二名の流失者に五名の重傷者を加へ七頭の犢牛に若干の馬豚を流亡せしめたるのみ水害後國道梗塞せるため物價暴騰して卵一個七哥黑麵麭一斤十五哥牛乳一瓶二十五哥砂糖一斤六十五哥米一斤六十哥牛肉一斤三十五哥の價格を現はしたりと云へり

八月五日午後八時「ウースト、グルバウカヤ」村に着したり

此處は因古塔河畔の寒村にして西南北の三面は峨々たる斷崖を以て圍繞せられ東は

開けて因古塔河に面し戸數四あり驛傳に就けば十五名の旅客七臺の馬車二十一頭の馬は洪水の爲めに進退を失して滯留已に一週間に及び今や人馬共に食盡き隔日本村「アタマン」に食料を仰きつゝありと此夜清寒頻りに至り床虫の襲擊烈しく快眠しばしば破れ夢を就す能はざるより起つて廊下に出づれば陰曆七月十九日の殘月は猶ほ皎々として岩頭の老松に懸り四顧沈々として萬籟聲なく滔々として流るゝ因古塔江上には幾點の燐火を放ち江畔に打ち上げられたる破屋の陰には怨を江底に遺したる魂魄の彷ふが如きを見る心地して再び臥床に入り翌朝起き出て見れば清寒に夢を結び難きも無理ならぬことなりし天已に霜を降せしなり地は已に深秋の霜牙を起せしなり曉風刺あるが如く寒氣また骨あるに似たり試みに寒暖計を檢すれば攝氏二度を示せり

六日午前六時「チター」府に向つて發す西南に進む十二露里の間は凡て山道にして古松の密林蓊蔚として壹猶ほ暗き觀あり「アタマン」村を過ぎ山道に入り四露里餘にして斷崖に沿ふの處國道は洪水のために完く拂はれて影なく數露里の鐵道線路は悉く掃蕩せられて宛も地均しせられたる耕園の如く之れが損害高は十萬留以上なるべしと云へり此れより山道に入る十露里餘高原の盡くる處は「チター」府にして暮山漸く紫色に變ずるの時「チター」府に達したり

後貝加爾州の二

其一　「チター」府

「チター」府は北緯五十二度二分(露)東經百三十一度十分に位し後貝加爾州の殆んど中央點に位せる首府なり地勢東北は高原を負ひ東南は因古塔河を隔てゝ傾斜銳き山脈を控ひ西南には西より走れる「チター」河に因りて市街の擴張を遮斷せられ西北の一面は四谷にして國道は此れより「イルクーツク」方面に向ふ國道乃ち莫斯科街道に因る時は「イルクーツク」府を距る水(バヒカル湖)陸七百三十露里露都「ペテルブルグ」府に達するには猶六千五百露里あり市街は南北四露里强東西三露里弱に擴張し六大街十六小徑は井字形或は丁字形に全市を區劃せり戸數千四百十二人口一萬千四百八十(內男六八七七)女四六〇三あり(千九百年の調査に依る)地は千八百二十七年の頃より流刑人を移殖せしめたるに始まり千八百五十一年後貝加爾州の中央政廳として定められしより猶

太人「ブリヤード」人韃靼人は漸次に此地に集まり現今は後貝加爾州廳の所在地として貝加爾胡索克の淵叢地として其名著し地に後貝加爾州廳、警察署、收稅局市役所、區裁判所、郵便電信局、電話交換所、後貝加爾州陸軍參謀部、及び長官管理局、監督部、砲兵倉庫、砲兵半工廠、軍醫局、胡索克、兵理財管理局、「チター」豫備大隊、地方守備大隊、胡索克第一聯隊、「チルチンスク」胡索克第一聯隊、後貝加爾第二砲隊諸病院、孤兒院、赤十字社支部、諸學校、諸銀行及び支店、國庫金取扱所、火災、土木會社出張店、鐵道廳出張所諸倶樂部、九寺院、精粉所、釀造所、戲木場、公設驛傳、二新聞社、四五の旅館等あり

右の中重なる建築物は大抵大町「アムールスカヤ」町「アルグン」町「シユキンスカヤ」町の數町に散在し就中「アムールスカヤ」町は最も殷盛にして大厦高樓軒を並べて旅客の目を惹けり商業は頗る發達して現今の取引高は三百萬留を下らず日本品の如きも漆器七寶燒、絹類、其他雜貨品は大賈小沾の店頭に見さるはなく團扇の如きは殆んど各戸に之れを見るを得べし

工業は織物、製粉、製革、釀造等なるも概して盛ならず畢竟此地に於ける勞働賃銀の貴きより收支の償はさるがためなるべし

八月十二日天氣清朗降霜深く霜牙高し試みに庭園を踏めば靴痕點印雪を踏むに異ならず止水の全面流水の兩側また薄氷を結べり余は此日を以て一千露里許の徒步旅行を試みんと欲し單身双靴「イルクーツク」に向つて此地を發したり

熙々たる朝暾に送られ颯々たる西風を迎かひ「チター」河の架橋を渡れば此れより高丘の半腹に沿ふて國道は北に向ふ露里許にして平原に出づれば前方は曠漠たる低原にして樹木なき高原は遙かに西より北に走りて宛も千里長堤の如き觀あり此より高原を左に過ぐれば右方「キノーン」湖水の西岸に數百頭の羊あり白黑相混交せるの遠景宛ながら碁石を投げ散らせるが如し

三露里にして左方に胡索克屯田兵村を見る此地方の高原は樹木なき芝生のみにして眼界の及ぶ所二十餘露里高低淺く殆んど蒼海に波の起れるが如し「チヤウルノフスカヤ」村を過ぎ北すると十餘露里は坦平宛かも磨ける砥の如きも排水の道なき爲め各處に小湖沼を生じ沼邊には「ブリヤード」人の天幕各處に散在するを認むるのみなりき

其二　第三回の遭難

余が「チター」府の旅館にあるや隣室に一名の旅人あり薄暮よりは常に自用の旅行馬車に乘して去り早曉客舍に歸り日中は室内に籠りて何事をか考ふるものゝ如く屢々余が許にと訪ひ來りしかども容貌の「セメンスキ」らしく言語習慣舉動の何となく猶太人

に似たるを確かめたりし以來は勉めて彼との談話を避けつゝありしが宛かも出發の先夜彼れ何處にか行きたりけん影なく音なかりき余が「チャウルノフスカヤ」村の西北十餘露里を進みし頃は宛かも日脚已に短かくして双靴また重く身躰疲れ且つ飢え渴したりされど前村「ドーマノ、グリユチエフスカヤ」村に達するには猶ほ行路六露里を餘せるも最早重き荷物を擔つて徒行し難きを以て行李を投げ卸し石を疊みて竈を作り「パケッ」を据ゑ枯草を掻き集めなどする中轆轤として遙かの後より旅行馬車の風を追ふて驅け來たりたるを見るより余は心竊かに思ふやう「何處の旅行者にやあらん今や時已に遲くして旅行者の旅行すべき時は既に過き去りたりしに單身馬車を驅りて無人の曠野を旅行するは定めて深き仔細の存するならん」と瞳を定めて漸く近つく車上の人を見れば此れなん余が「チタ」府客舍にあるの日彼れの擧動が余を疑團の中に迷はせし「セメンスキー」なるが故に折こそ惡けれと故らに知らざる爲ねして竈に火を點せんとする折りしも彼れは呼聲高く馬を止め躍るが如くに車を飛び下り余が身邊近く寄り添ひたり

苔つきたる革製の鞭を右手にし半白なる、顋鬚を撫でつゝ聲低く言ふやう「親愛なる日本の旅客よ余は今朝君が冒險的徒步旅行を企つて「イルクーツク」方面に向かひたる事を聞き單獨徒步旅行の危險にして到底不可能なりとの忠告をなさんが爲めに君の後を追ひしなり近來貝加爾湖西より湖東黑龍江に至るの間には强賊窃盗隱見出沒して旅人を惱ますこと頗る多きと聞く地の利に暗らき他鄕の征客は殊に其心して旅行せざれば不虞の災害測り知る可からず今や時已に遲く前村に達する猶六露里を餘せり疲せたる馬なれとも骨には鐵あり蹄には骨あり一鞭を加へなば前村に達する一時間を超えざるべしいざ同乘せられよ」と勸むるを聞き流かし手早く燧火もて竈下の枯草に火を點しつゝ答ふるやう「友誼深き君の厚意を辭するは同情の義に背くには似たれども余は一千露里の徒步旅行を試みん事に決したり疲れたれども双脚には鐵骨あり飢えたれども之を凌ぐの肉あり時後れなば幕天席地露宿するの決心あり窃盗來らば劍をもて之れを禦なしなん强賊到らば彈丸もて之れを啗はしめなん鄕國を云つて已に數歲深く釁烟瘴霧の地に餘命を完ふする事を得るはこれみな定りたる天命ならむ左れば身は劍戟の中にあるも恐るべき事にあらず萬死の中にあるも憂ふべき事にあらず況んや開けたる空に所ゆる星光を數へつゝ廣濶なる原頭に快眠を貪ぼる快事之れに若くものなからむ君が厚意を無にするに似たれども余は暫時此處に脚を伸ばし肩を緩るめ然る後星光を戴き霜露を踏んで前村に向はん時後れなば君に益あらざる

べしいざ拉けて此處を先發し玉へ」と幾度か同乘する事を斷はりしかども彼れ容易に先發すべき模樣なく言辭を盡して勸むるの煩はしさに堪へ難く意を決して同乘したるまゝ前村へと急ぎぬ

行程四五露里馬脚重く鐵蹄遲く日沒後遙に晩霞模糊の間に「ブリャード」人の天幕を認む見渡せば前後左右は漠々たる高原にして眼界涯りなく暮山の風光遠きものは已に黑く近きものは漸くに紫に牛羊の鳴く聲また長く響くの時とはなりぬ余等が馬宿に達せしは宛も午後八時半にして最早物色を辨ずる能はざる頃なりき此處は「ドーマノ、クリユチエフスカヤ」と名くる山間の寒村にして戶數四十許住民の重なるは「イルクーツク」管區より來住したる流刑人と及び「ブリャード」人の混住にして農耕に從事するもの少なく牧畜は住民の專業とする處なりと云へり馬宿は露語「ジモアイ」と稱し荷馬車、旅行馬車等にて旅行するものを宿泊せしめ通常村落より三四町乃至數露里隔離したる處に設置せらる余等の宿泊せる馬宿は峽谷の開けたる原頭本村を距る六町許の處にあり丸木を積みて建築したる家屋の數棟は丁字形に配置せられ客舍、廐、物置等は本舍を擁し「ジモアイ」としては結構頗る完備せり主人は白髮白髯の老翁にして余等の着せるや老人は語豐なかに言ふやう「貴客等は實に幸福の人々なり昨宵までは日々數十の商隊宿泊して其混雜は尋常にあらざりしが今朝は一馬を留めず片車を殘さず悉く出發して廣間は大風の跡の如く殊に寂寥を極めつゝあるなり孫娘が半日を費やして清掃せる廣間には丹精して磨き上げたる「サモワール」は備へ付けられつゝあるなり老の脊汗を流して今月初日に苅り集めたる牧草は廣間に隙間なく播布せられつゝあるなり老後の樂みにとて一時間前に搾取せる牛乳あり嫁入の支度にと孫娘か手飼の鷄の生みし新鮮の鷄卵あり黑麵麭を欲しなば進ずべし「ウォーツカ」を好まば一ト走りすべしいざ此方へ」と慇懃なる老人の案內に連れて余等は客舍に入り旅裝を解き備付けの長椅子にと憑りかゝりぬ

長途の徒步旅行に殊の外疲勞を感じ肩張り脚痛み發汗のため身體處々に痒きを感ぜるを以て屋後の谿流に就き冷水浴をなして室內に歸れば「サモワール」の水は已に沸騰し茶器は整頓し紅茶は已にコップに注がれありたり余が室內に入るを見るより「セメンスキー」は椅子を離れ丁寧に「日本の旅行者よ冒險的徒步旅行の困難は如何に感ぜられしぞ驛傳間の長距離に道路の險惡は到底貴國の比にあらざるべく君が天命に身を犧牲として世界漫遊を企つる誠に勇壯無比と謂つべしされど徒步旅行に馴れざる君にして遠征の初途斯の如き長途を旅行せらるゝには定めし痛く疲勞を感ぜられしな

らん芳味高からされども余が携帶の紅茶は注いで「コップ」にあり抵げて一杯を用ひ渴を凌がるべし」と彼れが容貌の餘りに沈着き拂つたる樣子に疑團を拋ち「セメンスキー」に會釋して椅子に憑り渴に促がされたるまゝ殆んど「コップ」の過半を飲み盡したり

余が顏を竊み見つゝありし「セメンスキー」は何事をか回想せしものゝ如く「余は馬車の解裝を忘れたり此れより馬に飲かひ野に放ち車に油さし敗物をとり運ぶべし旅行者は隨意に喫茶せられよ旅行囊の內には砂糖あり麵麭あり燻肉あり貴意に適せば用ひらるべし」と言葉忙はしく立ち去ちたり

「セメンスキー」の立ち去りたる後は飢と渴とに驅られ彼れが投藥の術中に陷ゐりたるを知る由もなく二杯を飲み續けたり沿道の地勢は如何に牧畜耕耘の模樣は如何にと手帳を取り出し鉛筆を削り居りしが怪しむべし左小指の頭より蟲の匂ふが如くに顫動を起して次第に上部にと進みし感じあるより瞳を定めて之れを見詰め居りしも別に異狀なかりしが顫動は小指と第四指との間に止まるが如く少しく痛痒を覺えて第四指及び中指の根より同時に顫動を起し漸次に指頭に向つて波及せしが爪に達すると同時に五指の尖頭を針もて刺すが如く感じつゝ一時に腕を顫動して肩骨の左方より後頭を衝きたり此時左手の全部は已に痲痺せるものゝ如くなりしが右手に握りし鉛筆は何時しか指を離れて卓上に落ちたり此時眩暈甚しく耳鳴り心臟の鼓動烈しくして涎は流れ頓みに嘔吐を催し腦痛み關節痒く手足の指頭痙攣して四肢縮まるが如く昏倒せんとせるより大に驚き食卓に寄り添ひたるまゝ思慮する暇もなく旅行鞄の內より寶丹を取り出さんと右手を延はせしも時已に後れ各指は痲痺して屈伸自由ならずされどかゝる珍事のあらん事は豫ねて期し居たりしが故に心神を沈め體を緩やかにし食卓にもたれつゝ辛くも椅子に憑りしが四肢益々痙攣を起して荒繩もて縛せられたるが如く吐くが如くに涎は流れ冷汗は浴ひせるが如くに發し視線は朦朧として僅に白黑を認め得るのみなりしが人を呼ばんと欲するも聲發せず身を動かさんと欲するも四肢自由ならず卓上に伏したる儘熟々思ふやう「嗚呼過てり油斷をせるのみにて脆くも敵の毒手に陷ゐりたり余が「ブ」府にあるの日貝加爾湖東には梁山泊流の强賊橫行し巧みに痲痺劑を用ひて旅客を惱すもの尠なからざりしと聞きしが果せる哉彼れ「セメンスキー」も其類ならん歟されば余を此處に釣り出さんがために「チター」府の旅館に同宿せし以來は陰に陽に余を付け纏ひしならん痲痺劑の分量は如何に容躰の尋常ならざるより察する時は頗る多量にてありしならむ「ジモアイ」の規則として老人は明朝七時迄此處を見舞はざるの例なれば今は救を呼ぶも詮なきことなり解毒劑は

革包の内に藏しあるも四肢痲痺して最早之れを取り出す事難し遠征の途に上りしより已に數年一たびは銃刑を遁れ二たびは水難を免れて幸に餘命を保ち得たりしに今や脆くも兇賊の術中に陷ゐり身は已に半ば土中に葬られつゝあるなり嗚呼前途猶ほ遼遠なり一たび彼れが毒手に斃れなば誰か余が萬里の遠征を繼續するものあらん死生は此れ命なりとするも斯の如き兇賊を横行せしめなば旅客誰か枕を高ふして旅行する事を得ん左れば寧ろ彼れを銃殺して旅客の害を除かばこれ余が死後の陰德ともならん」など精神恍惚間に妄想しつゝ卓上に俯し苦惱を忍びてありしが間もなく「セメンスキー」は靴音荒く戸を排して入り來り嘲笑の聲高く「日本の旅行者よ如何に喫茶の早かりしよ余が心を籠めて進じたる紅茶の味はまた特別なりしならん肉を好まざるや銃丸を好みなば進ずべし利劍を望みなば味ふべし阿片「コロロホルム」君が欲するまゝに献ずべし萬里の征客を歡待する余等同胞の厚意は君の意を滿足せしむべくもあらざれど一杯の紅茶に現世を脱し天國に赴きて旅行の苦痛を免るは反つて君の本意なるべし左れば君の携帶する金品は君の爲めには最早要なかる可し要なき金品は余恭しく之れを受けんと」冷罵の毒舌鋭どく余が行李を抱え悠然として戸外に立ち去らんとせるを見るより余は怒氣滿身に溢れ無念骨髓に徹し辛ふじて短銃を取り出したれども五指の屈伸せざる爲め掌上に載せたるまゝ「セメンスキー」を睨みつゝ身を起さんとせしに此時痲痺劑は已に全身に浸み渡りけん各關節部は緩るみて起つ能はず身を藻掻き氣を勵ましつゝある中何時しか昏瞑して數露里の彼方に打出すが如き一發の銃聲を耳にせるまゝ渾沌不省の暗境にと墜ち去りぬ

知覺を失なつて人事不省に陷ゐる殆んど八時間萬死に一生を得て蘇生したる後ちは精神猶ほ恍惚として夢路を辿どりながら身は猶ほ渾沌の裡に葬られつゝあるが如き心地して眼を開けば室内の光景朦朧として物色を辨じ難かりしが去宵以來の珍事を妄想の裡より拾ろひ集め前後の出來事を對照しつゝ頭を擧げんとすれば腦痺れ關節痛みて腹痛さへ加はり苦悶に堪へ難きより再び半夢半幻の裡に倒れ臥したり

斯くて午前六時とも覺しき頃ほひ不圖眼を覺せば郊外馬の嘶く聲車の軌る音高く聞へしが辛ふじて身を反へし首を擡くれば這は何んたる變狀ぞ四邊は慘狀を極め血痕處々に點印し茶器は碎け椅子は仆れ余は鮮血淋漓の間に倒れつゝありたり心を勵まし身を起さんと試みしかも關節緩るみて自在ならず已むなく馬宿主人の來るを待つとし再び眼を閉ちたるまゝ遭難を聯想しつゝ徐ろに心を沈むる程もなく戸を排して勢ひ烈しく入り來りたる老人は室内の模樣を目擊するや彼れは不意の珍事と意外

の慘狀に絶倒せん許りに愕き塑像の如くに立ちたるまゝ暫くは無言にて四邊を見廻はし居たりしが程經て老人は頭ひなから獨語しつゝ「這は大事起れり喧嘩歟、强盜歟室內の狼籍は如何に旅客の被害は如何に事重大なれば猶豫す可きにあらず時後れなば面倒ならん旅客の絶命せざる前にと」犢牛の室內に入るをも氣付かず遽しく踵を反へし左足の靴を脫きたるまゝに馳せ去りたり

老人の狼狽せる可笑しき容貌と姿勢とに苦痛を忘るる許りに面白く心地せる中にも不圖旅行革包の事を想ひ出し靜に椅子の下を窺へは短銃と革包とは其儘に殘留しありたり革包の中には凡ての重要書類、爲替劵旅行劵等を容れありしに不幸中の幸にも兇賊は此二品に氣付かず一發の狙擊を紀念として逸早くも此處を遁れ去りたるものと察せらる

纏かて老人を案內として馳せ來りたるは胡索克騎兵、駐在所巡査、村醫、村長、助役等にして彼れ等は何事をか談合の上先つ余を抱き起し上衣を脫せしめ負傷の箇處を調べしに左方の肱に深さ一分長さ一寸許の銃丸貫裂傷あり胸脇の右方乳の上部大凡五分許りの處に擦過傷あり何れも輕傷なるも前者は血管を切り破りたる爲め出血夥しく四邊に迸出せり察するに兇賊は余が短銃を手にせるに驚き機先を制して狙擊したる彈丸は上衣を徹ふして肱を破り丸は上部の表皮を擦過したるものなる可く彈丸は椅子の脚部に的中して殆んど一分許の貫通傷を殘したり此に村醫は先づ應急の手當てをなし繃帶を施こしたる後余に解毒劑と冷水とを與へたるより漸ぐに心身回復し幾分歟舌は弱らぎ頭痛も減したりしを以て苦痛を忍びて兇賊と「チター」旅館に知己となりし以來の事實を語りしが村長は先つ余が旅劵を檢閲し然る後胡索克を急使として「チター」府の警察署に急報せしめ一方には州長に事の顚末を上申したり間もなく余は醫師「シニスタコーフ」氏の假寓に收容せられて氏の治療を受くることとなりたり

其三　單騎賊を追跡す

留まること二日八月十四日一名の胡索克は余が許に訪ひ來り言ふやう「今朝「ペトカル」より此地を過ぎて「チター」に向かひてたる鐵道官吏の言に因れば隣村に君が被難せるが如き日本品を販賣しつゝ前方に向ひしものありしとのことを聽きたり人相躰格其他馬車の構造等より察する時は或は君を害せし兇賊ならん歟左れば警察の手を待たんよりは寧ろ駟馬に鞭ち彼れを追捕するは尤も得策ならん大膽なる兇賊は君の已に死して罪跡既に湮滅したるものと思考し斯くは悠々「ウエルフヲヂンスク」に向ひつゝあるものならん君の負傷は如何に痲痺劑の餘毒は如何に幸ひ余が友は急用ありて隣村に

出發の要意しつゝあるなり馬ならば貸し與へなん隣村に達しなば驛傳所に供托せら
る可し」と語るを聞き余は思ふやう「胡索克の忠告こそ此れ天の與へなり身は魔睡せら
れ銃擊せられ剩さへ行李を奪はるゝ事の恥辱なるに此地を距る遠からさる二十六露
里の隣村に於て切奪せる物品を販賣するとは實に言語同斷の奴なり胡索克が勸告こ
そ得難き好機なり痲痺劑の餘毒何にかあらん銃傷意とするに足らず」と深く胡索克に
謝し「シエスタコーフ」氏に事實を打明け氏が止むるをも顧みず「ブリヤーツキ」胡索克の
旅行馬車に同乘して直ちに此處を發したり
風を追ひ雲を捕ふるが如き心地して西の方松、白樺混生の山道に入り漸くに上ること
殆んど九露里絶頂と覺しき所に六角の禮拜堂あり内に救世主基督の銅像を安置せり
同行の「ブリヤーツキ」胡索克に問へば「千八百六十八年の頃とかや「イルクーツク」縣の豪
商三名の此地を過くるの際强盜の爲めに此處に虐殺せられたるより村民其の不幸の
慘死を憐み慰魂堂を建てたるものなりと語りき此處に馬を休憩せしめ山坂に隨つて
馳せ下れば疾風の如き馬車は圓石を千仞の谷に轉かすが如く疾電雷下「ベクレミシエ
フスカヤ」村に達したるは宛も午後一時にして山道十六露里餘を僅々二時間弱にて達
したり

此處は「ベクレミス」湖邊にある村落にして三部落を合して戸數百五十に數へられ寺院
驛傳六商店二酒舗あり余等は此處に食事を了し再び北に馳せ去りたり低原を西に貫
通する十餘露里の間は國道の兩側松樹蓊鬱として麻畠の如く水松落葉松根松等また
之れに混生せり午後七時「コンヂンスカヤ」村に着し「スタールシン」(村長)を訪ひしも要領
を得ず已むなく驛傳に歸るの途次七臺の商隊馬車の馳せ來りたるを呼びとめ兇賊類
似の馬車に出逢はざりしやと問ひたりしに一人は言ふやう「此れより西北する十三露
里にして「ジモアイ」あり「ジモアイ」を距る北三露里の山中に公の言ふが如き旅行馬車は
休憩し居りしが今は已に二十露里餘を走りしならん」と余は之れを聽くや否や再び村
長を訪ひ驛傳馬車を求めたりしに「此日二十餘頭の馬匹は一頭も殘さず出て去り今は
唯老ひて用に堪へざる駑馬あるも此れとて放牧なれば暗夜之れを捕へ難し明朝七時
には何れも歸り來る可し」と言ふ已むなく明朝午前未明に出發する事に決し臥床に就
きたりしが痲痺劑の餘毒完く消滅せざりしにや頭痛激しく手足屢々痙攣を起して安
眠を得ず加之半夜淸寒に堪へ難く宛かも冷水を背髓に濺かるゝが如き心地せるを忍
び十五日拂曉數杯の紅茶と一塊の黑麵麭とに飢を凌ぎ夏衣の儘旅行鞄と短銃とを又
形に負ひ短脚徒步雪の如き霜を踏み北風を迎へて此處を發せしは宛も午前四時半に

して驅けるが如き行歩も何となく遲きが如く感ぜらる

村端に「ニコラヒ」二世陛下巡狩の奉迎紀念碑あり北する七八露里の間は濕潤せる原野にして屢々濃厚なる降霜ありしにも係らず幾萬の蚊虻は飛び又かゝ來襲して逐へは拔らき拂らへば散し間々團隊を作りて四面合圍し群集し爲之黑色の上衣は須臾にして灰色に變し其五月蠅こと實に言はん方なかりしが余は此等の煩を避けんが爲め殆んど疾走して午前八時三四戸の部落に着したり此處は山間の「ジモアイ」にして主人の老翁は「セメント」製造を業とし工夫二十餘人を使役して盛かんに採掘製造に從事しつゝあり余は老主人を製造所に訪ひ「此の如き露人斯くの如き馬車は見當らざりしや」と問へば老人は蓼々たる白鬚を握り首を傾け答ふるやう「然り昨日午後一時頃なりしならん一臺の黑塗旅行馬車は北を指して馳せ去りしも近村に往復する旅客にやあらん其他十七八臺の馬車は連續して北に向ふ一群を見しのみなりき」と

老主人は尙ほも語を繼ぎ「旅行者は日本人にあらずや何が故に徒歩にて早朝危險なる旅行をなし玉ふぞ今や天寒く霜深きにも係らず一着の外套だに携へず單身北風を衝ひて北に赴くは果して何等の急用かある汪げて事情を打明かされよ」と諄々乎たる老人の語を中途に止め「老大人先づ余が言ふ所を聽かれよ」と首尾逐一に之れを說明したりしが老人は顰蹙しつゝ「凭は氣の毒の事なり五年前迄は此の如き兇賊は絕えてなかりしかも西比利亞鐵道工事着手以來は痲痺劑を投し昏睡藥を用ひて旅人を惱ますものありしを耳にしたりしが現に今春三月の下旬此「ジモアイ」に於て一人の此難に罹りしものありしも被害者の身躰强壯なりし爲め直ちに兇賊を捕へしとありたり其他山中に於て車上に於て或は酒舖料理店旅館等に於て此難に罹るもの甚だ多しと聞く抑も單身双靴人烟絕えたる數十里の山道を旅行するの危險は地理に明らかなる露人と雖ども之れを恐るゝ所なるに故さらに此危險なる旅行をなさるゝ君が好奇心こそ意に解せざる處なり幸ひ余が家に數頭の馬あり君此に騎して前村迄追跡せらる可し」と老主人の厚意に肥え逞しき一頭の白馬を借り受け單身單騎宛も巢を破られたる蜂が加害者を追ふ如く北に向つて馳せ去りぬ

此れより前村に達する猶二十露里餘あり馬上痲痺劑の餘毒に脚部屢々痙攣し疾驅する毎に墜落せんとせしともありしが山道二十露里の間は松類繁茂して尚ほ暗く雜草叢生して蟲聲喧しく行客は稀れに唯啄木鳥栗鼠の此處彼處に飛翔するを見るのみなりしが山道開くる處檻倉は設置せらる此れより間もなく「ベルシーノ、ヴーデンスカヤ」村に達したりしが直ちに村長を訪ひ來意を打明かしたりしに「ブリヤード」人の村長

は聽く度毎に嗟嘆しつゝありしが「莫斯科街道としての國道は唯一條に止まれるのみなれば「チター」より「イルクーツク」に出て「イルクーツク」より「チター」に至るの旅客は是非本村を經過せざる可からず已に本村を經過するとせん歟檻倉の見張人にして之れを知らざるの理なし余が想像に因るに此賊は此れ尋常の賊にあらざる可きか彼れ晝間は山中に潛匿し半夜道を走り「チター」府に逆行して巧みに踪跡を韜晦せるにあらざれば因古塔河畔の間道を走りしならん左れば此れより雲を攫むが如く風を追ふが如き搜索は決して得策と謂ふ可からず寧ろ逆行して「チター」に歸り徐ろに後圖を計らるゝに逆行する事に決し此處を出發したりしが道途行々目を配はりしも一も得る處なく追跡は完く失敗して空しく「ジモアイ」に歸りしは午後八時頃にして此日は前後五十露里餘を旅行したりしなり

老主人の情深き厚意に心を安んじ此處に一泊を乞ひ別室に身を横へつゝありしが午後九時半頃に至り老主人に伴はれて一名の鐵道官吏は余が危險なる珍事に出逢ひたるを傳聞し注意を與へんが爲めに來り訪ひしなりとて諸々雜談の末彼語を繼きて言ふやう「貴客が今回の遭難は余實に之れを傷む殊に我が內地には警察の制度敢て寛なるにはあらざれど府下近き地に於て兇賊を横行せしむるは政府の法令警察の威嚴なきに似たり左れど西比利亞の賊は形容を變ずるに妙を得つゝあるなり言語、音聲、容貌、風躰、服裝、馬車等に至る迄瞬間に變裝して巧手なる探偵と雖ども之れを見分くるに難きのみならず追躡せる中之れを捕ふるに迷ふとすらあるなり況んや貴客の如き異國人は之れを見分くる事容易にあらず踪跡を追ふ幾百露里なるも萬に一も之れを捕へ難からん」との語を聞き余は驚嘆して曰く「余は商業視察の爲め「イルクーツク」方面に赴くものなりしに圖らずも兇賊の術中に陷ゐり已に一命を失はんとまでなしたり左れど天助に因りて幸ひにも西比利亞原頭の露と消えざりしは此れ不幸中の幸なり余が携帶品中再び得難き品は是れ貴國品にあらざれば或は之れに因りて加害者を捕縛するの端緒ともなりなん」と默聽深き思ひに沈みつゝありし老主人は「されば」なり此賊は「チター」府「ウエルフチウヂンスク」町間に出沒するものならんか彼等は彼等の區域に於て運動し他の區域を犯す能はざるの內規ありと聞く君宜しく其心して逮捕の願ひをなさる可し」と此れより談四方に亘り彼れ等の去りし後ちは身を長椅子に横へたるゝ床蟲の苦なく安眠するとを得たりき

十六日蒼空清くして玻璃の如く地上霜深くして雪の積るに似たり朔風は颯々として

輕衣を捲き寒氣銃瘧に徹し指頭宛ながら針もて刺さるゝが如き心地せられたり午前十一時「コンヂンスカヤ」村に着し此れより驛傳馬車を雇ふて三十二露里を駛行し「ベクレミシエフスカヤ」村に達し官用旅舍に就き一宿し翌十七日午前六時霜を踏み靴痕を紀念として悄然南に向ふ

村端より一小河を渡り濕氣多き「ベクレミス」湖畔に沿ひ高原に上れば此日天清麗洗ふが如く四顧澎爽顧みれば「ベクレミス」湖の水域は汪洋として金波漣漪徐ろに岸を洗ふ音宛ながら音樂を奏するが如し湖畔水淺き處には楊柳秋に傲り樹梢影淡き下には飄風呂律を調ぶ原頭を撫つる微風には白樺鈴を弄び澤畔を賑はす淺には落葉松冬を迎ふるに似たり遙かに湖上を見渡せば數行の雁群九皐高く鳴き東南に向つて飛び去りぬ嗚呼遠征の客西比利亞の曠野に曝露する已に數年時には萬死に陷ゐり時には飢渴に逼り烈寒强暑、蠻烟、瘴霧、荒ゆる苦辛を嘗むる前後幾回ぞ今や關山萬里の胡北に於て轗軻不遇の逆境に於て此悲愴なる寒雁の寒に叫ぶを聽く孤客望鄉の念如何にしてか止め得可き而かも八月深秋天高く水涸れ四野霜を飛ばすの時飛鳥の兩翼を斷たれだるが如く洋中檣を失ひたるが如き余は如何にしてか漠々たる前途の江山を跋涉し得可き行路の艱、遠征の難此處に至つて抑も極まれりと謂つ可しなど深き思ひに沈みつゝ山道に入る六露里坂路を上る四露里聖堂を左りに見飛ぶが如くに馳せ下り遭難地に達したるは午後一時半にして前後二十六露里半を七時間にて徒行したるなり「ドームノ、クリユチエフスカヤ」村に入れば此時已に「チター」警察部よりは胡索克巡査一名檢分の爲めにとて來り居たり余を見て旅券の有無を調べ遭難當時の實況を逐一問取りて然る後警察署よりの召喚狀を示し來る十九日午前十時警察本部に出頭す可しと單騎鐵鞭を鳴らして馳せ去りぬ

此處に余は厚く「シエスタコフスキ」及び「スタールシン」等に禮し再會を約して單身徒步

因古塔河畔の探檢にと向かひたり

村端より臥牛の如き高丘に沿ひ進む四露里許にして坦平砥の如き低原に出づれば東南は茫々として蒼海原の如く地味疲瘦なるが故に低原中一樹を產せず唯溪流水清らかなる邊に短矮なる楊柳の風に惱みつゝあるを認むるのみ道なき低原を橫きり東南に向ふ五露里許にして「ドームノスキー」村に達したり地は戶數三十人口百二十五寺院二商店あり、此れより西北因古塔河の上流百七十露里餘の處に「ペトロパウロフスキ」製鑛所あり此處に通する本道は、チャウルノフスカヤ」村の西南五露里の處より國道と分れ清領恰克圖に通ずる間道は此村を經過して西南に向ふものなり余の達せるは午後

七時後にして折しも雲脚低く暮色漸く加はり身體又疲勞に堪へざりしを以て「スタールシン」を訪ひ一泊を乞ひたりしに忌中なればとて謝絶せられたるを始めとし戸毎を歴訪したれども壯者は鐵道工事老者は刈草に出てたれば望みに應じ難しとて首尾能き程に謝絶せられたり時は次第に移りて午後九時に近く日は完く暮れて物色を辨ぜず風雲益慘憺時氣また寒を加へて銃瘢痛み苦惱に堪へ難きより再び毎戸を叩きしも何れも要領を得ず最早三十戸の民家余が身を容るゝ豚小屋さへなきに至りたり

喪家の狗の如く悄然として軒頭に佇立し凄愴なる雲間の星光を眺めて逆境を嘆じつゝ暫くは失望の淵に沈みたりしが再び「スタールシン」を訪ひ幾度か老姥に叩頭し漸く料理室の汚なき土間の一隅を借受け此處に假寢の夢を結ばんと試みたりしかも半夜床蟲の襲來夥しき爲めに安眠を得ず加ふるに破窓よりは寒風洩れ來りて清寒に堪へ難く痲痺劑の餘毒猶ほ完く消滅せざりけん腦痺れ四肢痙攣し關節部痛み苦悶に堪へざるより餘儀なく跪坐して辛くも曉天を待ちたりしが夜明けて後一杯の紅茶を乞ひ單身輕衣寒風を衝ひて因古塔河畔にと馳せ去りぬ

西南する五露里にして「チター」より第二の停車場「クリユチナ」に達し此處に馬車を雇ひ四十露里餘を駛行して「チター」府に逆征し「ボドマイスキ」旅館に投宿して銳氣を養なひ徐ろに善後の策を講ずるとに決したり

其四　後貝加爾州方面の氣候

西比利亞の氣候は四季與もに殘酷なり氣候の變動せんとするや猶豫なく斟酌なし春夏には濃厚なる瘴霧を放ち秋冬には凜烈なる朔風を起し萬象をして忽ち生色なからしむ春陽秋涼の日は四季僅かに指を屈する程なり空氣は乾燥に過ぎ濕潤に過ぐ汚穢なる埃塵は四季共に揚がり腐敗せる濕氣は半歲絶えず飛ぶ所謂瘴癘の原素は此れ等の不潔物より化生せらる加之氣候の激變は此れまた人身の健康に一層の害を與ふ四季の中八ヶ月以上は二重窓内に蟄居して腐敗せる炭素勝の空氣に呼吸するが故に柔弱なる東洋人の如きは永く健康を保ち難く虛弱者は三星霜後に至り衰弱して倒れざるもの十中二三に過ぎ例せんに十一月半より三月半に至る殆んど四ヶ月間五月初旬より殆んど一ヶ月間七月初旬より殆んど一ヶ月間は氣候或は積極に走り或は消極に走りて激變あり盛冬三ヶ月(十二月より二月末)間は空氣乾燥に過ぎ水氣を含める萬物は悉く氷結し地平線に近き日光には熱なく夜は長きに過ぎ昼は短に過ぐ朝夕の寒暖計攝氏零以下三十五度より四十三度に下るとあり初夏に至れば半歲間氷結せる萬物は酷熱に逢ふが爲めに凡て半は腐敗して汚氣を放ち汚水に化し種々なる「バクテリア」

を化生し盛夏一ヶ月間は空氣濕潤に過ぎ雨多く冷霧屢々起り金屬多くは銹を生じ鐵の如きは腐蝕するものあるに至る加之朝夕氷結せんとするが如き時季も日中は甑底に蒸さるゝが如き酷熱に變するが爲めに飲食物の腐敗寄生蟲の化生もまた速やかにして疾病は重もに初夏と盛夏との二期に起るもの多きを見る井戸掘の語るを聞くに盛夏井戸を掘るに地下大凡一「サージェン」は結氷完く融解しつゝあるも此より二「サージェン」迄は或は個處により結氷完く融解せず大凡四「サージェン」(我五間弱)以下に至れば井戸の氷結四季融解することなしと宜なる哉西比利亞内部の旅行者は溪流或は井水泉水等の寒烈なるに驚かざるものはなかるべく畢竟するに水脈は氷結せる地下を潛て湧出するに因れる爲なる可し余が去歳八月一日「チター」府を距る東南四十餘露里の山間に於て初霜に驚きしより以來八月下旬に於て二回の降雪に出逢ひたるが如く八月中旬前後より時氣俄かに寒冷となり九月初旬よりは漸次に結氷し始め日中の暖氣は攝氏十度内外なるにも係らず朝夕は〇、二度乃至〇、五度に降り宛も我十二月下旬の如き心地せられたり此れより寒暖度を均ふせず或は非常に昇り或は非常に降るとあるも九月下旬よりは空氣自然に乾燥して降雨なく天色蒼海の如く日光冷やかに月色冴え星光また鮮やかなり草木の葉は或は變色の儘或は變色だもせず立ち枯れとなり九月中旬に於て住民は羊皮の外套を着するに至る此れよりは四顧の光景完く變じて降りたる雪は此處彼處に殘りて日光も之れを融解するの熱力なく太陽は愈々地平線に傾むき最早冬時の風光を呈するに至るべし

三十年八月下旬余が遠征に障礙起り鐵鞭を「キノーン」湖畔に拋ち匈奴の爲めに牧羊しつゝありし際湖畔を距る露里餘の高丘上に一の不完全なる測候所を建てゝ氣候を觀測したり之れに因らば東部西比利亞の中央部に於ける氣候の一端を窺ひ知るに足るべし

八　月（遠征中）

日	寒暖	降雪	降霜
一	時氣寒 三度に下る	チターに初雪	チターの東山間（初）
二			
三	日中暖 十度に上る		
四			
五			
六			
七	時氣寒 三度に下る	降霰あり	チター府にて第一回

九　月（「キノーン」湖畔）

	寒暖	降雪	降霜
	時氣暖 日中十度		如雪
	暖日中十三度		同
	同		同
	同		同
	同		同
	同		同
	時氣大變化なし		薄霜

八	薄氷を見る	第二回	同大變化なし	同
九	同	第三回	同	同
十	同	第四回	同	如雪
十一	同	降霜あり	強寒〇、二度	同
十二	同	同	同	同
十三	同	同	同	同
十四	時氣寒〇、二度に下る	同	同	同
十五	薄氷を見る	深霜	強寒〇、五度	積一寸
十六	同	同	同	同
十七	同	同（チターの四百露里の處第二回）	同	同
十八	同	同	同	同
十九	同	同	同	同
二十	少暖四度	薄霜	同	同
廿一	同	同	同	同
廿二	同	同	同	同
廿三	同	同	同	同
廿四	同	同	同	此より以後曇天は降雪の時を除きて見る能はざりき
廿五	同	同	同	同
廿六	寒風夜に至り盛る	同	同	同
廿七	強寒〇、五度	第三回の雪	同	同
廿八	厚氷三分	此より雪融	同	同
廿九	強寒日中強暖	解し盡さず	同	同
三十	暖日中七度	同	同	同
卅一	同	同	同	同

備考　氣候の觀測は午前日出の際に於てし降雪霜は「チター」府及び「キノーン」湖畔其他の箇處に於てせり

余が絶東の軍港浦鹽斯德に在るの日冬時の氣象を觀測せしに降雪の翌日は常に空氣の變動を來して大風雪となるは常の如く感ぜしが黑龍州「ブラゴツエシチエンスク」府と此地との氣象を比較するに大同小異にして西比利亞曠野の內部に入る丈け時候速かに寒くなり遲く暖となり乃はち冬時長く夏時短きを現はすは一は大陸氣候の爲めなる可きも畢竟北部に近づくが爲めなる可く而して「チター」管區の氣象上豫想外に感ぜしは寒氣の非常に强かりしと及降雪の度割合に少なきとにして三十年八月の初雪より二月下旬に至る迄指を屈すれは僅かに六回に止まり其尤も深き降雪は十二月十

三日なりしが積雪僅かに二寸に滿たざりき而して降雪の翌日は天氣清澄洗ふが如く風死し雲消え乾坤唯蒼白の二色を呈はすのみ其降雪せんとするや蒼天自然の霧もて掩はるゝが如く雲影の何れにあるやを認むると能はず唯白粉を空中より降らすに異ならず盛冬の季候は寒さといはんより寧ろ痛み强く水氣あるものを室外に携へ出てなば瞬時にして凝固し忽ち石の如く變ずるは常なり盛寒の時氣は十二月下旬より一月中旬に及びしが就中其尤も寒烈なりしは明治三十年一月六日にして寒暖計攝氏〇度以下四十四度七に下りたり此日朝來雲なく風なく時候尤も靜穩なりしが余には殊に寒烈なりと感ぜざりしかど面皮なんとなく刺さるゝが如く殺がるゝが如く呼吸に惱み上瞼下瞼附着し鬚髯氷柱を生じ軒頭の鳩屋々地に墜づるに心付き茲に余は寒氣の非常なるを覺り仰いて煙筒を見れば平常高く廣く上ぼる煙筒の煙は筒口より僅かに數尺の處に於て消滅し白粉の如き粉雪となりて四圍に降るを見たり此際寒暖計を檢せしに正に攝氏零度以下四十四七を示せるに驚き微溫湯を携へ出てゝ試みに四尺許りの高さより水滴を落せしに液體の儘滴々墜下せず其地上に達するや半ば已に凝固して霰の如くなれるを見たり時正に午前五時是より二三時間前即ち午前二時頃には實に非常の寒氣にてありしならんと想像し後にて土着の露人に問へば「數十年來未曾有の嚴寒にてありし」と語れり

二月中旬頃よりは朝夕の時氣尚ほ依然として酷寒を感ぜしも日中は太陽光熱の爲めに大に減殺せられ殊に午後二時より三時に至るの間は暖氣自然に勢ひ付き二月下旬よりは往々「チター」河結氷の表面少しく融解して水の氷層上を流るゝを見たり而して「チター」河の凍合は三十年十一月一日にして因古塔河は同月三日なりしが之れを二十九年黑龍州「プ」府方面の黑龍江に比するに「チター」河は十日間因古塔河は一週間早かりしは畢竟するに黑龍江は「シユカ」「アルグン」「ゼーヤ」諸支流より流出する流氷を以て一時に凍合せしかども「チター」及び因古塔河は兩岸より凍氷し始め漸次に中央に及ぼして流域の上部も凍合し此處に完く若々たる水域を見る能はざるに至らしめたり而して「キノーン」湖は十月下旬湖水の全面凍合し十一月五日幾十の馬駱駝の群を驅る「ブリヤツキ」商隊の數群が氷上を横ぎるを見たりき三月始め頃に當り「チター」「エンガタ」河の氷層は日中暖氣の爲め氷層の表面少しく融解し始めたりしを檢せしに氷層の厚さは猶依然として二尺より三尺に及べるを確かめたりし四月初旬よりは四顧の光景漸く春光を現はすに至りしかも朝夕の寒氣尚ほ甚だしく殊に西風起るの際には勢ひ砂を捲き石を飛ばし清淨なる空氣は之が爲に亂されて完く不潔に化せられ是より前に述べ

たるが如き人身の健康を害するの時氣とはなりたり然れども此强風の爲めに石の如く凍りたる地層の表面は漸次に濕氣を奪はれて上部蒸發し次第に乾燥し鐵の如き江湖の結氷も漸次に龜裂を生じて破壞し露暦四月中旬後に至り大抵分裂して流氷となり本流黑龍江に向て流下するに至りたり余が「ウエルフテウデンスク」町近く進みたるの頃は五月中旬なりしが此時北風猶ほ凛として肌骨に徹し殊に午前二時より四時までの間は氷點以下に降るとありし各村到る處井を調べしに地下大凡四尺より以下は完く結氷を以て組み立られ宛かも氷塊に穴を穿てるものゝ如く釣瓶を昇降せしめ得るのみなりき土民に向かひ「盛夏もかくの如きや」と問へば彼等は答ふ「四季共に井中の結氷融解するとなきも千八百七十九年唯一度井中の結氷融解せるとありしを沿道各處の人民は之を怪みつゝありしに果せる哉同年七月七日に大地震の起れるあり之れが爲め「ウエルフ、テウデンスク」以東百六十露里迄火山灰を降らせしことありしが其後は井中の結氷四季絶ゆることなかりしも千八百九十七年秋に於る大洪水の際にも井中の結氷は半ば融解せるが故に再び地震の恐れあらん歟と危みつゝありしに同八月貝加爾湖南に於ける地震の爲めに河域洪溢して東部西比利亞の過半は水害を蒙りたり此を以て井中の結氷融解するは地震の前徵として土人の深く懼るゝ所なり」と

又六月十日の太陽出沒を試驗したりしに日出は午前三時三十五分にして日沒は午後八時三十分なりしが日沒後二時間は猶ほ薄暮の如く物色を辨じ得べく午後十二時頃に至り漸く薄暗くなりたりされど月なきの夜と雖も完く暗黑なるに非ず常に日暮の如き觀を示せり而して秋冬は月光冴え星輝爽かなるも春夏の夜景は月光澄まず星光濁り宛も日本の三月頃の空合に異ならず畢竟するに太陽の長く地平線上にあり遠く地平線下を離れざるがためなるべし、天を幕として山に寢ね地を席として野に臥する北行が爲めには一世夜中長き時間の暗黑ならざるは幸なるが如しと雖も夜陰には床蟲の爲め旅寢を快くすること能はず之が爲め騎馬の旅行には日中十一時頃より午後四時頃までの午睡と午後十一時頃より午前六時頃までの夜臥とを以て常例とはなしたり此れ日中砂を爍くが如き熱風の暑氣を避け夜中植物を凍枯せしむるが如き寒烈の病氣を避けんが爲めなりき抑も大陸氣候の不順は其旅行者の健康に害を與ふること幾許そ加之風弱き日中には幾千萬の蚊虻蚋の羽蟲は群をなして人馬を襲ひ來り風なきの夜は濃き霧に籠しき露の爲めに衣類完く濕潤して水に浸せるが如く風起れば砂を捲き氣靄がなれば瘴霧起る朝夕に地より蒸發する蒸發氣は完く結氷の吹き出す寒氣にして草木は此氣の爲めに多少成長を妨げられ早く萎む

其五　遠征中絶と騎馬旅行

八月深秋四野霜滿つるの際遠征道猶ほ遠かりしかども東部西比利亞中央部の寒村「ドーマノ、グリユチエフスカヤ」村に於て西比利亞强盜の爲めに脆くも痲劑に昏倒し剩さへ銃傷劍奪の慘劇を受けしより鐵靴破れ健脚艱やみて起つ能はず遠征茲に中絶して「チタ」病院に呻吟せしが一日「ブリヤーツキ」胡索克騎兵少尉「アレキセーフ」なる人余が病室にと訪ひ來り雜談の末語を改めて言ふやう「聞くが如くんば貴客は遠征の途次盜兒の爲めに不虞の危害を受けたりとの報月餘以前の後貝加爾新聞に見えたりし其當時より實に同情の感に堪へざりしに今また貴客が病院に呻吟しつゝ遠征を繼續する能はざるの悲音に接したるより最早同色人種の默して已むべき事にはあらざると覺悟し善後の策を講ぜんが爲めに貴客の病床を聞せしなり七轉八起は處世の常、一伸一屈は人間行路の常と聞くされば一時身を陋巷に投し靜かに鋭氣を養なひ羽翼の創傷完たく癒ゆるを待ち一翔萬里を期するの方法を求むるは此れ貴客の逆境を轉回するに得策ならんか幸ひにも小官の親戚中「キノーン」湖畔に數多き羊を有するものあり此頃飼牧の人を欠けると聞く貴客若し牧羊の職業なりとて厭ふなくんば低く飛んで其翼を歛めたまへ」と勸むるを「アヽ遠征の客誤つて狡兒の術中に陷ゐり果なくも井中に擠され上より石を投け込まるゝが如き不幸に遭遇したりしも天命未だ盡きざりけん辛くも餘命を繋き留めたりしは此れ實に昊天后土の試驗と覺悟するより外なかるべし昔漢の蘇武は胡北の地に使して匈奴の爲めに貝加爾湖畔に牧羊したると聞くされば賤業なりとて牧羊のこと何にかあらん且つそれ渴するものは水を擇ばず飢ゆるものは食を撰はざるは常のことにして逆境に陷ゐりたる余が刻下の必要は業の貴賤を撰ふべきにあらず貴官の芳志こそ實に得難き幸福なり身は牧羊の道には暗けれど時日を重ねなばなどて人後に附くことやあらん狂げて高察を加へ玉へと」同情の感に打たれたる氏は滿足の意を表しつゝ後會を約して出で去りしが日を經て少尉は再び訪ひ來り交渉の纏まれるを報じ退院の手續をなし九月七日「チタ」府を出發して「キノーン」湖畔にと辿りつきぬ

晨には兒羊の亂鳴に脆ろき夢を破られ夕には湖上より送り來る冷風に身を震はし群羊と寢食を共にしつゝ昧爽には百七十六頭の群羊を漠々たる曠野に放ち薄暮には病餘の兒羊を渺茫たる湖邊草軟らかなる處に追ひ日中は眼眸極りなき低原に群羊と起臥し。つゝ雪の如き嚴霜を踏み刺すが如き朔風に曝され牧羊に餘念なく兒羊の戲むるゝに心を慰めつゝ此處に三ヶ月を過せしが折りしも十二月廿二日は宛も冬至に當れ

るを以て太陽の出沒を觀察せんと欲し牧羊用の馬に騎し午前八時湖畔の假寓を出つれば此日は天清く星稀にして寒氣また凜烈なりしが攝氏の寒暖計にて〇以下三十二度、七、にまで下りたり氷上胡馬に一鞭を加ふるもまた一興なるべしと馳せ出せば坦平砥の如き三菱形の玻璃板上一片の塵埃だも止めず漠々として眼眸定かならず西に馳せ東に走れる湖邊の高丘は數日前の降雪に飾られて白堊の堤防を築くが如く模糊として湖西に隱見する「キノーン」農村は深く曉霧に鎖されて水中に散點する數多き浮標に似たり湖面の氷層厚さ何尺程あらんと農民が漁とる氷穴を窺へば氷層は二尺以上に達せり胡馬に一鞭を加ふれば疾風の如く湖上斜めに馳せ出したりしも鐵蹄觸るゝ處音なく響なし聽がて四五露里も馳せたらんと覺しき頃馬を反せば戛々として胡馬の鼻頭に鳴る氷柱は鈴に似て音冴え帽頭を削れる朔風は颯々として亂調なる音樂の如く鬚髯は氷りて毛衣の襟に附着し果ては首を左右するに苦みぬ馬を湖畔に駐めて東天を眺むれば暫くして太陽は漸くに地上に現はれたり時を檢すれば正さに午前九時四十分なりき

夢の如く幻の如き間に時來り時往き無限の感慨に殆んど八ヶ月を湖畔に經過したりしが日は次第に長く夜は次第に短ふしてさしも厚かりし湖面の氷層も何時しが消え唯蒼々たる漣波の漂渺たるを見るのみなりしが遠征の勇氣は最早抑へ難きより一日主人の「ブリャーツキ」に意中を打明け暇を乞へば氏は豫ねて「アレキセーフ」少尉より余がことを聞き取りしものと見え快よく承諾せるより愈遠征を繼續することに決定したり

春曙霞深き湖邊に蒸溜水の如き湖水を掬ひ上げ羊兒に飲はしめ病羊を勞はりつゝ飼牧に餘念なき折しも主人の「ブリャーツキ」は騎馬にて鞍置きたる肥馬一頭を率ひ來り言ふやう「貴客が今回の壯圖を送らんが爲め健脚一頭を撰み來れり肥馬は脚勁く寒に堪へ暑に強く一日能く百露里を馳するに足る此れより前途水利乏しくして車また通じ難し到る處深き森林と曠漠涯りなき高原低原のみにて馬背を籍るに非れば長途の旅行決して容易にあらず昧軀痩せたれとも健脚なり身長短なれども輕快なりされば貴客が前途の多幸を祝せん爲め之れを餞とせん之れに騎し烏拉爾の嶺を蹂躙して歐露に凱歌を奏さるべし」とて一瓶の「ウオッカ」酒と一片の燒肉に牧羊中の給料を添へ余が前にさし置き互ひに越し方行末の事なと談笑して「ウオッカ」酒に告別の式を了り翌朝此處を出發することに定め遠征上途の準備にと取り掛りたり

春宵夢濃やかにして漸く曉近き頃ほひ羊兒の亂鳴に覺眠せられ起き出てゝ湖邊に名

殘りの嚥嗽をなし寓に歸れば主人の「ブリヤーツキ」は余を送らんとて已に來り居たり此れより旅行用具を整へ背嚢を緊束し天地を祭り互の健康を祝ひつゝ此處を出發して遠征の途に上りしは明治三十年四月廿九日なりき

「キノーン」湖邊に沿ひ東する三露里許國道に出づれば鐵蹄輕くして身は宛も飛ぶに似たり間もなく「チャウルノフスカヤ」村に達し此れより鐵道と分れ午後四時「ドーマノグリユチエフスカヤ」村に入り知過の村民に挨拶しつゝ「シエスタコーフ」氏を訪ひ去秋の恩義を謝して此處に一泊し翌日午前五時此處を發し山道二十六露里を駛行し「ベクレミシエフスカヤ」村に達して此處に韮食を了し此れより西南する二十二露里「コンヂンスカヤ」村に達し驛傳に就き一宿を求めたり

五月一日午前十時此處を發し西南する三十露里にして「ベルシノ、ウーヂンスカヤ」村に達したり「チター」府より「ベルシノ、ウーヂンスカヤ」村に至るの道路は曩きに余が「ブリヤーツキ」胡索克の忠告に隨かひ兇賊追捕のため單身探檢したる國道にして行程百二十露里間は前後彼れ此れ三回の旅行を重ねたるものなり

五月二日午前六時此處を發して西南に向ふ低原或は高原の樹林地を過ぎ山道に入る十四五露里の間は路傍の風景一樣にして或は鈍角なる山坂を上り平坦なる砂地を通過して西北に向ひたりしが午後二時「ドムニンスカヤ」村に達し此れより西に向ふ村端より西北する四五露里にして低原に出づれば此處は曠漠たる大平野にして近く數露里の東方には明かに蛇の蟠るが如き高丘を見得可けれども南北の二面は黛の如き山脈の起伏するを仄かに認むるのみ宛も洋中より遠く陸地を望むが如く漠々たる原野の中には數多き湖沼あり湖邊近き處には「ブリヤーツキ」人の家屋と牧場との散見するを見る低原を横ぎり西に向ひ日沒の頃「ドムニンスカヤ」村より十八露里なる一寒村に着したり

此處は「ブリヤーツキ」人の部落にして戸數十八露人の三四戸も之れに混住せり地位邊僻に當れるが故に物價貴く就中食鹽は一斤、二十哥麵麭一斤十哥許なるも牛乳は日本の五合許にて三哥卵は十個二十哥許の割合なり此地は百六十餘年前迄は露領ともなく清領ともなく所謂匈奴胡北の地として蒙古の一寒村なりしが人情、風俗、習慣、嗜好、宗教等の蒙古風なるにも係らず今は完く露風に感化せられ露國の寺院を設けて轉宗斬髮せるもの已に過半に及べりと云ふ此處に余は露名「アレキサンドル、イワノウエチ」なる「ブリヤーツキ」胡索克の許に一宿なしたり

翌三日拂曉馬を胡邊に飲かひ此處を出發して南に向ふ行程三四露里の間は坦平なる

樹林地にして高原を下る所一村あり之を「ウクイル」と名づく、

午後一時西南に向ふ白樺及び落葉松混生の高原を過ぐる殆んと三露里にして樹林の盡くる處曠漠たる大原野の彼方には仄かに地平線に現はれて蚯蚓の匍匐するが如き遠山を雲烟模糊の間に認むるのみ低原中には「ブリヤーツキ」人の牧場ありて幾千の牛羊は彼處此處に散點し風景宛ながら畫くが如し此れより十九露里を騎行し「ボグロムニンスカヤ」村に達し此處に一泊したり、

五月四日攝氏四度二を示せり午前六時半此地を發して西南に向ふ村端より低原或は高原を縱貫する甘露里許の間だは一の人家なく一の水域なく一頭の牛馬だになかりしが漸くにして一小河を認めたり此時已に午後一時を過ぎ炎熱燒くか如く人馬共に水なきに苦しみたる折なりしを以て馬を野に放ちて鋭氣を養はしめ「ブリツキ」作りの盥にて茶を煎し釣を乘れ十餘の小魚を獲て壺飯に代へ午後四時此處を發して西へと進みたりしが數露里にして「ボベンチンスカヤ」村に達し農家庭園の樹蔭を借り受け此處に露宿する事に決したり地は「チタ」府と「ウエルフ、チウヂンスク」町との殆んど中央に位せる山間の一寒村にして春秋は時氣割合に冷ならざるも冬時は他の沿道村落の如く攝氏零度以下三十四乃至四十に下ると云へり此日余は小商店に就き買物せしに砂糖一斤四十二哥、米一斤三十哥には一驚を喫したりき午後八時頃より時氣寒を加へ露宿に堪へ難きを以て農民に乞ひ室内に移りたりしが翌朝床を起き出て窓を推せば四顧の光景全く變して此處彼處に雪積り降雪なほ翩翩として鵝毛の飛ぶが如し此時寒暖計は攝氏一度を示し晴雨計は尚ほ大風雨を示せるを以て余は此處に滯在する事に決し天候の穩かなるを待ち受たりしに夜半に至りて漸くに風勢衰へ唯降雨の瀟々として軒頭を打つ音のみ耳にしたりき

五月六日今朝風止み雲歛り蒼空洗ふが如く時氣冷やかにして攝氏三度七を示せり旅裝を結束し此處を出發なしたり村端よりは目睫を遮ぎる可き一の丘陵だにもなく茫々として蒼海原の如き平原には唯「ブリヤーツキ」人の牧場と家屋とを見るのみ道路は坦平にして十餘露里の間高低なく數千の電信柱は宛も一本の如く左右の風景單調同一にして目を惹くものなかりしが「グラーツキ」と名づる農村に達し翌七日旅裝を結束して西南する十六露里許の峽谷を過ぎ西に向ひ十七八露里の松林帶を横ぎり「アニンスカヤ」農村に着し五月八日此處を發して西に向ふ十露里許午後一時半「クーリスカヤ」村に達したり「クーリスカヤ」は「チタ」を距る三百露里「ウエルフチウヂンスク」を距る百四十六露里の東北に在り戸數百十、驛傳郵便電信支局、寺院、七商店、小學校、三酒店あり住

民は歐露人「ブリヤーツキ」人、清人、猶太人、韃靼人等の混住農村なり村端なり平原六七露里の間は唯里程標を數ふるのみなりしが單騎鞭をあげて西南に進む折りしも後方に當り馬の嘶く聲聞ゆるを怪み顧みれば一人の胡索克鐵鞭を振ひ鐵蹄高く土砂を蹴上げつゝ疾風の如く馳せ來るあり近づくまゝに之を見れば余が數日以前に一宿せし「ブリヤーツキ」胡索克「アイ」氏なりしなり手綱を繰り込み馬上に輕く會釋しつゝ欣然として「ヤー日本の旅客よこは意外の再會なり今や時已に後く日沒に近かけれども前程猶ほ十餘露里あり此より一鞭を加へなば馬疲れたりと雖も日暮迄には前村に達するを得んいざ此れより共に馬を馳せん」と胡馬の鼻を並べて一鞭を加へたりしが兩馬共に蕭々たる朔風に嘶きつゝ鐵蹄輕く西に向つて馳せ出し須臾にして「タルガバタイスカヤ」村に達したり五月九日此處を發して一小村を過ぎ村端より「アナー」川に沿ひ西する十露里の處よりは蒼々たる松林の山道に入りたりしに古幹老樹の幾萬株は嵯峨蓊蔚日影を洩さず樹幹により察するに幾千年前より曾て斧鉞の入りしことなき樹林とは知られぬ

土質は大抵白砂にして國道の如きは砂深く馬蹄を沒し山道寂寞鳥聲稀れに行人絶え到る處蹄猶ほ暗き深林を我物顏に飛翔する栗鼠の群を見るのみなりしが殆んど八九露里許にして胡馬「ウラル」は數聲高く嘶き馬首を左方の樹林に向け鞭を振ひつゝ進まざるに余は怪しみ「健馬の鐵蹄を留むるは何物ぞ山賊にやあらん猛獸にやあらん彼れより先んぜざる中に」と馬より下り短銃右手に前程をすかし索めしかも傘の如き老松は兩傍より國道を覆ふのみにて怪しきものとては認めざりしが不圖も左方の深林遙か數町の彼方に鏡の如き湖水のあるを發見したり「扨ては長途の旅行に彼奴渴したるならん」と轡を執りつゝ樹間を彼方此方へと潛りぬけ五六町にして湖邊に出でたりし頃は日は已に西に入り暮色蒼然水光また紫色に變じたるの時なりき此處に余は「ウラル」を湖邊草深き處に放ち枯木を集め篝火を點じ「ブリッキ」造りの盥もて茶を煎じ樹間に釣床を設け枯れたる大木を集め篝火を設けなどして物凄き深林中に涼しき星光を眺めつゝ何時しか夢に入りしは旅行中の一興なりき

喧噪なる鳥の羽音と鳴く聲とに脆ろき夢は破れたりしが時を撿すれば正さに午前三時東天已に白みつゝありたり「意外の獲もの」と釣床を出て萬一を僥倖して短銃に散彈を裝し水禽の啼く音を慕ひ足音靜かに樹間より窺かに窺ひ見しに幾百の水禽は大小相混じて岸に上り羽叩きなしつゝ今や飛び去らんとする狀を見るより余は大木を小楯に取り狙らひ澄まして續け打ちの三發に容易く五羽は地に落ちたりしが三羽は輕

傷にやあらん再び飛上り辛うじて逃れ去りたり急き打留めたる二羽を捕へて之れを見れば一羽は日本の鴨に似て小さく一羽は宛かも鳴に似たる鳥にして上嘴の長さ八寸二分嘴頭は下方に彎曲して下嘴を覆ひ兩翼を張れば殆んと二尺六寸許に及べる大水禽なりしを以て仕合せよしと湖邊に到りて之を調理し茶器を鍋に代用して鹽煮となし或は燒きなとして朝餐を了へ午前五時此處を發し松林中を縱貫し進む七露里餘にして松樹の密林は此邊にて絶え間もなく「クルビンスカヤ」農村に達したり村端より西南に向へば四面漠々として眼望定かならざる低原中に幾多の「プリヤーツキ」人の牧場と家屋とを認むるのみ進む八九露里國道に沿ひたる數町の遠景は瘴霧の爲めに朦朧として分明ならず此れより「ウダー」河に沿ひ南に進む十六露里許にして「アノホイスカヤ」農村に着し翌十一日七時此處を出發して「ウエルフヂウヂンスク」に向ふ村端より西南し「ウダー」河に沿ひ高原を過ぐる六七露里の間左方は低濕なる低原にして「プリヤーツキ」人の牧場及び家屋は散見したりしが午前十一時頃に至り北方より濃霧掩ひ來り殆んと咫尺を辨ずる能はず午後五時「ウエルフ、ヂウヂンスク」町に達したり

「ウエルフヂウヂンスク」町

「ウエルフヂウヂンスク」町は後貝加爾州中第一流の商業地なり市街の全部は「セレンガ」河に沿ひたる低地と及び高丘の上とに設けられ一千内外の家屋と八千以上の(男四、九六四、女三、〇三八)住民あり街衢四通八達人家稠密にして石造、煉化割合に多し重なる建築物は五寺院、郵便電信局、中學校、地方守備隊兵營、地方裁判所、警察署、市役所、監獄署、博物館、帝國銀行支店、火災保險會社支店、露清貿易擴張銀行、露清銀行支店、釀造所及一等二等商店等あり

商業の中心點なる市場は市街の殆んど中央大街の東側に於て設けらる各戸軒を連ね茶、麥粉、鐵器、陶磁器、雜貨品等を商ふ住民は大、小、白、露人、芬蘭土人、猶太人、韃靼人、波蘭人、清人「ブリヤーツキ」人及び「マラカン」人「ツガン」人「トングース」人等にして就中猶太人種は殆んど全市街に跋扈し全市商業の全權を握り射利の道に鋭き清人、歐露人、韃靼人等の力を合するも之れに當るを能はざるが如き勢力あり猶太人は英國の「ジュズ」に於けるが如く日本の穢多に於けるが如く露人が之れを輕侮して露人の列に位せざるにも係らず商業に敏捷にして精勤勵行貨殖に巧みなるは此の道に鋭き歸化獨逸人と匹敵するの手腕を有し露國六十一の種族中第一流の商才を有せり

市街の位置は、セレンガ河畔にあり町の西北端を距る露里許の處に公共渡船場あり此處を渡り清領「キャフタ」に通ずる露清貿易線と「エルクーツク」に通ずる莫斯科街道とあ

り陸路「チター」府に至る四百四十六露里浦鹽斯德を距る殆んど三千八百露里餘の西北に位し貝加爾湖東に於ける商業上の要勝地として露清の貿易東西部西比利亞の貨物は大抵此處に輻輳す物價の概して廉ならざるは是れ千八百九十七年八月の水害と後貝加爾州線起工の爲め工夫幾千の來集したるが爲めにして現に飲食品は其當時二倍乃至三倍の價格にまで暴騰せるものあり之れが爲め細民の困難無定業者の窮迫と困難は甚しかりしが余が滞留中に起りたる殺人强盜事件は僅々三週間に三回ありしが一は無定業者の「セメンスキー」人三名相謀り「ウダー」河畔の農村より三十餘頭の牛羊を懇親を求めつゝありしが彼が全數の牛羊を賣り盡して懷の暖まるを見るや三名の兇漢は語巧みに彼れを酒店に誘ひ交々酒を强ひ酒中に痲痺劑を投じて彼れが昏倒するをまち辻馬車を雇ひて「ウダー」河畔にと馳せ行きたりしが憐む可き「ブリヤーツキ」人は此處にて八百留程の金を奪はれ絞殺せられて「ウダー」河底の藻屑と消え果てたり斯くて三名の「セメンスキー」は直ちに料理店に至り曉近き頃迄盜みし金を蒔き散して酒宴を催ほしつゝありしが强奪金分配の時に至り絞殺下手者の二名は各三百留宛を得て他の一人には殘りの百五十留を與へんとせるより茲に一場の爭論を生じ異議を唱へし一名は「ブリヤーツキ」人絞殺のことを口外せるより露顯して翌日悉く縛につきたり其次に起りたるは二名の强盜大斧を携さへ猶太人の窓を破りて侵入し老婦と小女とを一擊のもとに仆し主人が短銃を連發せるにも屈せず此れも腦天より頭の邊まで斬り下げ金品大凡二千留を奪ひて遁れ去りしも未だ逮捕の手懸りなき中三度目に起りたるは鐵道請負者が工事請負の下附金を請取り馬車を雇ひて町端より數露里を距りたる鐵道通過線路の林中を過ぐるを要擊し取者諸共に之れを銃殺し三千留を奪ひて遁れ去りたる兇漢ありしも是れまた踪迹分明ならずと云へり

余が此地に滞留するや三週間以上は天色朦朧として一日だも晴朗なる天候を見得ざりき午後に至れば太陽に光輝なく宛も幻燈に寫せる月の如く午後五時頃は月夜に似て天色何んとなく慘憺として一露里の遠方すら明かに認むる能はず午後十時半頃よりは天色次第に澄み午前五時頃までは星輝明らかに月光清らかなるは常の如くなりしを以て住民に「毎年斯の如く霧多きや」と問ひしに「否決して然らず之れが原因は二ヶ月前南貝加爾山の北部より野火を發し勢ひ日を追ふて益猛烈となり現今は延燒區域數百露里に擴張せる爲め之れが煙は貝加爾湖より吹き來る寒風の爲めに霧に變じ斯くは日光をして光を失はしむるなりと」

其六　第四回の遭難

六月三日午前五時清領蒙古方面へと志し此處を出發したり大街を北にと進み小坂を上れば時鐘樓と相對して今帝巡狩當時の奉送紀念門あり北すれば左方に守備隊兵營あり國道の右方は松樹の深林にして左方には斷崖を嚙む「セレンガ」河の急湍あり「セレンガ」の公共渡船場を超ゆれば西する二露里にして國道は二條に分れ貝加爾湖に達する國道は西南の方向を取り清領蒙古方面に向ふ國道は南方に走りて「セレンガ」河に近づけり此れより低原を横ぎる五露里の間は芝生の平野にして宛ながら青毛氈を布けるが如し午後一時頃より颶風起り次第に猛烈となり砂を捲き草を拂ふの勢ひ凄ましく日光は黄色を帶ひ須臾にして四顧の光景完く變じ濃霧の如き天候を現はしたり此れなん野火の烟煙にして北部より送り來れる貝加爾瓦の爲めに此地方より烟煙遠く南方に靡けるが爲めならん胡馬の鐵蹄重く霧中に彷徨して道を求むるが如く烟に咽びつゝ殆んど露里を進みし頃ほひ辛ふじて一の村落にと達したり各戸を叩きしも堅く門を閉ぢ窓戸を鎖して應ずるものなく滿村寂として夜半の如く漸く十五戸に及びし頃宛かも胡索克の門を披けるを機とし「余は東洋の旅客なり道途野火の烟煙に苦しめられ辛ふじて此處まて迚とり付きたりしかも各戸の閉鎖に今は身を容れ困苦を凌ぐべき處なし幸に孤客を憐むの情あらは枉げて少時の休憩を與へよ」と叩頭すれば胡索克は眉を顰め「そは氣の毒のことなり煙資の如き苦境に陷ゐりたる公が難澁察するに餘りあるなり今を去る五十餘日前貝加爾湖邊に野火を發せし以來は風の草を靡かしむるが如く火勢は今や幾百露里に亘り峻嶺幽谷原野の區別なく之れを焦土に歸せしめつゝある損害は幾十萬留なるや概算し得可きにあらざるも樹林地のみにても十萬留以上を下らざる可く草原地の被害野火の瘴烟に因りて受くる耕作物の被害また此れ少々の金額にはあらざる可しされば野火の烟四野を壓して來るや園村戸を鎖し戸隙より烟の侵入せんことを恐れて他出するもの殆んど稀なりとにかく内に入て暫時休息せらる可し」と導かるゝまゝ此處に晝餐し颶風の穩かなるを待ちたり此地は「ムービンスカヤ」と名くる小村落にして戸數五十に上らず住民は重もに牧畜耕耘に從事し胡索克兵は唯一戸あるのみ其他は「ブリヤーツキ」人及歐露人の混住なり午後三時風歛まり煙は濃霧に化し四野何となく暗憺の風色を現はせしが午後三時半余は此處を發して西南に向ひたり行程三四露里の間は農家此處彼處に散在して殖民地の光景あり午後四時半頃より北風再び起り野火の煙は勢ひ鋭く半焦せる草葉燒燼せる樹枝等

進む露里許にして風勢强烈を加へ烟煙愈濃厚を增し時々旋風を起して煙は輪狀をなし火片は箒の如し午後四時半に至り貝加爾瓦は益猛烈を加へ颯々として梢を鳴らし砂を捲き四顧暗憺天地晦瞑咫尺をさへ辨ずる能はず須臾にして呼吸苦しく頭痛し眼を開き難く馬上に俯伏したるまゝ道を擇ぶの遑もなく前程指して馳せ出したりしが殆んど四五町も進みし頃ほひ一陣の旋風は朦々たる黑煙を轉がし燃えたる儘の枯枝焦れたる木の葉を攫みつゝ砂礫を捲き草葉を奪ひ猛然として落ち來るを見るより「這は大事なりと「ウラル」に一鞭を加へ辛ふじて衝路を潛り拔け低濕なる平原にと馳せ入りたり

されど黑烟は天を煽り地を掃き火片は蝗の如くに飛び來たり左右を見廻はす機會だになく此時胡馬「ウラル」は鐵蹄の運びも遲く苦しき嘶と哀しき嘶聲を洩らして疲れ惱みたるが如き模樣なりしが余も亦馬上に堪へ難きより飛び下り轡を執りて朦々たる黑烟の裡を衝きつゝ前進の方向を定むる遑もなく唯だ脚に任せて駈け出したり驢がて二露里も馳せたりと覺しき頃鷄の鳴く音狗の吠ゆる聲を耳にせるよりさては人家も近からんと俄かに勇氣つき烟煙の少しく上部を轉がるが如くに靡けるを機とし再び「ウラル」に跨がり一鞭を加へて平原を左右にかけ廻る中不圖も農家と覺しき一の門前にと辿りつきたり

蘇生の思をなし落つるが如くに馬を下り速しく門を排して庭に入り苦しきまゝ破れん許りに戸を敲きしに一婦人戸を開き「速かに入り給へ」と促せるに心進み轉がる如くに內に入りたり此處は厨室と覺しく二名の少婦は椅子に憑り編物をなしつゝあり一名の老人は眼鏡越しに余を瞥見し「君は何處の人にして何の爲めに此處に來りしぞ」と問ふ「余は東洋日本帝國の旅行者なり旅行の途次野火の烟に惱まされ辛くも此處まで辿りつき人家のあるを認めて門前を騷したる罪近れ難し餘に窮鳥懷に入れば獵夫も之を殺さずと希くば仁慈を垂れ余をして暫時此處に休憩なさしめ玉へ」と叩頭しつゝ乞へば眼を閉ぢ眉を顰めつゝ聽き居たりし老人は白髮に波打たせ「さては君は東洋日本帝國の臣民なるか道は千載の一遇老人生前の本望なり厭ふとなくんば幸に數日間此處に滯在して旅中の疲勞を休められよ」と自ら椅子を取て余に坐を與へ少婦に命じて茶を沸かさしむる等厚遇の意外なるに余は怪みつゝも彼が言ふ儘になし此處に一泊するとに決したり少婦の案內に連れて別室に到りしが室の一方には別室に通ずる戸あり其戸の開き居るを幸ひ竊かに之を窺へば何たる不思議ぞ狹き室內には日本刀あり鉾の穗先あり冑あり陶器あり漆器あり山水の掛物ある等余は實に事の意外なる

に喫驚したり間もなく老主人の足音徐かに戸を排して入り來りたる異樣の風躰には再び絶倒せむ許りに喫驚したり異樣の老主人は日本の服裝をなせるなり何處より持ち來りしか粗末なる日本服を左褄に合せ革帶を緊め上下を着したる躰無骨の中にも可笑しく可笑しき中にも日本懐かしと感ぜられぬ樣がて主人は座につき言ふやう「日本の旅行者よ余は本日貴客の旅情を慰めむが爲め日本服を着して君を驚かせしなり回顧すれば三十八年前千八百六十年の春余は歐露の「フィンランド」より四名の同胞と帆船に乘じて堪察加方面へ海獸獵にと出發したりしが一日海風大に起り二名の同胞は敢なくも海波に奪はれ三晝夜漂泊せる後辛ふじて「サハレン」島に漂着し漸く四五戸の漁村にと出でたり是れなむ「ギリヤーク」及び日本人の雜居漁場にして余等は日本人の好意により之が配下に勞働するとはなれり漁場の主人は日本人にして「アサカゴンペイ」安積權兵衛の事ならむ」と稱し活潑にしてよく漁夫を惠み余等同胞三名も二年の間彼が厚意を受け樂しくも勞働しつゝある中不幸にして同氏は疾病に罹り千八百六十三年春に至りて命旦夕に迫れる際余を枕頭近く招き遺産の分配及び後事を遺托し五月七日遂に黄泉の客とはなりたり星霜八九年は夢の如くに過せしが二名の同胞は脆くも疾病に驅られて遂に不歸の人とはなりぬ今を去る二十七八年の頃ならむ露領「クーリリスキー」群島(千島)と「サハレン」島(樺太島)との交換ありしより故主の遺産なる余等の漁場も完く露領となりしが望郷の念一日も忘るゝ暇なく終に意を決して漁具及び家財を「ギリヤーク」に賣却し西比利亞を經て本國へと旅行の途中不圖も帶妻し遂に此地に移住するに至り今は二百「サージェン」四方の大耕地と數多き家畜とを有し一名の男子と三名の女子とに侍かれ不足なく樂しくも老を養ひ得るに至りたり又余が着服は故主「アサカゴンペイ」の遺物にして別室には故主の遺品なる貴國の武器骨董あり」とて是れより老人は余を別室に導き一々日本品を示せる中兼て老人の案内ありしにや午後七時半頃より赤紫絹の襯衣に五色の帶をなせる若者桃色水淺黄緋色の織物に花模樣の衣裳を着せる村娘は翁媼と倶に來り集まりて間もなく十四五名とはなりたり彼等の多くは日本人を珍らしく感ぜしにや瞬もせず余を見詰め余の言語擧動に注目しつゝありしが來客中には「如何に日本人は小くして愛らしき者よ」など語り合ふもあり「如何に日本人は色黑き者よ」など耳語するもありたり纔がて數瓶の火酒雜鷄の丸燒羊燒肉鷄卵馬鈴薯等は卓上處狹きまでに並べられたりしが老主人の案内に酒宴は開かれ樂器(日本の風琴)は奏せられ男女混合の田舍舞踏の後は歌となり續きて晩餐となり午後十一時半頃に至り來客各々別れを告げ明日は茅屋に來たられよと握手しつ

〻再會を約して己が家にと歸り去れり。

六月四日老人の案内により牧場見物にと出懸けたり大耕地に並びて大牧場あり牛羊の頭數は合して五十に上るべく之れより耕地に入り麥、蕎麥發育の模樣を見了はりて後余は老人に別を告げんとせしに老人の言ふ樣「殆ど四十年の久しき故主の同國人に出逢ひたる昨日の喜びは夢の如く別離の情堪へ難し本日は余が娘の許に於て畫飯せむ馬車を驅らば瞬時にして到り得べし田舍の料理貴客の口腹には適せざるべけれども枉げて今夜は一宿し明朝此處を發し玉へかし」と此より室内に入り日本品陳列の小室に入り一々之を點檢せしに鎗の穗先きは銹を生じて餘程の古物と覺しく銘は判然せざりしも刀の銘は文久二年卯相州藤原良則とあり山水の掛物は天明乙己孟夏蘭山と記しあり漆器は飯櫃らしく表面の蓋は三階松の紋重箱の如きものゝ表面には笹リンドウの紋を何れも金箔にて畫きありしが漆は此處彼處と剝げ之れ亦餘程の古物と覺えき。案ずるに此等の諸物は何れも諸侯の寶拂ひしものを購ひたるものなるべきか。是れより余は四十餘年前に於ける日本の國體より當時の國運を說き明かせしに老人は非常に感ぜし模樣なりしが「眞に左なり余が「サハレン」島にあるの日、日本人は世界第一の怜悧なる人種にして勇猛なる國民と信じつゝありしが果せる哉老眼の違はざりしとよ」と自ら見識を誇り或は日本を譽め抔しつゝ雜談數刻に亘りし折り娘の許よりは迎ひの馬車來りしを以て老人の一家と共に之れに打ち乘り七八分にして一農家の門前に馬車の止まると同時に此家の主人は出て來り初對面の挨拶をなし車より老人を扶け下ろし余を室内へと導けり此處に七八名の來客あり其中には昨日已に見たる人もありしが雜談の中彼等は余に向ひ「日本に鐵道あるや電信あるや人種の血色黑くして體格小なるや馬は如何に、穀物、蔬菜、菓物の成熟は如何に」など頻はしき程に質問したりしを余は一々之に答ふる樣「現今日本には各村落間に鐵道あり電信あり電話あり市街には英京倫敦の如く高架鐵道あり地下鐵道あり電話は蜘蛛の巢の如く電線は網の如く瓦斯燈は電燈と變じて常に不夜城の觀あり人民の體格は余の如きものに非す血色淡紅身躰の壯健肥大なると歐露人に讓らず馬は肥え逞くして「トムスク」馬と伯仲し牛は亞米利加種、穀物は一年二度を收穫し得べき地あり菓物蔬菜の夥しき數へ得らるべきものに非らず」と少しく誇大に答へたるを彼等は眼を廻さん許に驚きし田舍の質朴可笑しく覺えたり間もなく酒筵は開かれ舞踏の終るを待ち老人の許へと歸りぬ

六月五日厚く老主人に謝し此處を出發したり西南する五露里許の間國道の兩傍は凡

て大耕地大牧場のみにして原野の廣濶殖民地の模樣何となく北海道幌向原野の光景あり此より西南に進む八露里許にして峽谷に入れば一村落あり「クリユチナヤ」と名げ戸數六十餘住民は重に耕牧に從事せり地味豐饒蔬菜よく成熟し麥類の收穫割合に多しといへり此處にて昼食し午後二時西南に向つて發す是より十五六露里は凡て芝生の原野にして唯野鼠と小鳥の飛ぶを見るのみ胡馬を促しつゝ十五六露里許を進みし頃ほひ高丘を下り盡くれば一湖水あり水涸濁にして白色を帶び掬して之を味ふに鹽氣強し土人此鹽池を白湖一名鹹湖と名け之を煮て食鹽を製すといふ周圍大凡三十餘露里對岸には「ブリヤーツキ」人の家屋を見る

海波の如き高原を過ぐる八九露里にして下り盡くる處驛傳あり此地は「アルブゾフスカヤ」と名け「ウエルフチウヂンスク」を距る西南九十三露里の處にあり地位南北より傾ける高原の間にある一軒家にして少しく隔てゝ唯だ「ブリヤーツキ」人の一戸あるのみ六月七日此處を發して西南に向ふ六七露里にして「ブリヤーツキ」人の部落に達したり戸數六住民は牧畜を業とし男女二十五名の中十二名は露國に宗化せるのみ此時余は中食せんと欲し戸を叩き露語もて「暫く此處に休憩せしめよ肉ありや牛乳ありや卵ありや」と問ひしに問はれたる彼等には解せざりけむ何事をか話し合ひたるのち大釜を指し「ブリヤーツキ」語にて「湯の必要ありや」と語れる如く覺えしも余にはまた「ブリヤーツキ」語は解せん樣もなく手眞似もて牛を示し鷄を指し卵の形を畫きなどして啞の如き問答をなしつゝありしが暫くにして一名の散髮「ブリヤーツキ」人來り露語にて「君は何處より來り給ひしぞ昼食を欲し玉ふか茶を求め玉ふか余が家には今朝搾りたる牛乳は少しく殘りあれども肉類は君に供すべき一片だもなし鷄卵を好まば進ずべし」と少壯の「ブリヤーツキ」に何事をか命したり

「ブリヤーツキ」人は元來蒙古人種の一にして周代には之を獫狁と云ひ秦代にては之を匈奴と稱せし慓悍御し難き遊牧種族たり屢々中華の安眠を攪亂して歴朝の名君を惱ましたりしが秦の始皇をして萬里の長城を築くに至らしめたるも弘安の昔我が朝に寇して十萬の兵を失ひたる元朝の兵種は此地方より南方に跋扈陸梁せる蒙古人種に外ならず

時變はり星移りて露領に編入せられたる爾來は漸くに露化して彼等の先祖が「ゴビ」又は「シャモ」の大砂漠を蹂躙し遠く中華を侵略したるが如き勇氣は全く消盡し去り今や酒と煙草とに耽り牧羊の傍ら汚き土間に犬の如く安眠を貪るを無上の樂となすに至れり彼等の家屋には二樣あり天幕製のものは之を「ユールト」と名けて遊牧的に用ひ露